

# 出合遺跡第45・46次発掘調査報告書

2013  
神戸市教育委員会

## 序

神戸市西区は、緑豊かな平野部と丘陵部がひろがり、古来より人々の生活が営まれていました。その足跡は、随所で窺い知ることができます、近年の発掘調査において、より明確なものになってまいりました。

出合遺跡は、明石川右岸に所在し、過去の数次にわたる発掘調査によって、様相が明らかになった遺跡のひとつで、弥生時代以降の遺構・遺物が数多く確認されています。

今回の発掘調査は、宅地造成地内の街路予定地において実施いたしました。2ヵ年にわたる調査の結果、弥生時代前期から室町時代の遺構・遺物が確認され、同時期の集落跡であることが明らかになりました。

これらの成果は、西区のみならず神戸の歴史像を探る上でも、重要な資料となりうるもので、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が上津橋地区宅地部会をはじめとする関係諸機関および地域住民の皆様の多大なるご理解とご協力によって実施することができましたことを、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

神戸市教育委員会

## 例　言

1. 本書は、神戸市西区平野町中津において発掘調査を実施した、ひきだしのしよ出合遺跡第45・46次調査の報告書である。
2. 当調査は、上津橋地区宅地開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会が上津橋地区宅地部会の委託を受けて実施した。現地における調査は、第45次調査を平成22年5月17日～平成22年8月3日、第46次調査を平成23年6月6日～平成24年2月24日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 須藤 宏・池田 穀・浅谷誠吾・内藤俊哉・井尻 格・阿部 功が担当した。
3. 遺物整理作業は、平成22～24年度に神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、神戸市教育委員会文化財課 斎木巖、西岡誠司、阿部敬生、内藤俊哉、藤井太郎、須藤、池田、浅谷が担当した。遺物実測を、金属製品および木製品については、文化財課 中村大介、田中泰子が、それ以外は須藤、池田、浅谷が行った。また、遺物写真の撮影は、西大寺フォト 杉本和樹氏が行った。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「前開」、「須磨」、「東二見」、「明石」神戸市発行の2,500分の1地形図、「上津橋」、「玉津」を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で示した。
6. 本書の執筆は、「第3章第6節」について、中村が、「第4章」について、パリノ・サーヴェイ株式会社が、それ以外は池田、浅谷が担当し、池田が編集を行った。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 下記の作業については委託を行った。
- 堀削等作業 (株) 安西工業  
航空写真測量 (株) G E O ソリューションズ  
材質調査 パリノ・サーヴェイ株式会社
8. 現地での発掘調査の実施には、上津橋地区宅地部会と内外エンジニアリング株式会社の全面的な協力を得た。

## 目　次

序	
例言	
目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査組織	2
(3) 調査の経過	3
第2節 出合遺跡の立地と歴史的環境	5
(1) 遺跡の立地	5
(2) 歴史的環境	5
(3) 既往の調査概要	9

第2章 調査の成果（遺構）	13
第1節 基本層序	13
第2節 14トレンチ	13
第3節 15トレンチ	16
第4節 16トレンチ	16
第5節 17・18トレンチ	21
第6節 19トレンチ	25
第7節 20・21・22トレンチ	29
第3章 調査の成果（出土遺物）	36
第1節 14・16トレンチ出土遺物	36
第2節 17・18トレンチ出土遺物	38
第3節 19トレンチ出土遺物	42
第4節 20・21・22トレンチ出土遺物	48
第5節 遺構に伴わない出土遺物	55
第6節 金属製品	57
第7節 木製品	59
第4章 自然科学分析	63
第1節 出合遺跡第45次出土木製品の樹種	63
第2節 出合遺跡第46次出土木製品・炭化材の樹種	68
第5章 まとめ	79
第1節 遺構について	79
第2節 出土遺物について	80
第3節 弥生時代の出合遺跡について	81

## 挿 図 目 次

fig. 1 出合遺跡の位置	1
fig. 2 調査地トレンチ配置図	3
fig. 3 周辺の遺跡 (S=1 : 50,000)	8
fig. 4 出合遺跡の調査地 (S=1 : 10,000)	10
fig. 5 トレンチ配置図および土層断面模式図	14
fig. 6 14トレンチ第1・2遺構面平面図	15
fig. 7 15トレンチ第1遺構面平面図	15
fig. 8 16トレンチ第1遺構面平面図	17
fig. 9 16トレンチ第2遺構面平面図	18
fig. 10 16トレンチ第3遺構面平面図	19
fig. 11 16トレンチSB1604平・断面図	20
fig. 12 16トレンチSK1620平・立面図	20
fig. 13 16トレンチSK1606平・立面図	20
fig. 14 16トレンチSK1607平・立面図	20
fig. 15 17トレンチSB1703平・断面図	21
fig. 16 17トレンチSB1706平・断面図	21
fig. 17 17・18トレンチ第1・2遺構面	22
fig. 18 18トレンチSB1804平・断面図	23
fig. 19 17トレンチSB1707平・断面図	24
fig. 20 19トレンチ第1遺構面平面図	25
fig. 21 19トレンチ第2遺構面平面図	26
fig. 22 19トレンチ第3遺構面平面図	27
fig. 23 19トレンチ第4遺構面平面図	28
fig. 24 20トレンチST2001平・断面図	29
fig. 25 20・21・22トレンチ第1遺構面平面図	30
fig. 26 21トレンチST2101平・立・断面図	31
fig. 27 20・21・22トレンチ第2遺構面平面図	32
fig. 28 20トレンチSB2021平・断面図	33
fig. 29 21トレンチSB2021平・断面図	33
fig. 30 20・21トレンチ第3遺構面平面図	34
fig. 31 20トレンチSB2031平・断面図	35
fig. 32 14・16トレンチ出土遺物	36
fig. 33 16トレンチST1601出土遺物	37
fig. 34 16トレンチ出土遺物（第3遺構面）	38
fig. 35 17・18トレンチ出土遺物（1）	39
fig. 36 17・18トレンチ出土遺物（2）	40
fig. 37 18トレンチSB1804出土遺物	41
fig. 38 19トレンチSD1912出土遺物	43
fig. 39 19トレンチ出土遺物（第3遺構面）	45
fig. 40 19トレンチ出土遺物（第4遺構面）	46
fig. 41 20・21トレンチST2001・2101・2102出土遺物	47
fig. 42 20・21・22トレンチ出土遺物（第1遺構面）	49
fig. 43 20・21・22トレンチ出土遺物（第2遺構面）	50
fig. 44 20トレンチSD2025出土遺物	51
fig. 45 20・21トレンチ出土遺物（第3遺構面）	52
fig. 46 20トレンチSX2031出土遺物	54
fig. 47 遺構に伴わない出土遺物	56
fig. 48 出土鉄製品	57

fig. 49 鉄釘使用状況模式図	58	fig. 54 出合遺跡第46次の木材（1）	74
fig. 50 木製品（SD1912）①	60	fig. 55 出合遺跡第46次の木材（2）	75
fig. 51 木製品（SD1912）②	61	fig. 56 出合遺跡第46次の木材（3）	76
fig. 52 出合遺跡第45次の木材（1）	66	fig. 57 出合遺跡第46次の炭化材（1）	77
fig. 53 出合遺跡第45次の木材（2）	67	fig. 58 出合遺跡第46次の炭化材（2）	78

## 表 目 次

表1 出合遺跡調査一覧	10	表4 出合遺跡第46次の樹種同定結果	69
表2 ST2101出土鉄釘一覧	58	表5 炭化材の時期別種類構成	71
表3 出合遺跡第45次の樹種同定結果	64	表6 木製品の時期別・器種別種類構成	71

## 挿 図 写 真 目 次

写真1 調査前状況（18トレンチ付近）	4	写真4 遺物実測作業	4
写真2 発掘調査作業	4	写真5 出土鉄製品X透視像	82
写真3 遺物整理作業	4		

## 写 真 図 版 目 次

図版1 調査地遠景（南西から）、調査地遠景（北西から）		図版16 17トレンチSB1706出土遺物	
図版2 調査地各構造		図版17 17トレンチSD1702出土遺物、17トレンチSB1703出土遺物、 17トレンチSB1705出土遺物、18トレンチSD1811出土遺物、 18トレンチSD1812出土遺物	
図版3 出土遺物（1）		図版18 18トレンチSD1803出土遺物、18トレンチSD1804出土遺物、 18トレンチSB1804出土遺物	
図版4 出土遺物（2）		図版19 19トレンチSD1912出土遺物	
図版5 15トレンチ第1遺構面（北から）、16トレンチ第1遺構面 (北西から)、16トレンチSD1619（北東から）		図版20 19トレンチSD1953出土遺物、19トレンチSD1961（下層） 出土遺物、19トレンチSD1932出土遺物	
図版6 14トレンチ第1・2遺構面（東から）、16トレンチST1601 (東から)、16トレンチ第3遺構面（SB1604周辺）(北から)、 16トレンチSK1606（手前）・SK1607（奥）（北から）		図版21 19トレンチSK1934出土遺物、19トレンチSD1934出土遺物、 19トレンチSK1931出土遺物、19トレンチSK1946出土遺物	
図版7 16トレンチSK1620（北西から）、16トレンチSK1620（下 層）、17・18トレンチ第1遺構面（南西から）		図版22 19トレンチSK1939出土遺物、20トレンチST2001出土遺物、 20トレンチSD2003出土遺物、21トレンチST2101出土遺物	
図版8 17・18トレンチ第1遺構面（空中写真）、18トレンチSB1804 (南から)、18トレンチ第1遺構面（南東から）、18トレンチ 第1遺構面（西から）		図版23 21トレンチSB2121出土遺物、21トレンチSB2122出土遺物、 20トレンチSD2024出土遺物、20トレンチSD2023出土遺物	
図版9 17トレンチSB1705【住居内土括】(北東から)、17トレン チSB1703（北から）、18トレンチSD1812（北東から）、 17トレンチSB1707（北から）、18トレンチSD1811（遺物 出土状況）、18トレンチSD1811（遺物出土状況）		図版24 20トレンチSD2022出土遺物、20トレンチSD2025出土遺物	
図版10 19トレンチ第2遺構面（南東から）、19トレンチSD1912 (北西から)、19トレンチSD1912（北東から）		図版25 20トレンチSD2031出土遺物	
図版11 19トレンチ第1遺構面（西から）、19トレンチ第3遺構面 (南東から)、19トレンチ第3遺構面（SK1931周辺）(東が ら)		図版26 20トレンチSD2031出土遺物、20トレンチSB2031出土遺物、 20トレンチSK2031出土遺物	
図版12 21・22トレンチ第1遺構面(北西から)、21トレンチST2102 (北西から)、20トレンチST2001（西から）、21トレンチ SB2121（北西から）		図版27 遺構に伴わない出土遺物、金属製品	
図版13 20トレンチSB2021（北から）、20・21トレンチ第3遺構 面（東から）、20トレンチSB2031（北から）		木製品（SD1912）	
図版14 14トレンチSD1416出土遺物、16トレンチST1601出土遺物、 16トレンチST1606出土遺物			
図版15 16トレンチSK1607出土遺物、16トレンチSK1620出土遺物			

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### (1) 調査に至る経緯

出合遺跡は神戸市西区玉津町出合、中野、王塚台、平野町中津に所在する遺跡で、旧石器時代～中世の複合遺跡であることが、過去の発掘調査により明らかになっている。

今回の調査は、宅地開発事業に伴うものである。平成21・22年度に試掘調査、平成22・23年度に発掘調査（第45・46次調査）を実施した。

出合遺跡は明石川西岸の沖積地および段丘上に所在するが、今回の調査地は同遺跡の北端部に位置し、明石川河川敷近くの沖積地にあたり、現況においては、大半が耕作地として利用されている。

出合遺跡の周辺においても、遺跡が多く所在し、明石川を中心とした沖積地あるいはその縁辺の段丘上、丘陵上は、人々の暮らしに適した地域であったことは推察されるが、現在においても、緑豊かな自然環境で、肥沃な沖積地がひろがり、その多くが耕作地として利用されている。

近年、周辺において道路整備や宅地開発が進み、その様相も変化しつつあるが、温暖で、且つ、豊かな自然に囲まれた地域であることに変わりがない。

調査地とその周辺も、近年のさまざまな開発事業によって、その景観に変化がみられるものの、古来よりの風光明媚な景色が随所に残されており、生活環境に恵まれた地域である。

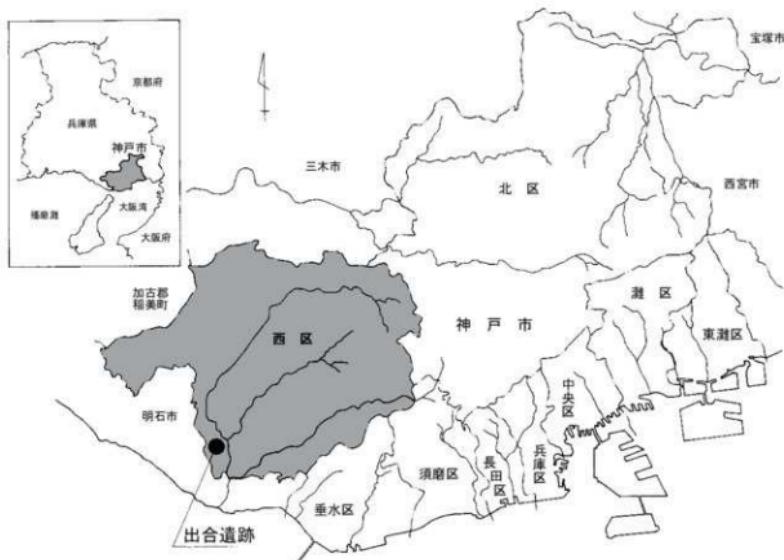


fig. 1 出合遺跡の位置

## (2) 調査組織

神戸市文化財保護審議会

史跡・考古資料担当

工樂 善通 大阪府立狹山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

平成21年度

教育長	橋口 秀志	文化財課主査	丹治 康明
社会教育部長	大寺 直秀	同	安田 滋
教育委員会参事	柏木 一孝	同	斎木 巍
(文化財課長事務取扱)		事務担当学芸員	中谷 正
社会教育部主幹	渡辺 伸行	調査担当学芸員	須藤 宏
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)			井尻 格
埋蔵文化財指導係長	丸山 潔	遺物整理担当学芸員	黒田 恭正
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	保存科学担当学芸員	佐伯 二郎
			中村 大介

平成22年度

教育長	橋口 秀志	同	斎木 巍
社会教育部長	大寺 直秀	事務担当学芸員	佐伯 二郎
教育委員会参事	柏木 一孝	調査担当学芸員	須藤 宏
(文化財課長事務取扱)			内藤 俊哉
社会教育部主幹	渡辺 伸行		井尻 格
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)			阿部 功
埋蔵文化財指導係長	丸山 潔	遺物整理担当学芸員	西岡 誠司
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	保存科学担当学芸員	中村 大介
文化財課主査	丹治 康明		
同	安田 滋		

平成23年度

教育長	永井 秀憲	事務担当学芸員	佐伯 二郎
社会教育部長	大寺 直秀		井尻 格
教育委員会参事	安達 宏二		中谷 正
(文化財課長事務取扱)			小林さやか
社会教育部主幹	千種 浩	調査担当学芸員	池田 穀
(埋蔵文化財係長事務取扱)			阿部 功
文化財課主査	丹治 康明	遺物整理担当学芸員	西岡 誠司
同	安田 滋		阿部 敏生
同	斎木 巍	保存科学担当学芸員	中村 大介
文化財専門役	丸山 潔		

平成24年度

教育長	永井 秀憲	事務担当学芸員	佐伯 二郎
社会教育部長	東野 展也		井尻 格
教育委員会担当部長	安達 宏二		中谷 正
(文化財課長事務取扱)			小林さやか
埋蔵文化財担当課長	千種 浩	遺物整理担当学芸員	池田 純
(埋蔵文化財係長事務取扱)			内藤 俊哉
文化財課担当係長	丹治 康明		浅谷 誠吾
同	安田 滋		藤井 太郎
埋蔵文化財センター担当係長	斎木 嶽		阿部 功
文化財専門役	丸山 潔	保存科学担当学芸員	中村 大介

(3) 調査の経過

今回の調査（第45・46次調査）は、宅地開発事業のうち、埋設管等の敷設予定のある街路部分において実施された。周辺においては、道路建設に伴う第11～14次調査（昭和61年～平成3年）、住宅建設に伴う第31次調査（平成15年）、第42次調査（平成20年）、圃場整備事業に伴う第34・35・43・44次調査（平成17～21年）などが実施されており、弥生時代前期～中世の遺構・遺物が確認されている。

第45次調査は約640m<sup>2</sup>を対象に平成22年5月17日～8月3日、第46次調査は約1,800m<sup>2</sup>を対象に平成23年6月6日～平成24年2月24日において発掘調査が実施された。その後、出土遺物等の整理作業、発掘調査報告書作成等の事業を実施し、平成25年3月31日に完了した。

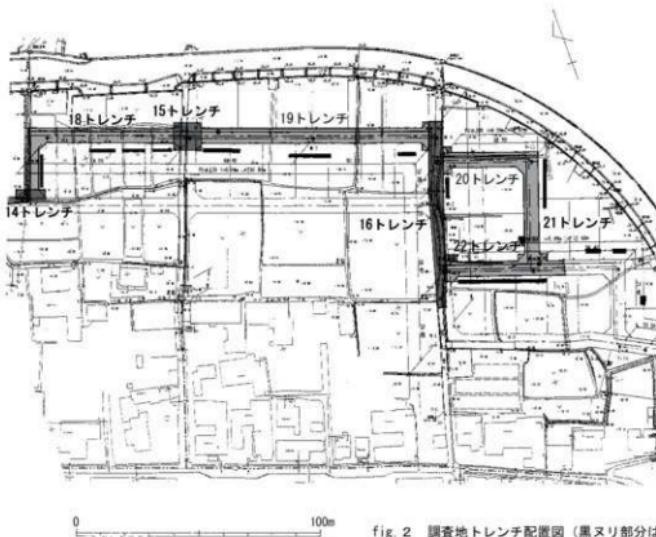


fig. 2 調査地トレンチ配置図（黒ヌリ部分は試掘トレンチ）

平成22年度においては、第45次調査について、14トレンチ、15トレンチ、16トレンチを対象として実施した。尚、トレンチの番号については、第45次調査に先立って実施した試掘調査における各トレンチの番号に連続するかたちとしたため、14トレンチ以降の番号呼称を用いての地区設定を行った。

第45次調査においては、弥生時代前期～近世の遺構、遺物が確認された。

14トレンチにおいては、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構、遺物を中心に、15トレンチにおいては、古墳時代前期、中世の遺構、遺物を中心に、16トレンチにおいては、弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代前期の遺構、遺物を中心にそれぞれ確認された。

平成23年度においては、第46次調査について、17トレンチ、18トレンチ、19トレンチ、20トレンチ、21トレンチ、22トレンチを対象として実施した。各トレンチの番号についても、先年度の第45次調査における各トレンチの番号に連続させるかたちとした。

第46次調査においても、第45次調査の調査成果とほぼ同じで、弥生時代前期～中世の遺構、遺物が確認された。

17トレンチ、18トレンチにおいては、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構、遺物を中心に、19トレンチにおいては、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期の遺構、遺物を中心に、20トレンチ、21トレンチ、22トレンチにおいては、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構、遺物を中心にそれぞれ確認された。

調査成果の概説については、次章において行う。



写真1 調査前状況 (18トレンチ付近)



写真2 発掘調査作業



写真3 遺物整理作業



写真4 遺物実測作業

## 第2節 出合遺跡の立地と歴史的環境

### (1) 遺跡の立地

出合遺跡は明石川中流域西岸の沖積地および段丘上に立地する。

同地域を南流する明石川は、櫛谷川、伊川などの支流と合流し、播磨灘に注ぐ。これらの河川流域にひろがる沖積地は、主に耕作地として利用されており、また、背後には丘陵地がひろがり、長閑で緑豊かな風景がひろがる地域である。近年、道路整備や住宅開発が進み、ベッドタウンとしての発展もみられ、その様相は徐々に変化しつつある。

### (2) 歴史的環境

上記のとおり、さまざまな環境に恵まれた同地域は、古来より人々の生活が営まれていたことが明らかで、市内でも有数の遺跡の密集する地域のひとつである。

#### ①旧石器時代

出合遺跡の周辺においては、同時期の遺物を出土した遺跡は見当たらないが、明石川上流域の神出町に所在する金棒池、拍子ヶ池などのため池の周囲から、数多くの石器類が採取されている。その他、このような石器類の出土がみられる遺跡も複数所在するが、数量的には少ない。

#### ②縄文時代

明石川流域や旧明石郡域における縄文時代に属する遺跡は、多いとはいがたいが、標識遺跡となっている遺跡も所在する。

草創期に属すると考えられる有茎尖頭器が、出合遺跡に近接する印路遺跡や玉津田中遺跡、明石市野々池遺跡の他、青谷遺跡、高津橋大塚遺跡などでも確認されている。

早期に属すると考えられる遺跡としては、出合遺跡から南西に約6kmに位置する狩口台遺跡があげられる。同遺跡からは、押型文土器が数点出土している。

前期および中期に属すると考えられる遺跡は、同地域においてはあまり認められないが、出合遺跡から南東に約6kmに位置する大歳山遺跡において、直良信夫氏により大正末年～昭和初期に発掘調査が実施され、前期末にあたる土器片が数点確認され、いわゆる「大歳山式土器」の標識遺跡となっている。

後期および晩期の遺跡としては、出合遺跡に近接する印路遺跡、やや上流域の大畑遺跡、元住吉山遺跡などで、後期に属する土器片が出土しており、特に、元住吉山遺跡は直良信夫氏により昭和2年に発見された遺跡で、近畿地方の後期後半を代表する「元住吉山式土器」の標識遺跡となっている。また、晩期については、明石川対岸に位置する玉津田中遺跡などで、「滋賀里式」の土器が出土している。

#### ③弥生時代

西日本においては、弥生時代に属する遺跡は、それ以前のものと比較して急増するが、肥沃な沖積地がひろがる明石川流域においても同様で、同時期の遺跡は密集してみられる。

前期に属する代表的な遺跡として、出合遺跡の南および南東に位置する吉田遺跡、新方遺跡があげられる。吉田遺跡は大正末年～昭和初期に直良信夫氏により発掘調査が実施され、その出土遺物は今里幾次氏、小林行雄氏らの研究によって、近畿地方における最古段階の弥生土器資料として位置づけられた。また、新方遺跡においては、前期前半に属する縄文人的骨格で抜歯も行った人物の埋葬事例が確認され、近畿地方の最古例として注目されている。

前期に始まり、弥生時代のはば全般にわたって集落が継続する、中核的集落（拠点的集落）が各地で存在するが、明石川流域においては、出合遺跡に近い玉津田中遺跡や新方遺跡があげられる。玉津田中遺跡では、

集落域、方形周溝墓群によって構成された墓域、水田などが存在した生産域などが明確に確認され、中期後半に属する石包丁生産に関わる資料もみとめられる。また、新方遺跡では、中期以降において玉製品の製作が行われ、古墳時代中期にいたるまで継続していたことが確認されており、「玉つくり工房」の集落として注目されている。これらの母村集落の周辺には、「子村集落」と称される衛星集落が存在することが多く、同地域においては、玉津田中遺跡周辺の居住遺跡、小山遺跡、新方遺跡周辺の今津遺跡、今池尻遺跡などがあげられる。

中期後半に入ると、西日本の特に瀬戸内海沿海地域において、平野部（沖積地）の集落が減少し、丘陵上の集落がみられるようになる。これらは、山の尾根上や丘陵の最上部に立地することが多く、「高地性集落」とも称されている。これらに該当する遺跡として、明石川中流域の西神第50地点遺跡、櫛谷川流域の西神第65地点遺跡、城ヶ谷遺跡、青谷遺跡、伊川流域の表山遺跡、頭高山遺跡などがあげられる。

後期に入ると小村化が進み、母村集落の規模も縮小する。それと同時に新たな集落の出現もみられ、遺跡数も増大する。明石川下流域西岸に位置する吉田南遺跡も後期後半において規模が拡大する集落で、古墳時代中期にかけて中核的遺跡として位置づけられる。

その他、弥生時代に属する注目される資料としては、西神第65地点遺跡出土の石製の銅鐸鋳型、養田中の池遺跡、西神第38地点遺跡、頭高山遺跡出土の銅劍型石劍、青谷遺跡出土の鐵劍型石劍、さらに、出合遺跡から南東に約6kmに位置する投上遺跡において、銅鐸（扁平鉢六区袈裟襷文）が出土している。

#### ④古墳時代

明石川流域において最も古い段階の古墳は、明石川中流域の3世紀前半に築造されたと考えられる養田中の池遺跡の方墳で、その他、同時期の古墳として、西神第44地点遺跡の方墳や堅田神社境内1号墳、伊川流域の天王山4号墳などがあげられる。また、3世紀後半に築造されたと考えられるものとして、天王山5号墳（方墳）などがあげられる。

4世紀前半には、伊川流域に同地域最古の前方後円墳である白水瓢塚古墳（全長56m）が築造される。さらに、4世紀後半には、明石海峡に張り出した丘陵の突端部に大型前方後円墳である五色塚古墳（全長194m）が築造されるが、明石川流域周辺における古墳の築造数は少なく、印路C2・C3遺跡の方墳、伊川流域の高津橋大塚古墳、出合遺跡から西へ約6kmに所在する幣塚古墳がみとめられる程度である。続く5世紀前半には、出合遺跡の南縁の段丘上に王塚古墳（前方後円墳・全長74m）が築造されるが、同時期においても古墳の築造数は少ない。

5世紀後半に入ると、築造数が増加傾向になり、小規模な古墳が大半を占める。出合遺跡の一角を占める出合古墳群は、同時期以降、6世紀中葉にかけて築造が続くが、5世紀末葉に築造されたとされる同古墳群最大の古墳である亀塚古墳（出合1号墳）が注目されている。亀塚古墳は全長29mの帆立貝式古墳（円墳に造り出しが付設された古墳）で、周塚内より円筒埴輪、形象埴輪（石見型埴輪ほか）、須恵器甕・壺などが出土している。また、明石川流域は、5世紀末葉～6世紀初頭に帆立貝式古墳が数多く築造される地域であることが特筆される事象で、出合遺跡の北西丘陵上に位置する中村5号墳、櫛谷川流域の水谷大東古墳、伊川流域の天王山3号墳がこれに該当する。

6世紀代に入ると古墳の築造数はさらに増加し、多くの古墳によって形成される古墳群も多くなる。また、横穴式石室を埋葬施設とする古墳も徐々に増加し、6世紀中葉以降には主流となり、その多くが小規模な円墳であるが、狩口台きつね塚古墳（6世紀後半・直径26m）などの大型円墳や舞子東石ヶ谷2号墳（6世紀中葉・全長30m）、金棒池1号墳（6世紀後半・全長30m）、大歳山2号墳（6世紀後半・全長34m）など

の前方後円墳もみられる。

一方、明石川流域の集落遺跡については、下流域を中心に数多く分布するが、玉津田中遺跡、新方遺跡、吉田南遺跡が中核的集落としてあげられる。新方遺跡においては、5世紀代の堅穴建物群や多量の滑石製品を伴う祭祀遺構、玉製品生産遺構などが確認されており、注目される資料となっている。また、韓式系土器などの渡来系集団に関連する資料も多く、出合遺跡内においても、「出合窯跡」と称される4世紀後半～末葉に築造された百濟地域の特色のある半地下式登窯が確認されており、また、5世紀後半～6世紀前半の韓式系土器も確認されている。4～6世紀代に属する韓式系土器は、明石川流域においては、多くの出土がみとめられ、中核的集落である玉津田中遺跡や吉田南遺跡をはじめ、印路遺跡、白水遺跡などで確認されている。また、伊川下流域東岸段丘上に位置する寒風遺跡においては、朝鮮半島源流の建物と考えられている「大壁造り建物」が確認されており、渡来系集団との深い関連がうかがえる。

須恵器生産に関連する遺跡もいくつか確認できる。出合遺跡から西へ約5kmに位置する鴨谷池窯、赤根川金ヶ崎窯は、6世紀代より操業が開始された窯跡と考えられている。

#### ⑤古代（飛鳥時代～平安時代中期）

出合遺跡から東へ約2kmの明石川東岸の段丘上に位置する高津橋・岡遺跡は、古墳時代末期～飛鳥時代にかけて営まれた集落で、多くの掘立柱建物も確認されている。また、吉田南遺跡においては、奈良時代後期～平安時代前期の計画的配置の掘立柱建物群や木橋などが検出されており、これらは官衙に関連する遺構と推測され、「明石郡衙」の推定地とも目されている。さらに、明石川対岸丘陵上の太寺廃寺遺跡は、明石川流域唯一の奈良時代創建と考えられる寺院跡で、古代山陽道の「明石駅家」にも推定されている。

生産遺跡としては、出合遺跡の北西約2kmに位置する高丘古窯址群は、古墳時代末期～奈良時代に操業していた須恵器生産窯で、鶴尾の生産も確認されている。また、伊川流域の白水遺跡においては、11世紀前半に属する梵鐘鋳造遺構が検出されている。

#### ⑥中世以降（平安時代後期以降）

平安時代以降においては、多くの集落が形成されたと考えられ、同時期に属する遺跡数も急増する。

出合遺跡においても、平安時代後期～鎌倉時代前期に属する遺構が数多く確認されており、今回の調査においても検出されている。また、近接する玉津田中遺跡や二ツ屋遺跡において、園地遺構や礎石建物を伴った集落が確認されており、地域の有力者の邸宅跡の可能性が高い。

明石川流域を含む東播磨地域を特色づけるものに古来より連續と行われている須恵器生産があるが、11世紀後半には明石川上流域に位置する神出古窯址群、12世紀後半には明石市域西部に位置する魚住古窯址群において操業が開始され、西日本を中心に広く流通していたことが確認されている。また、窯業技術を活かした瓦生産も盛んで、須恵器生産と同時に行われていたが、近年、明石市域西部に位置する林崎三本松瓦窯の調査が実施され、都の需要などに基づいた生産が行われていたことが、出土資料から明らかになった。



- |            |             |               |              |            |                 |
|------------|-------------|---------------|--------------|------------|-----------------|
| 1. 出合遺跡    | 11. 寒風遺跡    | 21. 丸塚遺跡      | 31. 西神65地点遺跡 | 41. 鹿芸町遺跡  | H. 白水城廻古墳       |
| 2. 苗田遺跡    | 12. 表山遺跡    | 22. 原住遺跡      | 32. 西神50地点遺跡 | 42. 山下町遺跡  | I. 天王山古墳群       |
| 3. 吉田南遺跡   | 13. 上施遺跡    | 23. 小山遺跡      | 33. 西神47地点遺跡 | 43. 太寺寺遺跡  | J. 魁神山古墳        |
| 4. 新方遺跡    | 14. 池上口ノ池遺跡 | 24. ニッケ屋遺跡    | 34. 畠田古窯址    | A. 出合名古保古墳 | K. 西神第44地点古墳    |
| 5. 今津遺跡    | 15. 投上口擧出土地 | 25. 日輪寺遺跡     | 35. 西神洞地古墳跡  | B. 松陰新田吉原群 | L. 西神第45地点古墳    |
| 6. 高津橋岡遺跡  | 16. 大鹿山遺跡   | 26. 原住小山遺跡    | 36. 高丘古窯址群   | C. 中村古墳群   | M. 桜谷古墳群        |
| 7. 高津橋大塚遺跡 | 17. 犀口台遺跡   | 27. 五津田中遺跡    | 37. 野々石遺跡    | D. 王塚古墳    | N. 爪田神社古墳群      |
| 8. 今北尻遺跡   | 18. 城ヶ谷遺跡   | 28. 印路遺跡      | 38. 嘉江川遺跡    | E. 水谷古墳群   | O. 犀口台社「かづね塚」古墳 |
| 9. 白水遺跡    | 19. 青谷遺跡    | 29. 大船遺跡      | 39. 嘉江出ノ上遺跡  | F. 高津橋大塚古墳 | P. 舞子古墳群        |
| 10. 貢井遺跡   | 20. 貢野遺跡    | 30. 西神第51地点遺跡 | 40. 嘉江京所遺跡   | G. 延命寺古墳   | Q. 舞子浜遺跡        |
|            |             |               |              |            | R. 五色塚古墳        |
|            |             |               |              |            | S. 小壹古墳         |
|            |             |               |              |            | T. 東仲之町古墳       |
|            |             |               |              |            | U. あさぎり寮古墳      |
|            |             |               |              |            | V. 中尾古墳         |
|            |             |               |              |            | W. カゲユ池古墳       |

fig. 3 周辺の遺跡 (S=1 : 50,000)

### (3) 既往の調査概要

出合遺跡は、昭和52年度に「出合ふれあいの街建設事業」に伴う第1次調査が実施されて以来、過去44次にわたって発掘調査が実施され、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認されているが、弥生時代、古墳時代、中世（平安時代後期～鎌倉時代前期）のものが数量的には多く確認されている。

#### ①弥生時代

集落域の一部が確認されており、堅穴建物の他、多量の遺物が出土した溝（10次・後期）などが検出されている。また、周溝墓（12次・後期、14次・中期）や水田（13次・中期）なども検出されている。いずれも、明石川本流に近い沖積地において確認されている。

#### ②古墳時代

出合遺跡の西半部にあたる段丘上において、17基もの古墳（1～5、7、9、37、39、41次・中～後期）が確認されており、古墳群（出合古墳群）を形成していたことが明確となった。中でも、5世紀末に築造されたと考えられる亀塚古墳（出合1号墳）【帆立貝式古墳・全長29m】は、古墳群中最大規模である。一方、集落に関しては、沖積地と微高地上において、中～後期の堅穴建物（1～5、7、9、20次）が数棟検出されている。また、段丘上においては、古墳群などとともに、初期須恵器段階の須恵器窯（出合窯）が検出されており、同窯出土資料は初期須恵器研究や韓式系土器研究の指標となっている。

また、中期末～後期初頭の韓式系土器が溝内よりまとまって出土した事例（17次）もあり、朝鮮半島や渡来系集団との密接な関わりがうかがえる。

#### ③奈良時代

奈良時代に属する遺構がまとまって検出されたのが、古墳群が形成されている段丘上（1～5、7、9次）で、大型の掘立柱建物や井戸などが確認されている。

近年の調査（37、39、40次）においても、同時期の掘立柱建物等が確認されており、先の調査地（1～5、7、9次）に隣接する箇所であることから、同一集落の一部と推察される。

#### ④平安時代後期～鎌倉時代前期

段丘上における近年の調査（37、39、40次）において、平安時代後期に属する掘立柱建物が数棟確認された以外は、同時期に属する遺構・遺物の検出は多くはなかったが、今回の調査において、掘立柱建物の他、木棺墓なども検出され、集落の一部が確認できた。

先述のとおり、新たな集落の形成や集落規模の拡大がみられる時期であることから、この出合遺跡における中世集落もその一端になるものと考えられる。また、集落規模が大きいとされる玉津田中遺跡や二ツ屋遺跡とも至近であることから、その関連性も今後の検討材料と言えよう。

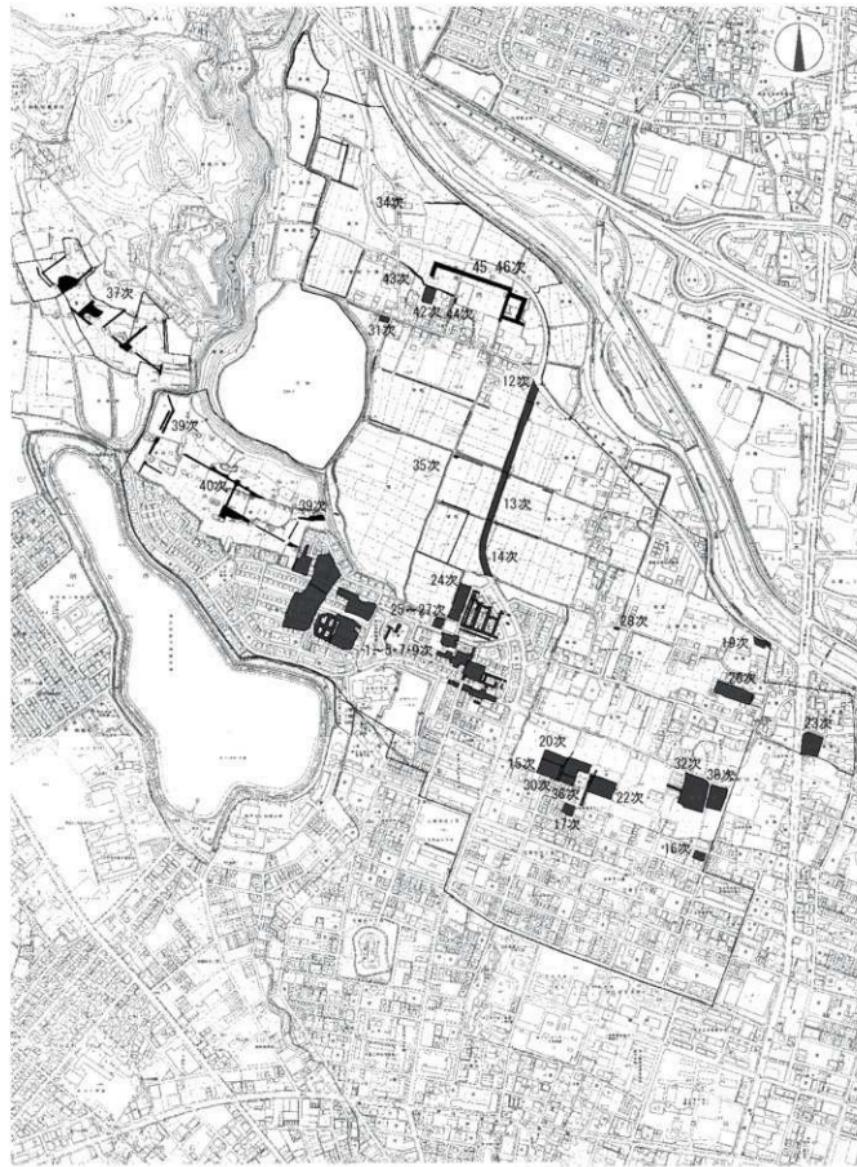


fig. 4 出合退跡の調査地 ( $S = 1 : 10,000$ )

年度	次数	ID次数	調査地名	調査事業名	調査主体
昭和52	1次	1 ~ 3次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和53	2次	4次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和54	3次	5・6次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和55	4次	7~9次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和56	5次	10~13~1次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	6次	13~2次	神戸市西区王塚台4・5丁目	雨水幹線敷設	兵庫県教育委員会
昭和57	7次	14~16次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	8次		神戸市西区王塚台6・7丁目	下水管敷設	兵庫県教育委員会
	9~11次	17次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和58	9~2次	18次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	9~3次	19次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	10次	20次	神戸市西区王塚台5丁目	污水管敷設	兵庫県教育委員会
昭和61	11次	22次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
昭和62	12~1次	23次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
	12~2次	25次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
昭和63	13次	26次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
平成元	13次 b		神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
平成2~3	14次	27次	神戸市西区平野町中津	道路建設	(財)神戸市スポーツ教育公社
平成3	15次	28次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
平成4	16次	29次	神戸市西区玉津町出合	個人住宅建設	神戸市教育委員会
平成5	17次	32次	神戸市西区王塚台5丁目	地域福祉センター建設	神戸市教育委員会
欠番	18次				
平成7	19次	33次	神戸市西区玉津町出合字寺家	黒道拡幅工事	神戸市教育委員会
	20次	34次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	住宅建設	神戸市教育委員会
平成8	21次	35次	神戸市西区王塚台5丁目・玉津町出合字中ノ田	道路建設	神戸市教育委員会
	22次	36次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
平成9	23次	37次	神戸市西区玉津町出合屋敷	ガソリンスタンド建設	神戸市教育委員会
	24次	38次	神戸市西区中野1丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
	25次	39次	神戸市西区中野1丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
平成10	26次	40次	神戸市西区玉津町出合字寺家	宅地造成	神戸市教育委員会
	27次	41次	神戸市西区中野1丁目	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	28次	42次	神戸市西区玉津町出合字高田	道路改良	(財)神戸市体育協会
平成12	29次	43次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	30次	44次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	個人住宅建設	神戸市教育委員会
平成15	31次		神戸市西区平野町中津	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	32次		神戸市西区玉津町出合字辰間ヶ坪	宅地造成	神戸市教育委員会
欠番	33次				
平成17	34次		神戸市西区平野町中津字宮池・門田・厚張	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
平成18	35次		神戸市西区平野町中津字満田・平田	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
	36次		神戸市西区王塚台5丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
	37次		神戸市西区平野町中津字堂ノ上	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
平成19	38次		神戸市西区玉津町出合字辰間ヶ坪	宅地造成	神戸市教育委員会
	39次		神戸市西区平野町中津字坂ノ上・平内口	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
	40次		神戸市西区平野町中津字坂ノ上・平内口	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
平成20	41次		神戸市西区王塚台5丁目・玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
	42次		神戸市西区平野町中津	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	43次		神戸市西区平野町中津字門田	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
平成21	44次		神戸市西区平野町中津字門田	圃場整備事業	(財)神戸市体育協会
平成22	45次		神戸市西区平野町中津字門田・厚張	宅地造成	神戸市教育委員会
平成23	46次		神戸市西区平野町中津字門田・厚張	宅地造成	神戸市教育委員会

表1 出合跡調査一覧表(太字は本書報告分)

## 主要参考文献

全時代に関するもの

直良信夫1943<sup>2</sup>近畿古文化叢書』雁牙書房

黒田義隆編1985<sup>2</sup>明石市史資料(考古編)』第4集明石市教育委員会

新修神戸市史編集委員会編1987<sup>2</sup>新修神戸市史 史歴編Ⅰ 自然・考古』神戸市

兵庫県史編集専門委員会編1992<sup>2</sup>兵庫県史 考古資料編』兵庫県

兵庫県教育委員会編1994~1996<sup>2</sup>神戸市西区・玉津田中遺跡』第1~6分冊 兵庫県教育委員会

①旧石器時代

丸山 潔編2009<sup>2</sup>明石最古の狩人 明石原人から縄文人にへ 発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会

②縄文時代

中村善則1986<sup>2</sup>播磨大歳山遺跡Ⅰ 繩文土器』『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館

直良信夫(春成秀爾編)1987<sup>2</sup>播磨大歳山遺跡の研究』真隠社

春成秀爾1996<sup>2</sup>藤江出ノ上遺跡の縄文土器』『藤江別所遺跡』明石市教育委員会

口野博史・阿部 功1996<sup>2</sup>玉津田中遺跡 第8次調査』平成5年度 神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会

③弥生時代

直良信夫・小林行雄1942<sup>2</sup>播磨国吉田史前遺跡の研究』考古学』3~5 東京考古学会

丸山 潔1992<sup>2</sup>弥生時代の集落の動態- 播磨国境地域-』『研究班』15周年記念論文集編集委員会

稻原昭嘉1996<sup>2</sup>藤江別所遺跡』明石市教育委員会

山本三郎2000<sup>2</sup>明石海峡・明石川流域における弥生時代の高地性集落小論』あまのともしび』原口先生の古希を祝う集い事務局

山口英正編2003<sup>2</sup>新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書』神戸市教育委員会

丸山 潔編2010<sup>2</sup>明石の弥生人』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会

福宜田佳男2010<sup>2</sup>明石川流域の弥生時代集落『坪井清足先生卒寿記念論文集』埋文行政のはざまで-』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

④古墳時代

千種 浩・須藤 宏1989<sup>2</sup>天王山5号墳』昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

明石市文化博物館編1999<sup>2</sup>~古墳時代の明石~ 発掘された朝石の歴史』明石市文化博物館

山本雅和・浅谷誠吾1999<sup>2</sup>水谷大東古墳』平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

宮本郁謙編2000<sup>2</sup>神戸の古墳』神戸市教育委員会

安田 澄編2000<sup>2</sup>白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次 発掘調査報告書』神戸市教育委員会

明石市文化博物館編2001<sup>2</sup>発掘された明石の歴史展 - まちに眠る古代の姿 -』明石市文化博物館

徳田誠志・清喜裕二2003<sup>2</sup>玉津陵墓参考地埴丘塚・外堤内法護岸工事区域の調査』『書陵墓紀要』第53号 宮内庁書陵部

谷 正俊編2005<sup>2</sup>水谷遺跡第10次調査 馬掛原遺跡第1次調査』神戸市教育委員会

丸山 潔編2006<sup>2</sup>西神ニュータウンの遺跡』神戸市教育委員会

安田 澄編2008<sup>2</sup>白水駒塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会

⑤飛鳥 -奈良時代

明石市文化博物館編2004<sup>2</sup>発掘された明石の歴史展 太寺鹿寺と高家寺』明石市文化博物館

明石市教育委員会地域連携課編2009<sup>2</sup>明石市太寺鹿寺跡現地説明会資料』明石市教育委員会

⑥平安時代・鎌倉時代

新修神戸市史編集委員会編2010<sup>2</sup>新修神戸市史 史歴編Ⅱ 古代・中世』神戸市

山本雅和1999<sup>2</sup>白水遺跡 第4次 埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会

森田 和<sup>2</sup>東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に-』神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館 1986

出土遺跡に関するもの

神戸市教育委員会編1989~1996・1999~2000~2003~2006~2008~2012<sup>2</sup>昭和61~63、平成元~5・8・12・15・17~21年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会

鎌木義昌・龜田修一1992<sup>2</sup>出土遺跡』兵庫県史 考古資料編』兵庫県

富山直人編1994<sup>2</sup>出土遺跡 第27次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

龜田修一2008<sup>2</sup>播磨出身窯跡の検討』『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会

阿部功編2011<sup>2</sup>出土遺跡 第34・35・37・40・43・44次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

## 第2章 調査の成果（遺構）

### 第1節 基本層序

第45次調査（14～16トレンチ）、第46次調査（17～22トレンチ）における調査地点については、東西約230m、南北約90mの比較的狭い範囲ではあるものの、当該地が明石川西岸の沖積地にあたることから、土壌の堆積状況も箇所によって若干の差異がみられる。以下、各遺構面とその層位状況について記す。

各トレンチによって状況は異なるが、現表土（上面標高約15.7～16.2m）の直下に数層の旧耕土層が存在し、その下層上面が第1遺構面となる。

旧耕土層の層厚は、各トレンチとも20～40cmを測り、第1遺構面の標高が、概ね14、15、17～19トレンチで15.6～15.8m、16、20～22トレンチで15.2～15.3mとなっている。

14～18、20～22トレンチの第2遺構面、19トレンチの第2、第3遺構面については、各トレンチの第1遺構面より、凡そ-10～30cm下層において確認できるが、標高等のバラツキも大きく、15.0～15.8mを測る。第2遺構面の直上層は、概ね、第1遺構面のベース層に該当するが、古墳時代以前の遺物包含層にも該当する。

14～18、20～22トレンチの第3遺構面、19トレンチの第4遺構面については、上層遺構面より、-0.7～1.5m下層において確認できるが、箇所によって状況の差異が大きく、遺構面直上の沖積層や洪水砂層の堆積状況や層厚も異なり、遺構面の標高もまちまちである。また、16トレンチ北半部および南端部、18トレンチ西半部・東半部、19トレンチ、20トレンチ、21トレンチ北半部・中央部で確認された遺構面直上の遺物包含層（黒灰色粘質土、黒灰色シルト、黒灰色粘砂土、暗灰色シルト）も層厚10～40cmとバラツキがあり、遺物の検出量も箇所によって異なる。同遺構面の標高は、概ね18トレンチで13.8～14.3m、19トレンチで13.5～14.2m、20トレンチで14.4m、21トレンチで13.7～14.4mとなっている。

14トレンチ、15トレンチ、16トレンチ中央部、17トレンチ、18トレンチ中央部・東端部、19トレンチ西端部・中央～東半部、21トレンチ中央部～南半部、22トレンチについては、砂層、砂礫層を中心の流路状堆積層、シルト層、粘質土層を中心の湿地状堆積層となっており、これ以外の微高地状の箇所において上記のような状況を呈し、遺構も数多く確認している。

尚、fig. 5において、土層断面の模式図を示した。同図は第46次調査（17～22トレンチ）のデータに基づいて作成したが、第45次調査（14～16トレンチ）地の状況についても、大きな差異はみられないため、ほぼ同一の層序と理解していただきたい。

### 第2節 14トレンチ

事業地内の西端に位置し、第46次調査の17トレンチの南側に連続する調査区である。

3面の遺構面が確認された。第1・2遺構面がほぼ同一面において検出され、第3遺構面は流路状堆積層となっている。

第1・2遺構面において、竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、落ち込みなどの遺構が検出された。

竪穴建物は2棟（SB1401・1403）検出された。SB1401は17トレンチの第1遺構面SB1704、SB1403は17トレンチの第2遺構面SB1707と同一遺構となることから、詳細は17トレンチの項において概説する。

掘立柱建物（SB1402）は、1間×1間で、柱間2.1mを測る。検出状況から竪穴建物の主柱穴の可能性が考えられる。

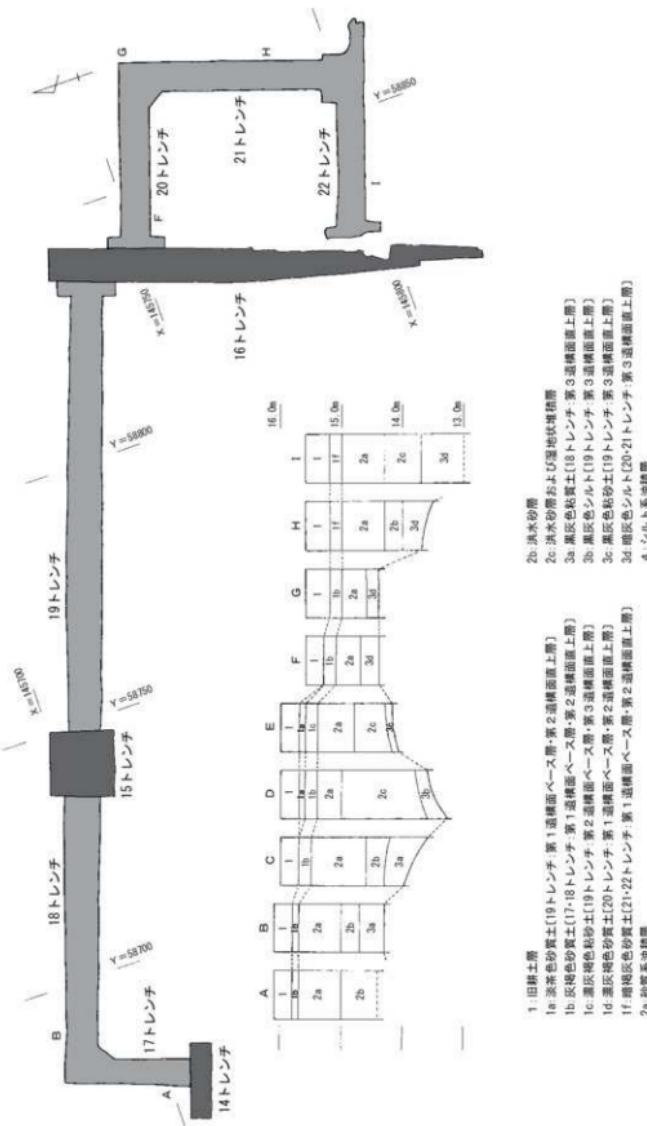


fig. 5 トレンチ配置図および土層断面模式図

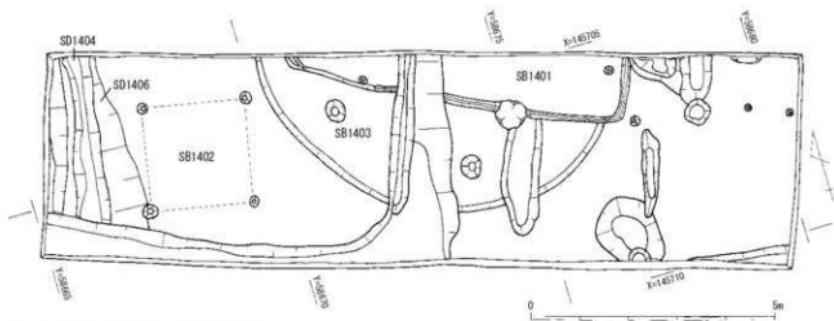


fig. 6 14トレンチ第1・2遺構面平面図

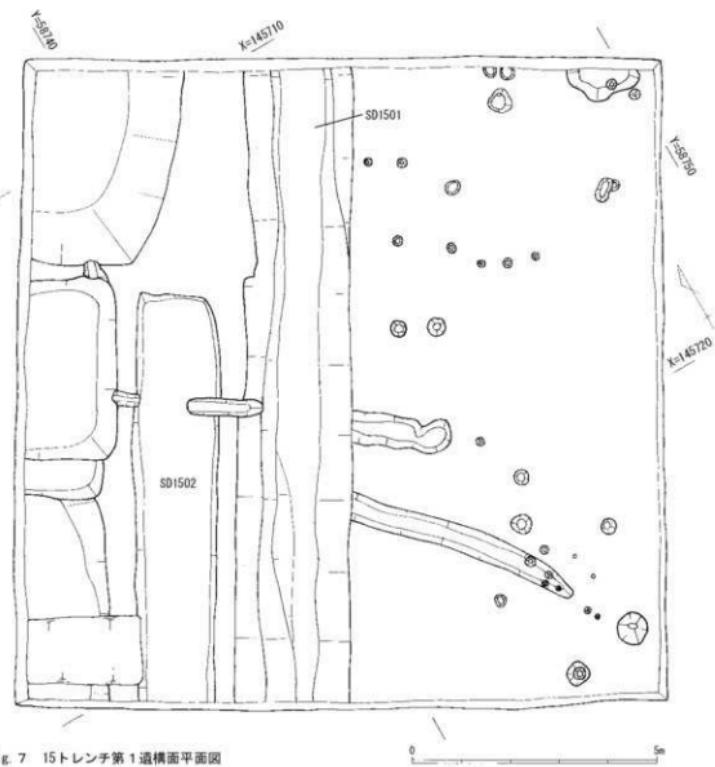


fig. 7 15トレンチ第1遺構面平面図

溝も数条検出されているが、西端部で2条（SD1404・1406）が重なるようなかたちで確認され、出土遺物から、SD1404が古墳時代後期、SD1406が古墳時代前期に属すると考えられる。

### 第3節 15トレンチ

事業地内のほぼ中央に位置し、第46次調査の18トレンチと19トレンチの間の箇所にあたる調査区で、3面の遺構面が確認された。

遺構が比較的密に検出されたのは第1遺構面で、第2遺構面、第3遺構面は、遺構の検出がほとんどなく、第3遺構面は流路状堆積層となっている。この流路状堆積層からは、弥生時代前期末～中期初頭に属する遺物が出土した。

第1遺構面において、溝、土坑、ピットなどの遺構が検出された。

溝は大小5条検出されたが、SD1501・1502において、室町時代（15世紀代）に属する遺物が出土した。また、土坑、ピットなどについても、中世の範疇のものと推測される。

第2遺構面においては、溝1条とピット2基が検出されたにとどまり、溝より古墳時代前期に属する遺物が出土している。

### 第4節 16トレンチ

事業地内の東寄りに位置し、第46次調査の19トレンチと20・22トレンチの間の箇所にあたる調査区で、3面の遺構面が確認された。

いずれの遺構面も遺構が数箇所みられるが、第3遺構面が比較的密に検出された。

#### (1) 第1遺構面

溝、土坑、ピットなどの遺構が検出されたが、その大半が溝もしくは溝状遺構で、大小さまざまな規模のものが確認された。これらの遺構は、古墳時代前期～近世に属するものと考えられる。

溝も先述のとおり、古墳時代前期～近世に属するものが検出されているが、古墳時代に属するもの多くは、概ね北西から南東にかけて延びるものが多い。また、トレンチの南半部で検出されたSD1619からの出土遺物が比較的多く、古墳時代前期に属する土器類がまとまって出土している。

SD1619は幅約6.6m、深さ約2.1mを測る規模の大きい溝で、葉研形の断面を呈す。北側の肩部からやや下がったあたりで、土器がまとまって検出された。

#### (2) 第2遺構面

溝数条のほか、小規模（規模不詳）の竪穴建物（SB1602）、掘立柱建物（SB1601）、土坑などが検出された。時期が特定できる遺構は、概ね古墳時代初頭～前期のものと推測される。

SB1601はトレンチ中央部で検出された南北2間×東西2間以上の規模の掘立柱建物で、柱穴間隔は約1.7～2.0mを測る。時期は不詳である。

SB1602は平面形が方形の竪穴建物と考えられるが、上位遺構によって削平を受けており、全体規模は不明である。埋土中より、古墳時代前期の遺物が確認された。

溝は数条検出されたが、小規模が多く、出土遺物も少量である。小規模な溝は、形状から廻溝の可能性も考えられる。また、トレンチ北半部において、幅約4m、深さ約1.3mを測るSD1632が検出されおり、古墳時代初頭～前期の土器類が出土している。

土坑も小規模なものが多く、検出数も少ないが、トレンチ中央部の西側壁面際において、平面形状が不明

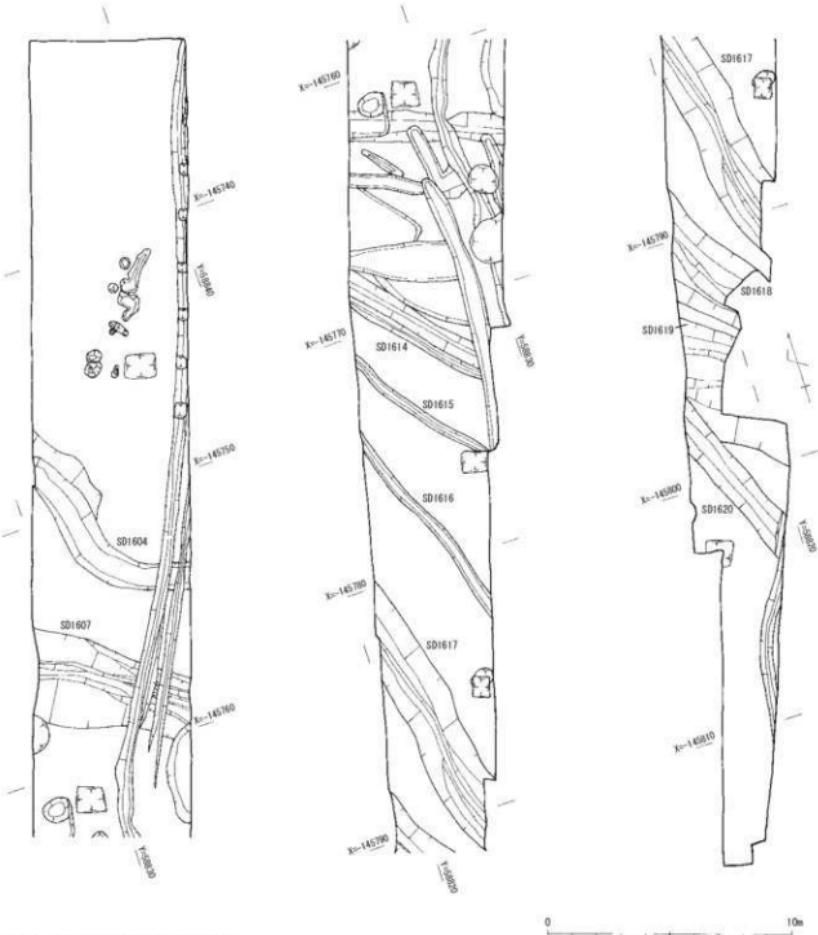


fig. 8 16トレンチ第1造構面平面図

瞭ながら、坑内に円窓や高坏脚部片を打ち欠いて敷き、その上に高坏坏部で蓋をした壺が据えられた遺構（SD1601）が確認された。その検出状況から、土器棺の可能性が高い。弥生時代後期末～古墳時代初頭に属する可能性が高い。

### （3）第3造構面

竪穴建物、溝、土坑、ピットなどの遺構が検出された。竪穴建物は小規模ながら2棟（SB1603・1604）検出された。また、土坑なども多く、出土遺物も比較的多い。いずれも、弥生時代前期末～中期初頭に属すると考えられる。

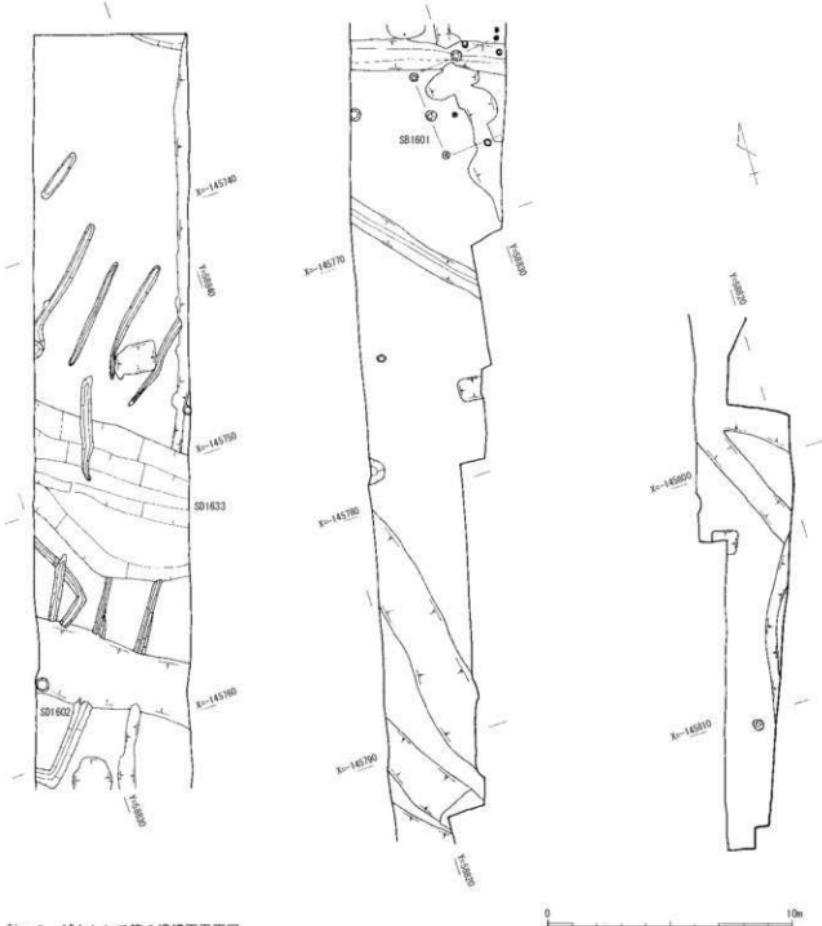


fig. 9 16トレンチ第2造横面平面図

竪穴建物はいずれもトレンチ北半部において検出された。

SB1603は小規模な梢円形状の平面形の竪穴建物である。西側がSR1601に切られており、全体規模は不明である。中央に炉と考えられる浅い土坑を有し、それを挟むように主柱穴と考えられる小規模な柱穴が2ヶ所検出された。

SB1604はSB1603のすぐ南側で検出された竪穴建物で、北側を上位構造によって削平されており、規模等の詳細は不明瞭であるが、径約7m程度の円形の平面形と推測される。建物壁のやや内側に建物より一回り小さい周壁溝が確認されており、建て替えが行われた可能性が考えられる。中央部には炉（中央土坑）が存在し、

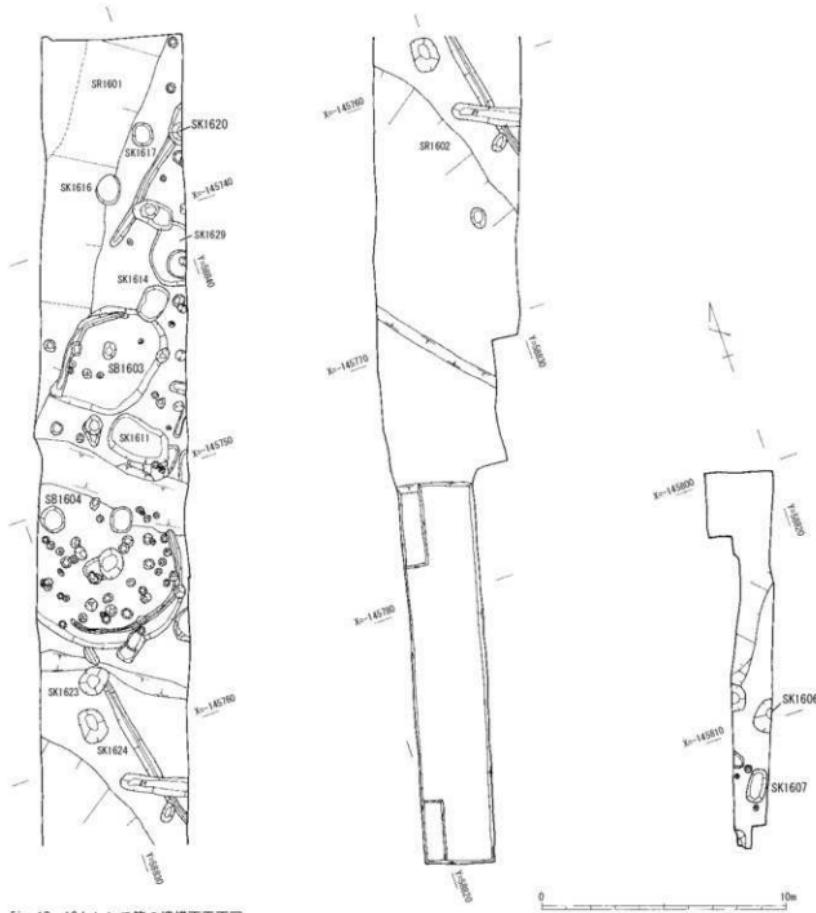


fig. 10 16トレンチ第3構造面平面図

その両端に一对の柱穴を有することから、「松菊里類型」に該当する建物の可能性が考えられる。また、中央土坑からは、サヌカイトの剥片も出土している。

構造より構造は北半部において数条確認されたが、小規模なものばかりで、出土遺物も少ない。また、トレンチ中央部と北端部西側には、流路状の落ち込み（SR1601・1602）が存在し、洪水砂状の砂層によって埋没している。

土坑はトレンチの北半部と南端部において数多く検出された。その多くは橢円形か隅丸方形の平面形のもので、遺物がまとまって出土したもの（SK1606・1607・1620など）も存在する。

SK1606はトレンチ南端部において検出された隅丸円形の土坑である。東側約半分は調査区外に続く。南北約1.4m、東西0.9m以上、深さ約35cmを測る。完形に近い壺2点が出士している。

SK1607はSK1606のすぐ南側において検出された楕円形の土坑である。南北約1.4m、東西0.8m以上、深さ約35cmを測る。壺および甕が出土している。

SK1620はトレンチ北端部の東側壁面にかかるかたちで検出された不整形の土坑で、南北約1.8m、東西0.5m以上、深さ約60cmを測る。壺、甕などが折り重なるように出土している。

これらの土坑の用途は不明であるが、堅穴建物等に近い集落の中心部に所在することから、生活に密着した構造物と考えられる。

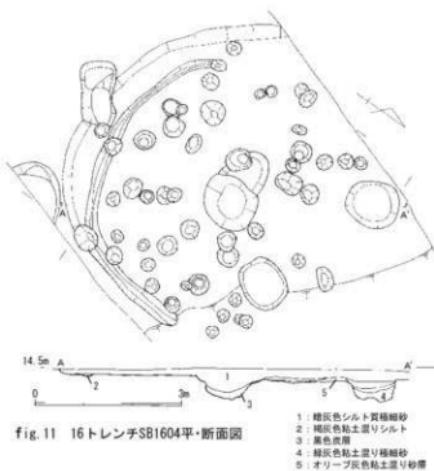


fig. 11 16トレンチSB1604平・断面図

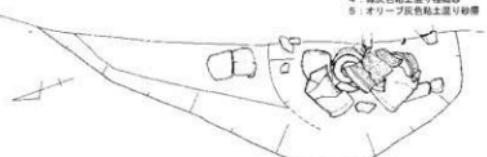


fig. 12 16トレンチSK1620平・立面図

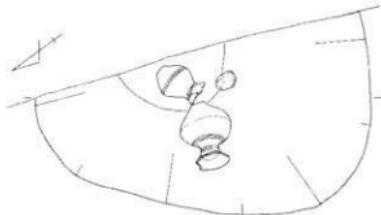


fig. 13 16トレンチSK1606平・立面図

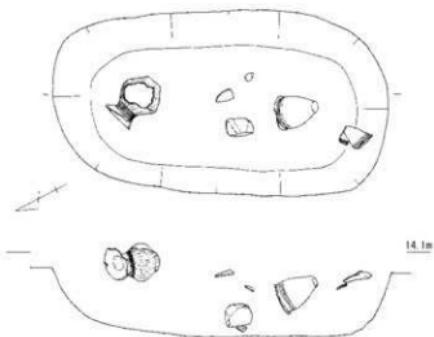


fig. 14 16トレンチSK1607平・立面図

## 第5節 17・18トレンチ

調査地の西端に位置する調査区で、3面の遺構面が確認された。

17トレンチの南端が第45次調査の14トレンチに、18トレンチの東端が第45次調査の15トレンチにそれぞれ連続する。

### (1) 第1遺構面

堅穴建物をはじめ、溝、土坑、ピットなど数多くの遺構が検出され、特に、17トレンチから18トレンチ中央部にかけてはその密度が高い。これらの遺構の時期については、弥生時代後期末～室町時代に該当し、弥生時代後期末～古墳時代中期に属するものが多い。

堅穴建物の中には、建築部材の可能性が高い炭化材が多く検出されたもの（SB1703・弥生時代後期末）や屋内高床部をもつもの（SB1706・古墳時代初頭）、また、一辺約3mの小規模なもの（SB1804・古墳時代前期）などが確認されており、溝についても、遺物がまとまって検出されたもの〔SD1803（古墳時代中期）・SD1811（古墳時代初頭）・SD1812（弥生時代後期）〕などが確認されている。

#### ①堅穴建物

17トレンチで6棟、18トレンチで4棟検出されている。

規模がほぼ明確で、比較的出土遺物が多くみられるのは、SB1703（円形・径約5.5m・弥生時代後期末）、SB1706（方形・一边約6m・古墳時代初頭）、SB1804（方形・一边約3m・古墳時代前期）である。また、17トレンチの南端において検出されたSB1704は、第45次調査のSB1401に連続し、同一遺構である。

SB1703は17トレンチの中央部において検出され、建物部材と考えられる炭化材が確認された。主柱穴は4カ所

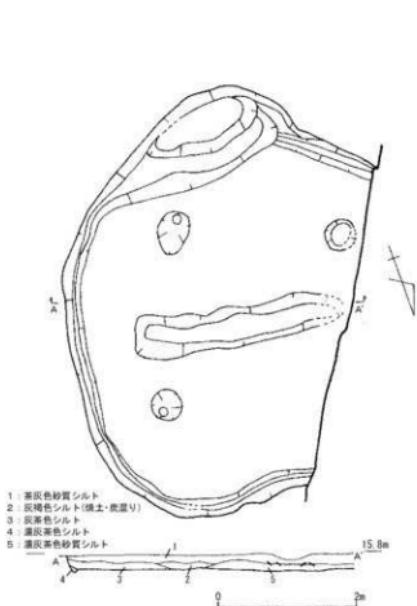


fig. 15 17トレンチSB1703平・断面図

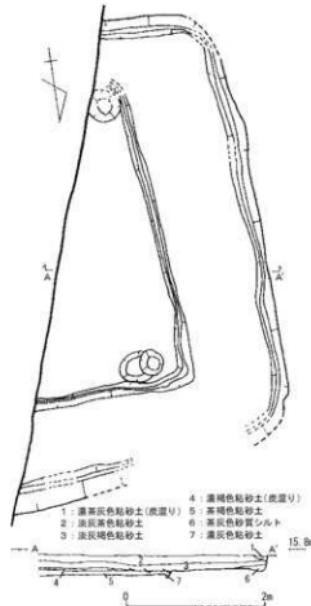


fig. 16 17トレンチSB1706平・断面図

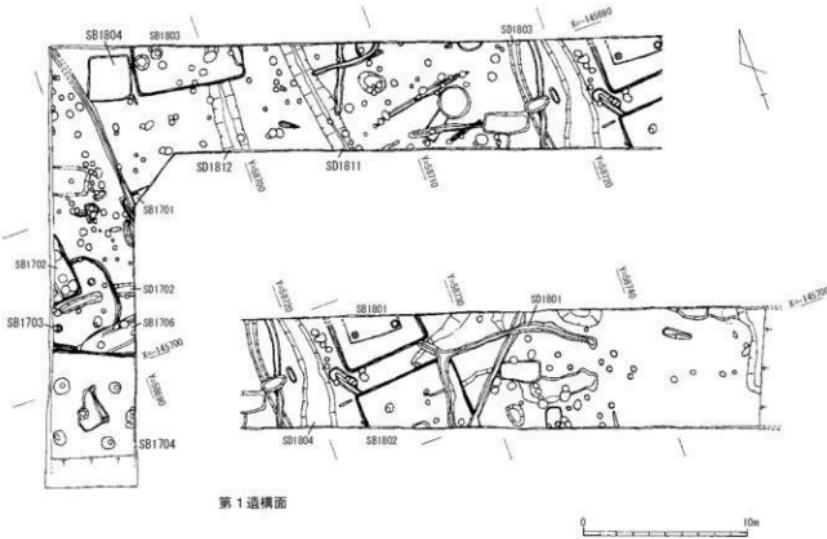


fig.17 17-18トレンチ第1・2造構面平面図

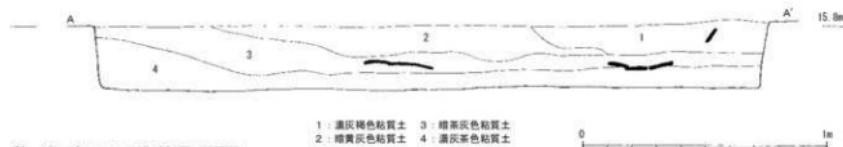
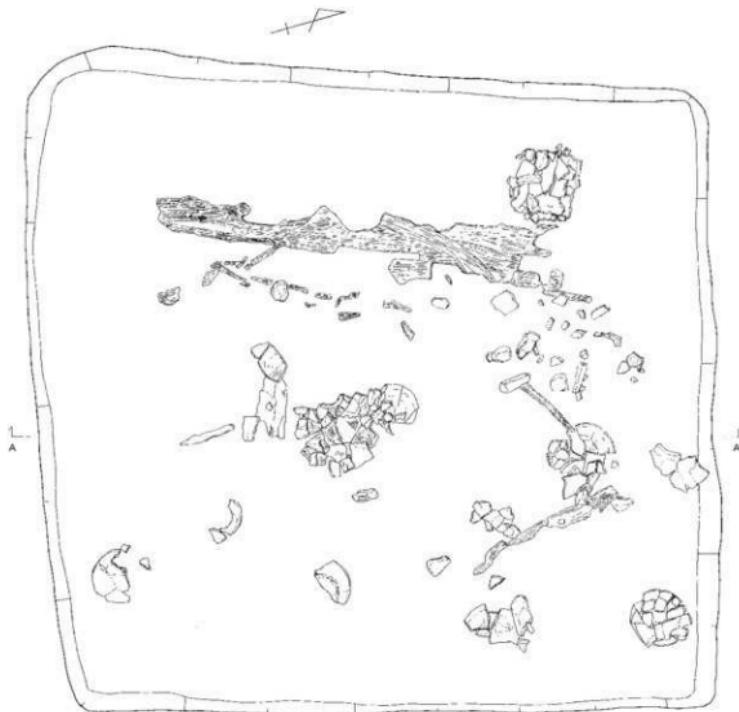


fig.18 18トレンチSB1804平・断面図

所と考えられる。中央部には溝状の落ち込みが存在し、埋土に焼土等が含まれることから、中央炉のような役割が想定できるが、確証はない。また、建物内南側には、土坑状の落ち込みが存在する。

SB1706はSB1703の東側で検出された屋内高床部をもつ方形の建物で、屋内高床部の内側コーナー部分に主柱穴と考えられる柱穴を2ヵ所確認した。

SB1804は18トレンチの西端部において検出された。建物の一辺が約3mと、かなり小規模で、床面には、柱穴等の痕跡が全くなく、その構造については不明瞭な点が多い。建物内からは土器類がまとまって出土したほか、炭化材（用途不明）も数片確認された。同建物については、規模や構造等から居住用とは考えにくく、さらなる検証が必要である。

その他、遺存があまり良くないが、古墳時代前期に属すると考えられる方形の建物として、SB1804に隣接するSB1803、17トレンチ南端において検出されたSB1704（14トレンチのSB1401と同一遺構）、SB1704に切られるかたちで検出されたSB1705があげられる。

SB1803、SB1704は比較的規模が大きく、全体形状は不明なもの、一辺約6.5mを測る。また、主柱穴も規模が大きく、径約50~80cm、深さ約50~70cmを測る。

SB1705については、全体規模は不明であるものの、概ね一辺約5m程度のものと推測される。また、建物内土坑より土器類とともに砾石が出土している。

## ②溝

大小さまざまものが数条検出された。時期もまちまちで、弥生時代後期～室町時代に及ぶ。

特に、規模が比較的大きく、出土遺物も多いものとしては、18トレンチの西半部で検出されたSD1811（幅約1.1m、深さ約80cm・古墳時代初頭）・SD1812（幅約1.2m、深さ約70cm・弥生時代後期）があげられる。いずれも、検出した箇所はわずかであるものの、直線的で、整然とした構造であることから、集落の区画溝のような性格が考えられる。

溝の多くは、概ね弥生時代後期～古墳時代前期に属するが、古墳時代中～後期（SD1803・1804ほか）や室町時代（SD1801）に属するものなども存在する。

### （2）第2遺構面

堅穴建物、溝、土坑、ピット、落ち込みなどが検出されたが、数多くの遺構が検出され、第1遺構面に比べて遺構密度は低く、出土遺物も少ない。遺構の時期は、概ね弥生時代後期の範疇に入るものが多い。

17トレンチの南端部において検出されたSB1707（円形・径約7~8m・弥生時代後期後半）は、14トレンチのSB1403に連続し、同一遺構と考えられる。建物内のほぼ中央部には土坑（中央土坑）が設けられており、土坑の北側肩部には土堤状のわずかな高まりがみられる。主柱穴とを考えられる柱穴は比較的小規模で、全体の本数等は確認できなかった。

### （3）第3遺構面

先述でも若干触れたが、多くの箇所が流路状堆積にあたる。遺物包含層に該当する黒灰色粘質土が存在する箇所においても、その下層上面での遺構の検出はなかった。18トレンチの中央部において、若干の微高地が存在するものの、それ以外の箇所については、流路状の深まりとなる。遺物包含層や流路内堆積層から弥生時代前中期～中期に属する遺物が確認されたが、数量的には少ない。

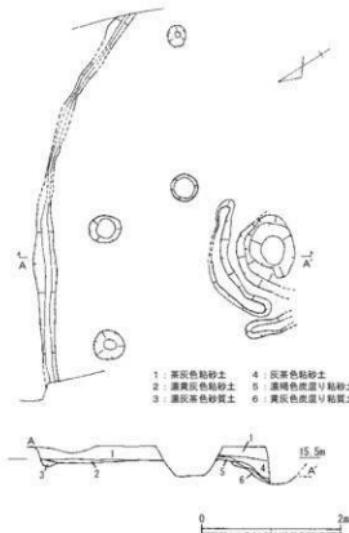


fig. 19 17トレンチSB1707平・断面図

## 第6節 19トレンチ

調査地のほぼ中央に位置する調査区（トレンチ）である。4面の遺構面が確認されたが、17・18・20～22トレンチの第1遺構面が同トレンチの第1・2遺構面に該当し、以下、同トレンチの第3・4遺構面が他トレンチの第2・3遺構面にそれぞれ該当する。また、トレンチ西端は第45次調査の15トレンチに、トレンチ東端は第45次調査の16トレンチにそれぞれ連続する。

### （1）第1遺構面

掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込み、などが検出され、主として、平安時代後期～室町時代に属すると考えられるが、奈良時代～平安時代前期に属するものも存在する。

#### ①掘立柱建物

トレンチのほぼ中央部で1棟（SH1901）検出された。東西2間×南北2間もしくは2間以上の中規模なもので、ピット内より土器、須恵器の小片が出土したが、中世の範疇と考えられるものの、時期の特定は難しい。

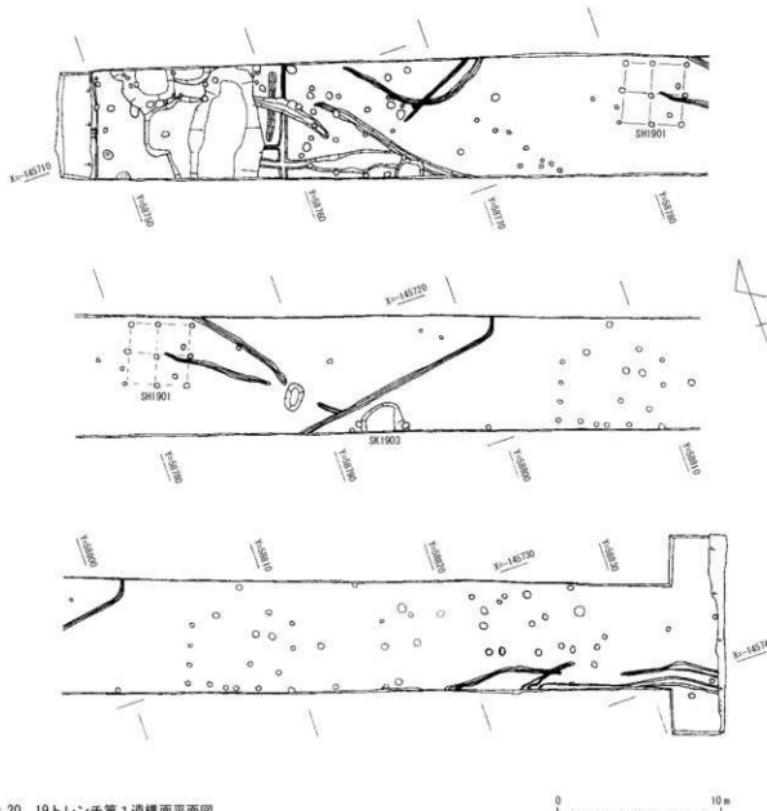


fig.20 19トレンチ第1遺構面平面図

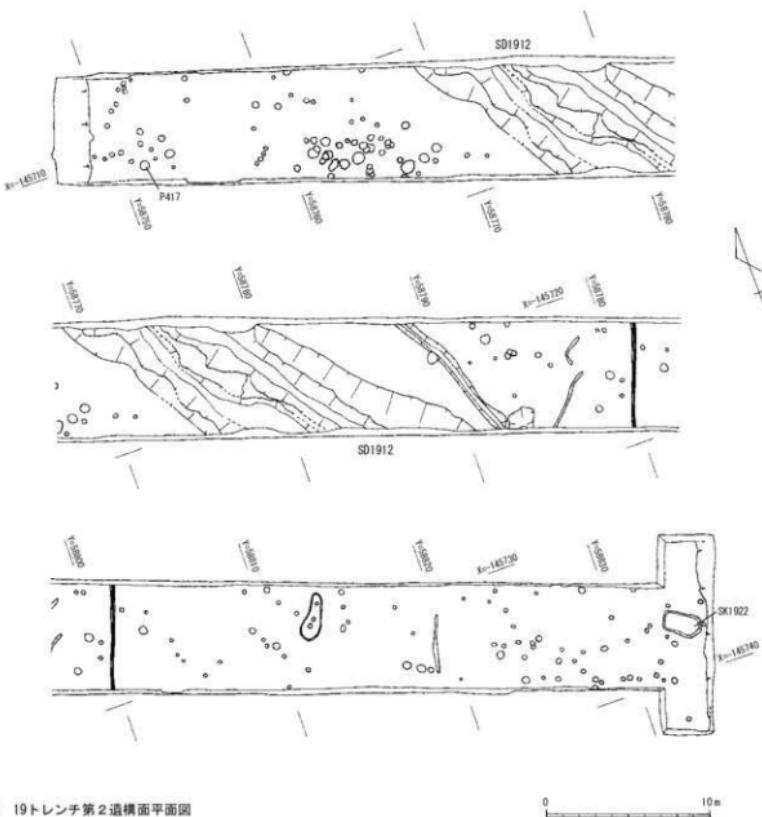


fig.21 19トレーニング第2遺構面平面図

0 10m

また、調査区の西端や東半部において、等間隔のピット列を検出したが、建物としてはまとまらない。

## ②溝・土坑

溝および溝状構造は数条検出されたが、いずれも小規模なもので、出土遺物も少なく、時期も不詳である。また、土坑についても数ヶ所検出されたが、小規模なものばかりで、概ね時期が確認できたのがSD1903（室町時代後期）程度である。

### (2) 第2遺構面

溝、土坑、ピットなどが検出されており、特に、トレーニングの西半部～中央部において多く存在する。これらの構造は弥生時代後期末～古墳時代後期に属すると考えられるが、古墳時代中期以降のものが中心である。大規模な溝（SD1912）が1条確認された以外は、土坑、ピットを含めていずれも小規模なものばかりで、出土遺物も少ない。

## ①溝

さまざまな規模のものが数条検出されたが、特筆されるものとして、トレーニングのほぼ中央部で検出された

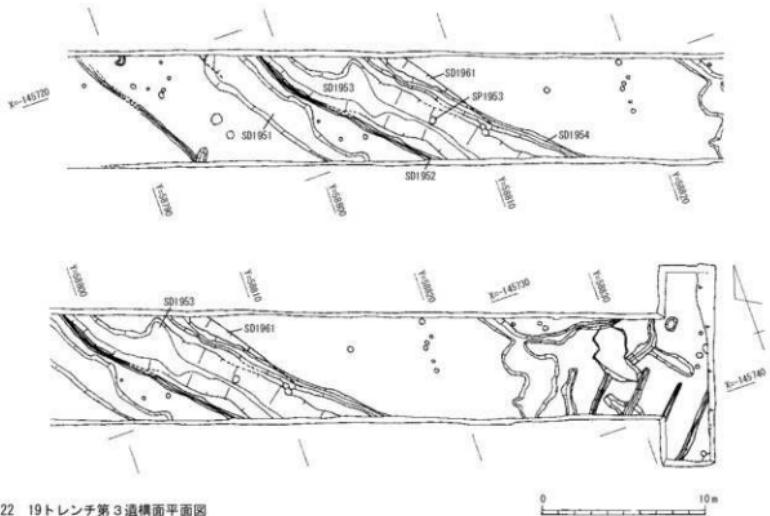


fig.22 19トレンチ第3造構面平面図

SD1912があげられる。

SD1912は、幅約7~8m、深さ約2.5mを測る大規模な溝で、埋土に洪水砂状の細砂層や砂礫層などがみられることから、自然流路の様相をもつ溝状遺構と認識できる。埋土内より多くの出土遺物が確認されたが、その多くが弥生時代後期~古墳時代後期に属する土器類で、古墳時代中~後期の土師器類が比較的多くみられる。また、木製品類の出土もみられ、農具類や各種部材類も確認できる。遺物の詳細については、後記の遺物の項において概説する。

#### (3) 第3造構面

トレンチの中央部~東半部で遺構が確認された。溝あるいは溝状遺構が大半で、その多くは弥生時代後期~古墳時代前期に属するものと考えられる。

特に、東端部と中央部のやや東寄りに遺構が集中しており、東端部においては、不整形な溝状遺構と小規模ながら等間隔に並ぶ溝が検出された。小規模な溝はその規模や方向などから、16トレンチの第2造構面において検出された溝と同様の類と推察される。また、中央部においては、大小さまざまな溝が重なるように検出されており、切り合いの最も下層にあたるSD1961が最も規模が大きく、幅約3~4m、深さ約1mを測る。

#### (4) 第4造構面

トレンチの西端部で流路状堆積となって大きく傾斜するものの、中央部付近は比較的安定した地勢を呈すものの、トレンチの中央部~東半部の一部が湿地状堆積となり、遺構も希薄となる。

地勢が安定している中央部~西半部において遺構が集中しており、溝、土坑、ピット、落ち込みなどが検出された。これらは、概ね弥生時代前中期~中期初頭に属すると考えられる。

#### ①構

大小数条検出されている。最も規模が大きいものは、西端部で検出されたSD1932で、幅約1.6~1.8m、深さ約30~40cmを測る。

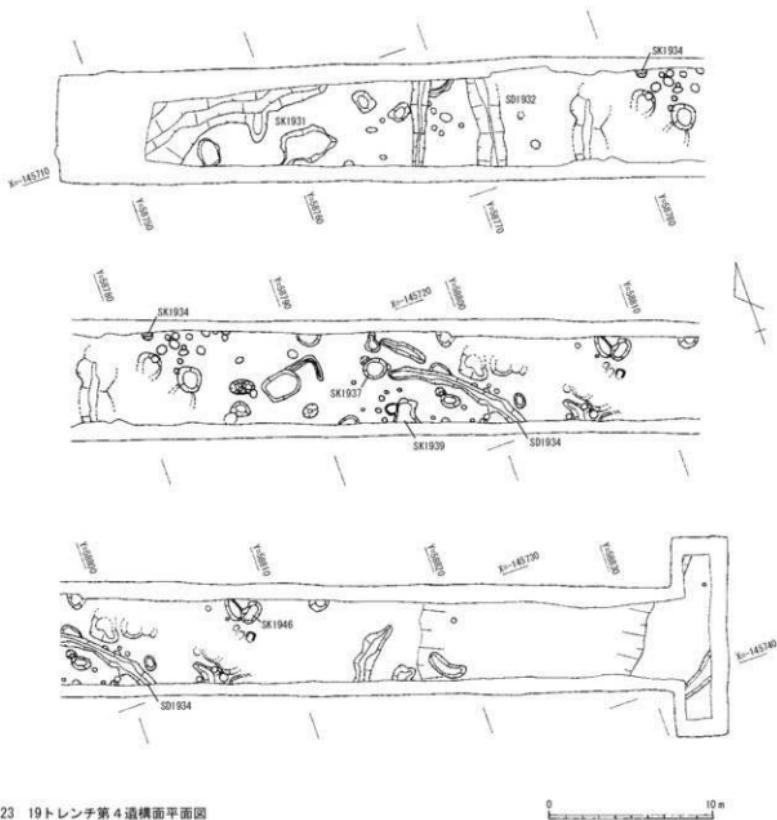


fig. 23 19トレンチ第4遺構面平面図

0 10 m

出土遺物については、やや偏りがみられ、SD1932とトレンチ中央部のSD1934において、比較的まとまって出土しているものの、その他については、極めて少量である。

## ②土坑

大小さまざまなものが検出されている。平面形はやや歪なものも存在するが、概ね椭円形もしくは隅丸方形を呈する。その多くは径が2m以下の小規模なものであるが、西端部において検出されたSK1931が最も規模が大きく、長径約1.8m、深さ約40~50cmを測る。

構と同様に、遺物の出土量にやや偏りがみられ、SK1931・1934・1937・1939・1946より比較的多く確認されている。

## 第7節 20・21・22トレンチ

調査地の東側に位置するトレンチで、3面の遺構面が確認された。20トレンチおよび22トレンチの西端は、16トレンチに連続する。

### (1) 第1遺構面

掘立柱建物、土葬墓（木棺墓）、溝、土坑、ピットなどが検出された。これらの遺構は古墳時代後期～中世に属するものと考えられ、掘立柱建物、土葬墓（木棺墓）については、平安時代後期～鎌倉時代前期に属すると考えられる。

#### ①掘立柱建物

計5棟（SH2001・SH2101・SH2201・SH2202・SH2203）検出された。特に、21トレンチと22トレンチの接点付近においては、SH2101、SH2201、SH2202が重なって確認された。

SH2001は20トレンチと21トレンチの接点付近で検出され、東西1間以上×南北3間以上の規模で、柱穴間隔は約2mを測る。

SH2101は21トレンチと22トレンチの接点付近で検出された大型の建物で、東西4間以上×南北5間以上の規模で、柱穴間隔は約2～2.2mを測る。

SH2201は22トレンチの東端において検出され、東西3間以上×南北1間以上の規模で、柱穴間隔は約2mを測る。

SH2202は21トレンチと22トレンチの接点付近で検出され、東西3間×南北1間以上規模で、柱穴間隔は約2.2～3mを測る。この建物の西端の1分間の柱穴間隔が約3mで、他の箇所よりも広く設定されており、やや特殊性がうかがえる。

SH2203は22トレンチの中央部で検出された小規模の建物で、東西2間×南北1間以上規模で、柱穴間隔は約2mを測る。

いずれの建物も凡そ平安時代後期～鎌倉時代前期に属するものと推測される。

#### ②土葬墓（木棺墓）

同遺構面において特筆される遺構として、3基検出された土葬墓（ST2001・ST2101・ST2102）があげられる。いずれも、木製の棺を埋設した木棺墓と考えられるが、ST2001については、木棺の遺存が確認されなかつた。

ST2001は20トレンチの中央部で検出された。楕円形状を呈する掘形で、長径約1.7m、短径約1.2m、深さ約45cmを測る。木棺が使用されたと推察されるが、痕跡はみとめられなかった。出土遺物は供膳（副葬）されたと考えられる土器類（土師器皿・須恵器碗など）が数点確認されたが、青白磁合子（身のみ）が1点含ま

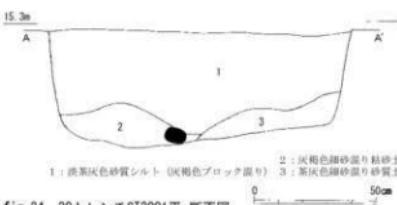
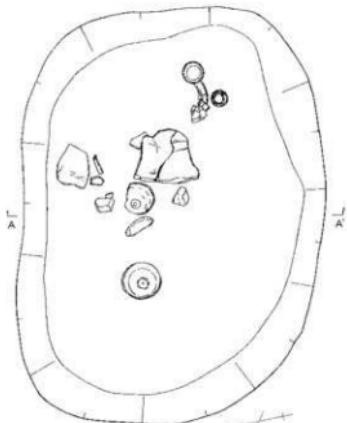


fig. 24 20トレンチST2001平・断面図

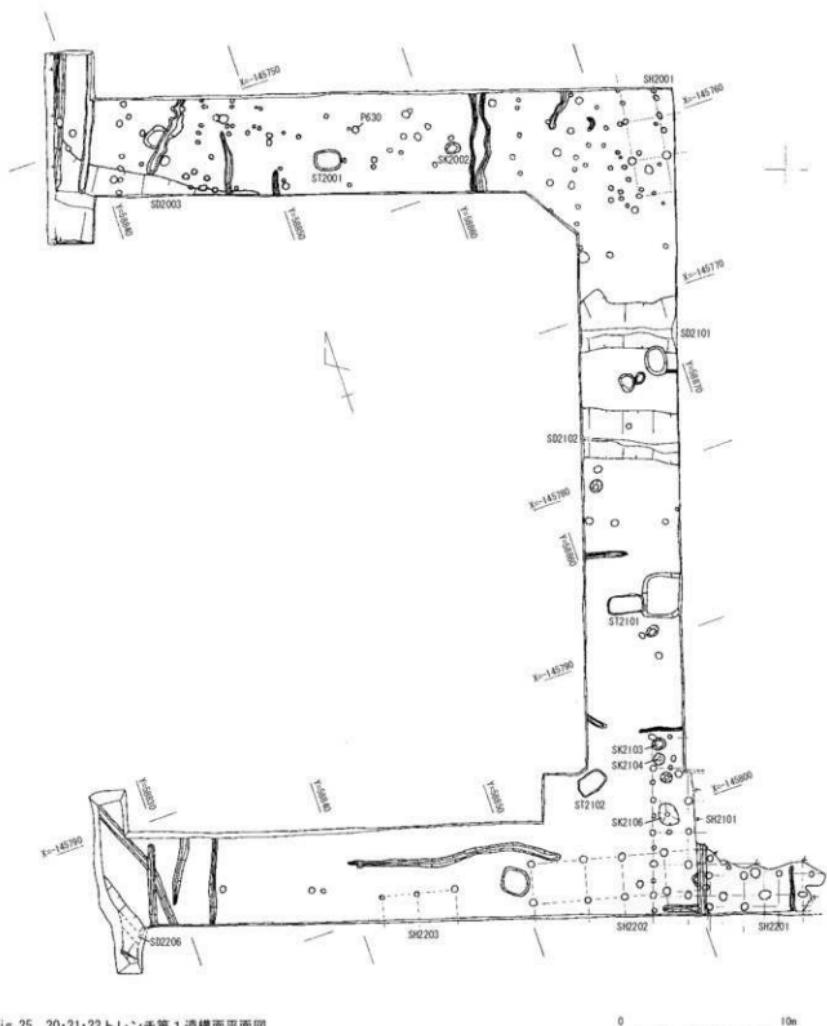


fig. 25 20・21・22トレンチ第1造横面平面図

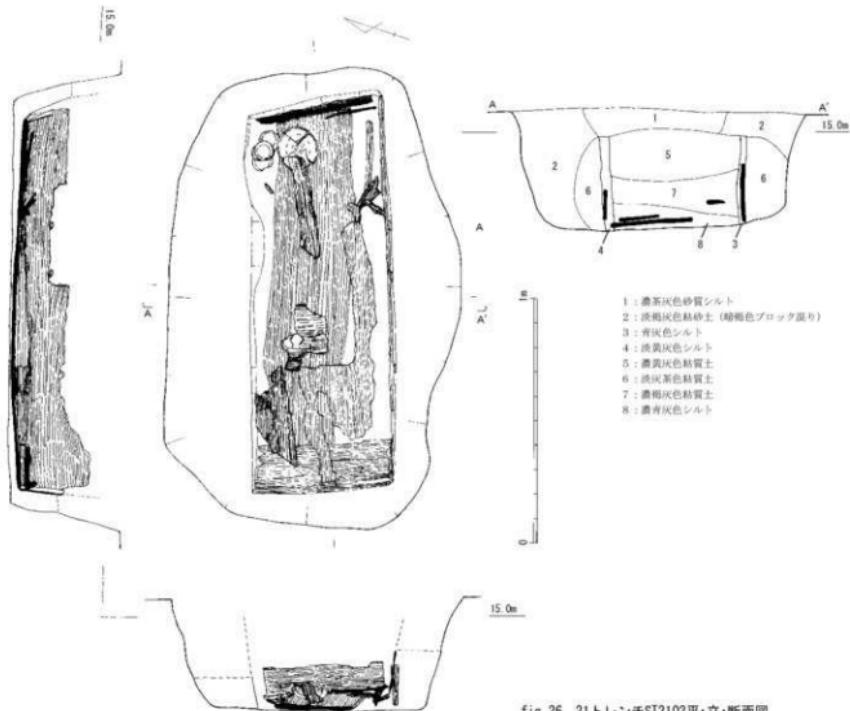


fig. 26 21トレンチST2102平・立・断面図

れる。

ST2101は21トレンチの中央部で検出された。長方形状の掘形で、長辺約2.2m、短辺約1.1m、深さ約15~20cmを測る。木棺材の可能性が高い木材片が、底面の一部において確認されたが、遺存はかなり悪い。供膳されたと考えられる土師器皿と須恵器塊が、墓坑の西端でまとめて出土した。また、刀子と考えられる鉄製品や棺材の結合に用いられたと考えられる鉄釘なども確認された。

ST2102は21トレンチと22トレンチの接点付近で検出された。長方形状の掘形で、長辺約1.9m、短辺約1.2m、深さ約45cmを測る。遺存は良くないものの、木棺材が検出され、棺の規模は長さ約1.6m、幅約60cm、高さ約40cmを測る。出土遺物は棺内の東側に集中して確認された。土師器皿、須恵器塊のほか、形状が不明の鉄製品なども確認されている。また、埋土掘削中に須恵器捏鉢が出土しており、棺上に乗せられていた可能性が考えられる。

### ③構

大小さまざまな規模のものが検出されている。また、属する時期もさまざままで、古墳時代後期から中世のものまで存在する。特に、大型のものとして、SD2003、SD2101、SD2102があげられる。いずれも古墳時代後期に属するものと考えられる。

SD2003は20トレンチの西端で検出され、16トレンチのSD1633と同一遺構と推察される。幅約5m、深さ約

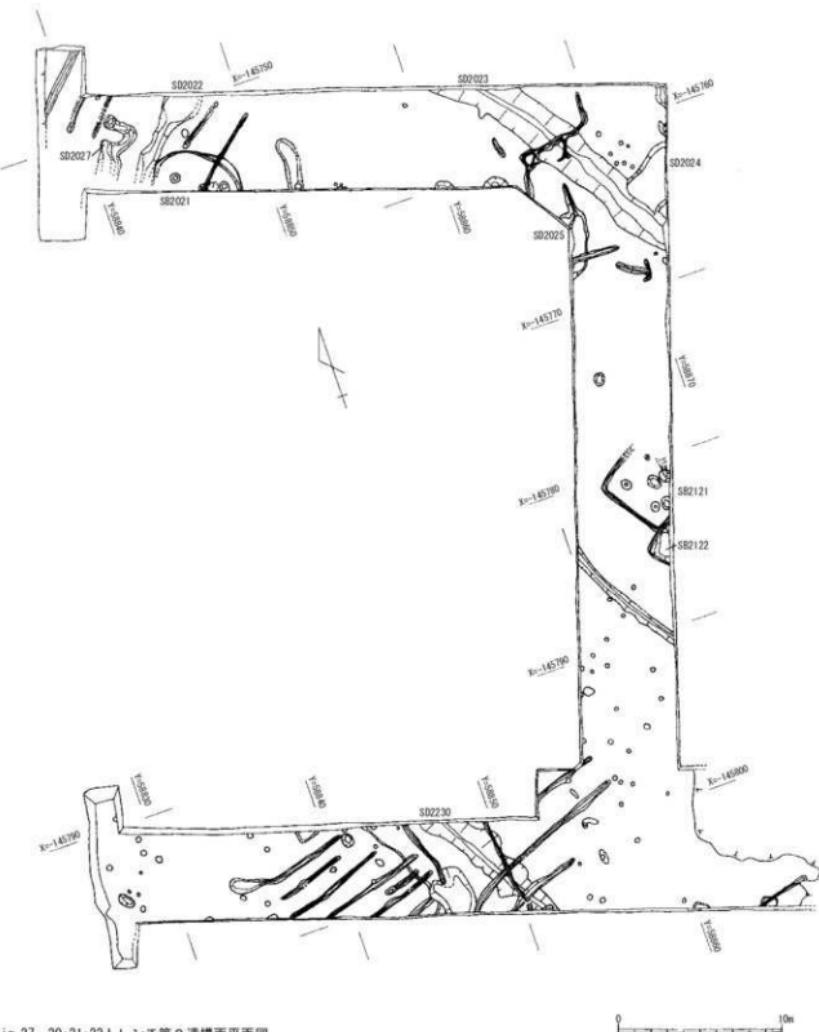


Fig. 27 20・21・22トレンチ第2造横面平面図

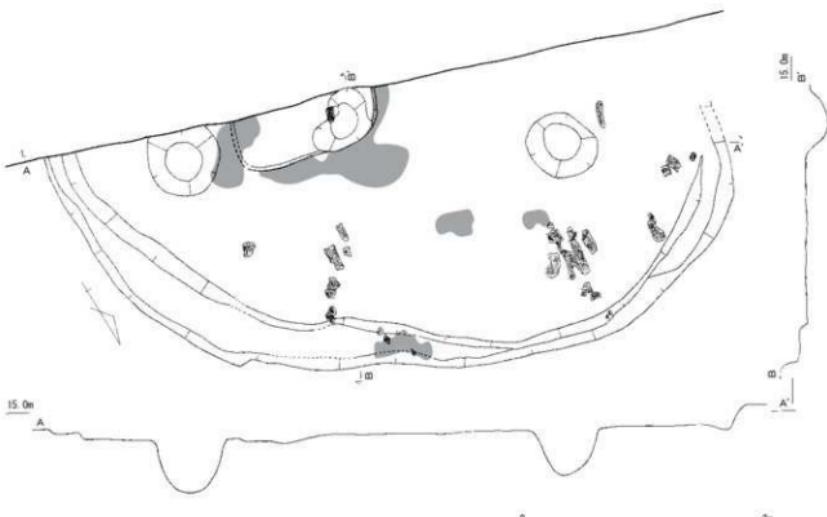


fig. 28 20トレンチSB2021平・断面図(網かけ部分は焼土)

1.5mを測る。埋土中より、弥生時代前期～古墳時代後期の遺物が出土したが、古墳時代後期のものが数量的には多い。

SD2101、SD2102は21トレンチの中央部において、並行するかたちで検出された。規模もほぼ同じで、いずれも弥生時代前期～古墳時代後期の出土遺物がみられるが、古墳時代後期に属するものが多い。SD2101は幅約2.8～3.2m、深さ約0.9m、SD2102は幅約3m、深さ約80cmを測る。

## (2) 第2遺構面

竪穴建物2棟をはじめ、溝、土坑、ピット、落ち込みなどが検出された。これらの遺構は出土遺物から、概ね弥生時代後期～古墳時代前期に属すると考えられる。

### ①竪穴建物

20トレンチ西半部で検出されたSB2021（円形・弥生時代後期・直径約5.5m）、21トレンチ中央部で検出されたSB2121（方形・古墳時代前期・一边約5m）の2棟が確認されたが、SB2121と切り合うかたちで検出されたSB2122も竪穴建物の可能性が考えられる。

SB2021においては、建築部材の一部と考えられる炭化材が検出された。また、焼土も埋土中に含まれることから、17トレンチのSB1703と同様に焼失建物の可能性が考えられる。多くの部分がトレンチ外に続くため、詳細は把握しにくいが、主柱穴（検出は2ヵ所）はその規模や間隔から4ヵ所と推察され、建物内部の中央部

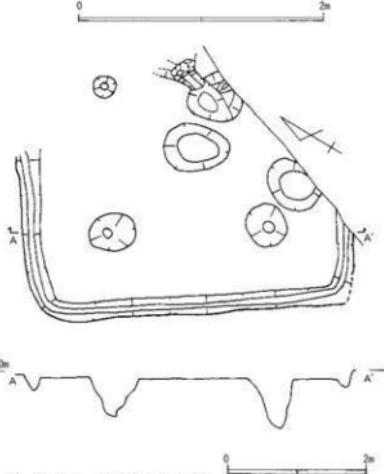


fig. 29 21トレンチSB2021平・断面図

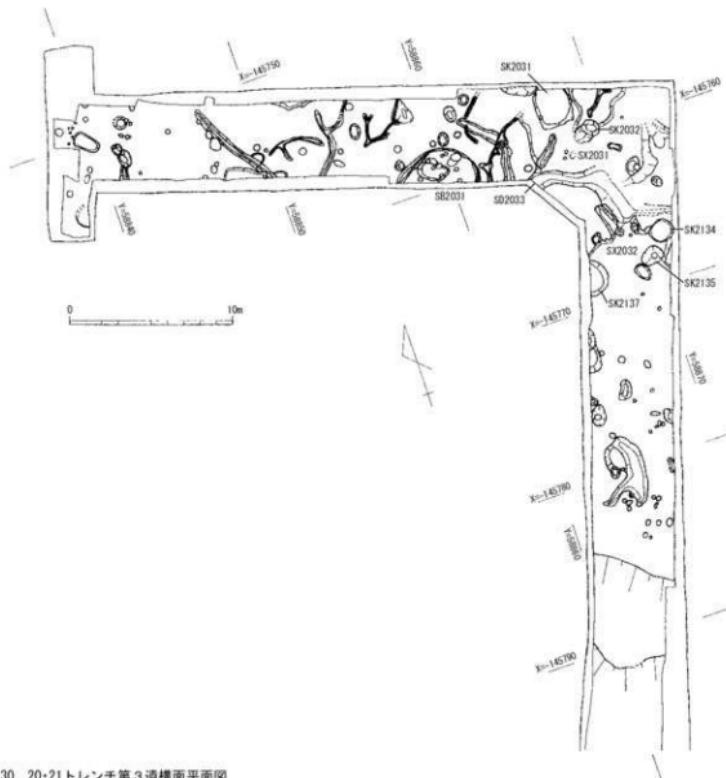


fig. 30 20・21トレンチ第3造構面平面図

には、中央炉（中央土坑）と考えられる不整形の落ち込みが存在する。

SB2121は北側部分が上層遺構により削平を受けており、詳細を把握するに至らなかつたが、4カ所の主柱穴を持つ建物と推測され、中央部には炉跡の可能性が考えられる小規模な土坑状の落ち込みを有する。

## ②構

数条検出されたが、小規模のものが多いものの、20トレンチと21トレンチの接点付近においては、比較的大規模なものが集中して確認された。20トレンチと21トレンチの接点付近で検出されたSD2023、SD2024、22トレンチの東半部で検出されたSD2230などがこれらにあたる。

SD2023は幅約2～2.6m、深さ約0.9mを測る。埋土中より弥生時代前期～後期に属する土器類が数多く出土したが、サヌカイト剥片などの石器の素材も確認されている。出土遺物から推測ならば、同遺構は弥生時代後期に時期比定されるものの、これらの石器類は弥生時代前期の所産の可能性が高い。

SD2024はSD2023に取り付くかたちで検出された。幅約3m、深さ約0.6mを測る。SD2023と同様に弥生時代前期～後期に属する土器類などが出土地した。また、サヌカイト剥片も数点確認されており、粘板岩製の石包丁も1

点出土した。これらの石器類は弥生時代前期に属すると推察される。

SD2230は幅約1~1.2m、深さ約0.5mを測る。埋土中より弥生時代後期に属する遺物が出土している。

その他、小規模ながら出土遺物が多くみられるものとして、SD2025があげられる。20トレンチと21トレンチの接点付近のSD2023の南側で検出された。埋土中より古墳時代初頭に属する遺物が確認された。

### (3) 第3遺構面

20トレンチから21トレンチの北半部において、遺構が密に検出された。21トレンチ南半部から22トレンチにかけては、17・18トレンチおよび19トレンチの一部で確認されたような、湿地状堆積あるいは流路状堆積となっており、地勢的にも不安定で、遺構もほとんど存在しない。

遺構の大半は、20トレンチと21トレンチの北端部において確認され、堅穴建物1棟(SB2031)をはじめ、溝、土坑、落ち込みなどが検出された。これらの遺構は、概ね弥生時代前期末~中期初頭に属するものと考えられる。

#### ①堅穴建物

SB2031は20トレンチの東半部の南側壁面際ににおいて検出された。全体の半分以上がトレンチ外に続くことから、詳細は把握しにくいが、円形で、径約5mを測る建物と推察される。建物内には、周壁溝の他、小規模な柱穴や不整形の落ち込みなどが確認されたが、主柱穴やその他付帯施設の諸相は不明である。

#### ②溝

比較的小規模のものが多く検出されたが、その中で、規模の大きいものとしてはSD2033があげられる。幅約0.8~1.2m、深さ約30~40cmを測る。

#### ③土坑

遺構が密な箇所に多く存在するが、20トレンチと21トレンチの接合部周辺で多く検出されている。規模や形状もさまざまであるが、平面形は円形もしくは梢円形、または隅丸方形のものが多い。

各土坑内からの出土遺物も全体的には多くなく、20トレンチと21トレンチの接合部付近で検出されたSK2031およびSK2134において、比較的多く確認されている。

#### ④落ち込み

いくつか検出された中で規模の大きいものは、20トレンチと21トレンチの接合部において確認されたSX2031・SX2032で、いずれも肩部も不定形、規模が不明で、また、底面において、複数の遺構が存在することから、包含層の下層である可能性も考えられる。

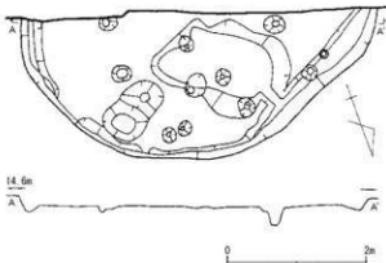


fig. 31 20トレンチSB2031平・断面図

## 第3章 調査の成果（出土遺物）

第45次調査（14～16トレンチ）、第46次調査（17～22トレンチ）においては、弥生時代前期～室町時代に属する遺物が、遺構内あるいは包含層中より数多く出土した。その多くは土器類であるが、石器類、木製品類、金属器類なども含まれる。

以下、トレンチごとに詳細を記すが、網羅的な概説は行わず、図示し得た資料を中心として、考察を加えてみたい。

### 第1節 14・16トレンチ出土遺物

14・16トレンチともに、第45次調査（平成22年度調査）における調査区である。各トレンチの詳細については、第2章において概説している。

1は中型の直口壺である。口径10.3cm、器高13.7cmを測る。SD1406（14トレンチ第1遺構面）の出土資料である。

2～7はSD1619（16トレンチ第1遺構面）の出土資料である。

2、3は小形丸底土器の類である。特に2は、内面口縁部に精緻なミガキが施されるが、外面体部はミガキ状のナデによって仕上げられている。

4はやや大型の器台である。口径19.3cm、器高8.1cmを測る。器面を丁寧なナデによって仕上げられている。

5、6は小型の甕である。特に5は、器壁も薄く、外面体部も細かいハケによって丁寧に仕上げられており、また、口縁部中位に肥厚がみられる点から、布留形甕の類と考えられる。

7は広口短頸壺の類にあたると考えられるが、口縁部中位にわずかに段を有することから、二重口縁壺の範疇のものとも考えられる。口径13.2cm、器高21.3cmを測る。

1～7の出土資料については、概ね、古墳時代初頭～前期に属すると考えられる。

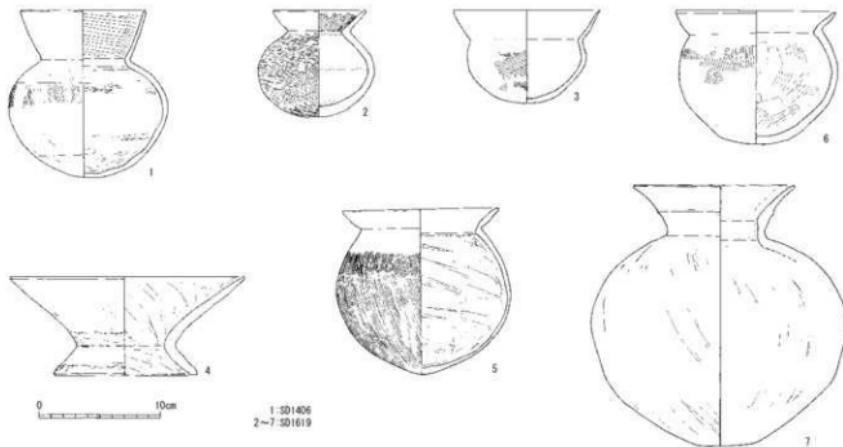


fig.32 14・16トレンチ出土遺物

8、9はST1601（16トレンチ第2遺構面）からの出土資料である。ST1601はその検出状況から土器棺墓と考えられる。9の壺を埋納棺、8の高坏（坏部）を蓋として使用されたと考えられる。概ね、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

8は蓋として転用された高坏で、脚部が欠損している。口径28.5cmを測る比較的大型のものである。内外面とも丁寧なミガキが施される。

9は埋納棺として使用された広口壺で、底部を欠損する。口径21.8cm、残存高34.2cmを測る。外面体部をハケもしくはミガキ、内面体部をナデもしくは板ナデによって丁寧に調整されているが、器面の磨滅が全体的に著しく、詳細は不明である。

10～17は、16トレンチの第3遺構面において確認された出土資料である。概ね、弥生時代前期末～中期初頭に属すると考えられる。

10～13は壺の類であるが、12は広口壺、13は広口長頸壺の範疇のものと考えられる。また、11、12については、広口長頸壺の類と考えられる。

10は口径12.1cm、器高19.1cmを測る中型の壺である。

fig. 33 16トレンチST1601出土遺物  
外表面と体部中位にヘラ描き沈線を施し、外面をハケもしくはミガキ、内面をミガキもしくはナデによって仕上げられている。

11は10とほぼ同形式の壺で、口径14.4cm、器高20.6cmを測る。外面頸部にヘラ描き沈線を施し、外面をハケもしくはミガキ、内面をハケもしくはナデによって仕上げられている。

12は広口壺で、口径13.5cm、器高21.7cmを測る。外面をハケもしくはナデ、内面をミガキもしくはナデによって仕上げられている。

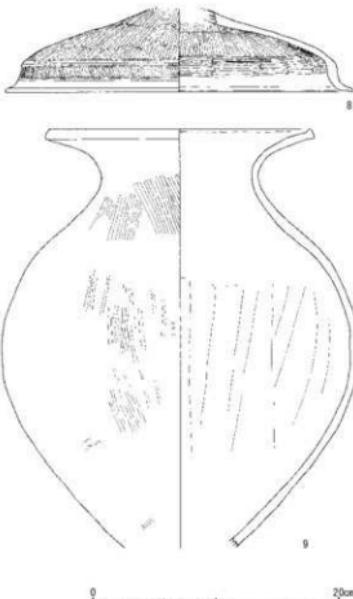
13はやや大ぶりの広口壺で、口径16.5cm、器高26.3cmを測る。外面頸部と体部上位にヘラ描き沈線を施し、器面をミガキもしくはナデによって仕上げられており、特に、外面体部上位はミガキが丁寧に施される。

14～17は甕で、口縁部に差異がみられる。

いずれも外面体部上位にヘラ描き沈線を施し、17が3条のほかは5～7条の多条沈線が用いられている。また、14以外はすべて、口縁端部にキザミ目が施され、17の底部には穿孔がみられる。

14、16、17はほぼ平均的な大きさのもので、口径19.5～24.0cm、器高19.9～23.5cmを測る。15はやや小ぶりで、口径14.9cm、器高16.0cmを測る。

器面の調整については、いずれも内面および外面口縁部がナデ、外面体部がハケもしくはナデが施されるが、磨滅や剥離がみられるものもあり、不明瞭な部分も有する。



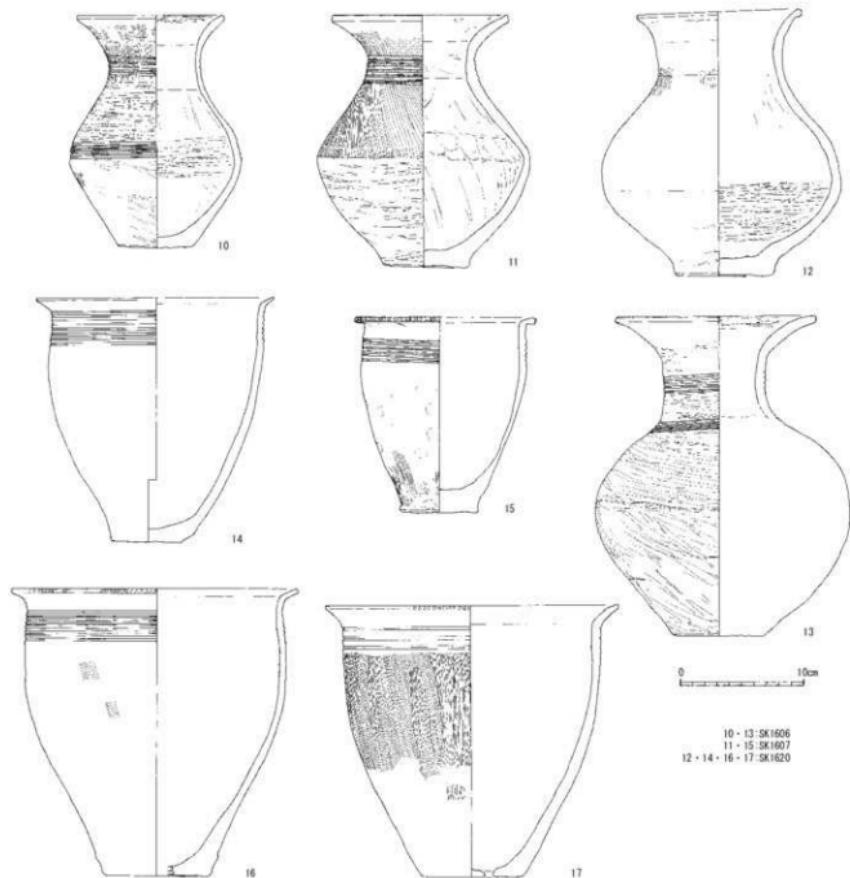


fig. 34 16トレンチ出土遺物（第3遣構面）

## 第2節 17・18トレンチ出土遺物

17・18トレンチとともに、第46次調査（平成23年度調査）における調査区である。各トレンチの詳細についても、第2章において概説している。

同トレンチは遣構が第1遣構面において多く検出されたこともあって、出土遺物も同面のものが多い。

18～23はSB1706（17トレンチ第1遣構面）の出土資料である。古墳時代初頭に属するものと考えられる。

18～20は小型の鉢で、口径11.0～16.7cm、器高5.8～7.6cmを測り、20は底部が高台状に作られている。

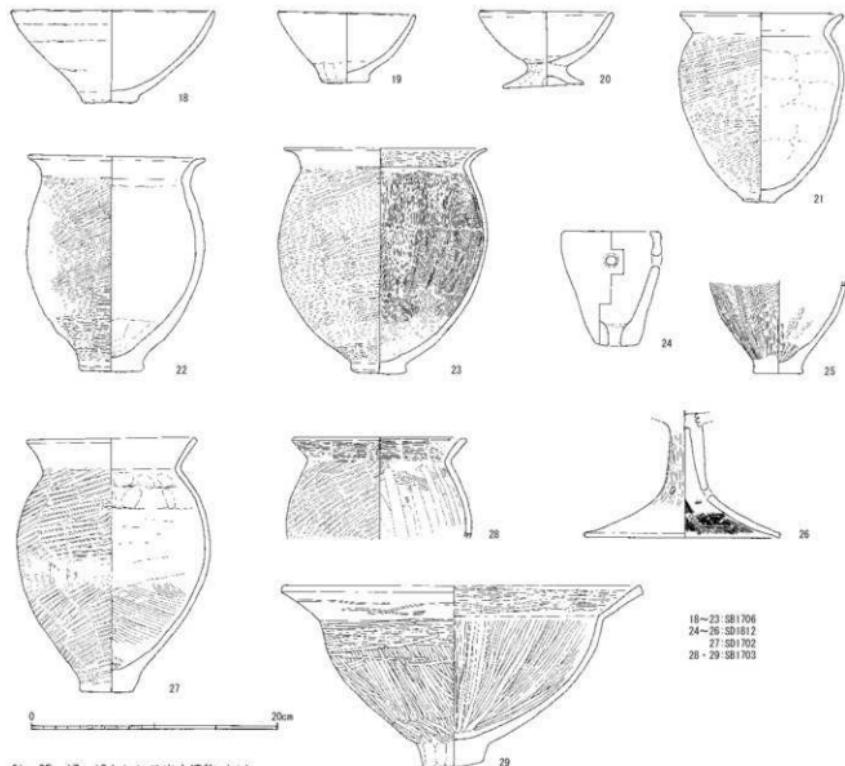


fig. 35 17・18トレンチ出土遺物（1）

18~23: SB1706  
24~26: SD1812  
27: SB1702  
28~29: SB1703

器面調整はナデが用いられており、外面はやや粗雑な感があるものの、内面は比較的丁寧に仕上げられている。

21~23はV様式系タタキ甕の類で、口径13.3~16.7cm、器高15.5~18.6cmを測り、いずれも小ぶりのものである。

いずれも外面の口縁部がヨコナデ、体部がタタキにより調整が施されるが、23は内面がハケ（一部ナデ）によって仕上げられている。また、21、22の内面調整は丁寧なナデが用いられている。

24~26はSD1812（18トレンチ第1遺構面）、27はSD1702（17トレンチ第1遺構面）の出土資料で、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

24は平底、コップ形のイイダコ壺で、口径8.1cm、器高9.4cmを測る。体部上位に1カ所紐孔が施され、また、底部には水抜き孔が施されている。器面は磨滅により調整不明である。

25は甕の底部と考えられる。外面はタタキ後にハケにより仕上げられており、内面はハケもしくはナデによって調整されている。

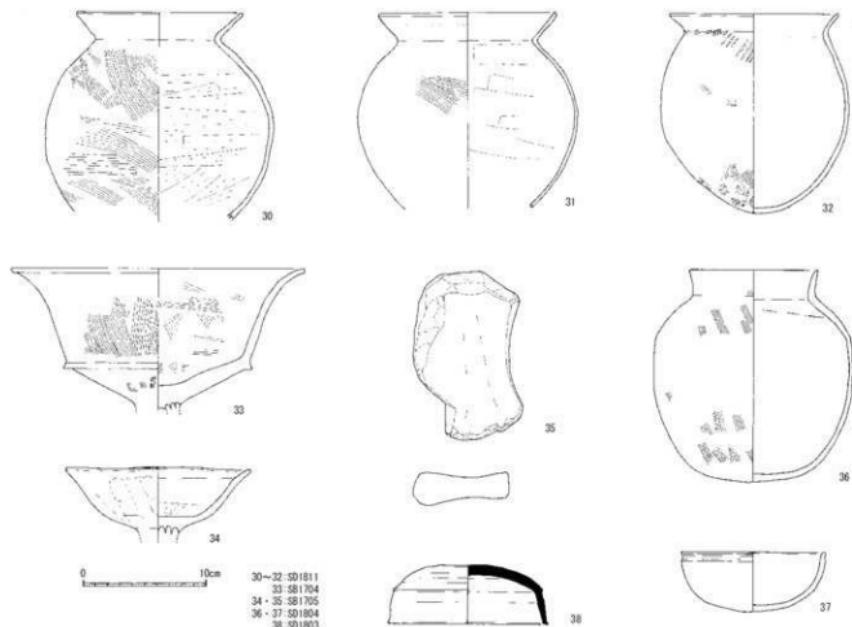


fig. 36 17・18トレンチ出土遺物（2）

26は高環の脚部で、脚部径16.0cmを測る。脚部中位には3ヶ所の穿孔がみられる。器面は磨滅により調整が不明瞭な箇所を有するが、外面はミガキ、内面はナデ、ハケによって仕上げられている。

27は甕で、口径14.0cm、器高20.9cmを測る。口縁部はヨコナデ、外面体部はタタキ、内面体部は上位にユビナデ、中位にナデ、下位にハケが施される。

28、29はSB1706（17トレンチ第1遺構面）の出土資料である。弥生時代後期後半～末に属するものと考えられる。

28は甕で、体部中位以下が欠損している。外面体部は一般的なタタキが施されるが、口縁部は板ナデ、内面体部はハケ後板ナデが施される。

29はやや大ぶりの鉢で、口径29.6cm、器高14.9cmを測る。外面口縁部、底部以外は丁寧なミガキによって器面が仕上げられている。

30～32はSD1811（18トレンチ第1遺構面）の出土資料である。いずれも甕で、古墳時代初頭～前期に属するものと考えられる。

32以外は体部下位が欠損し、全体形状は不明であるが、丸底となる可能性が高い。口径13.5～14.5cm、32の器高は16.4cmを測り、いずれもやや小ぶりのタイプである。

30は口縁部にやや肥厚がみられ、体部の外面のハケ、内面をケズリによって器壁を薄く仕上げており、いわゆる布留形甕に該当するものと考えられる。

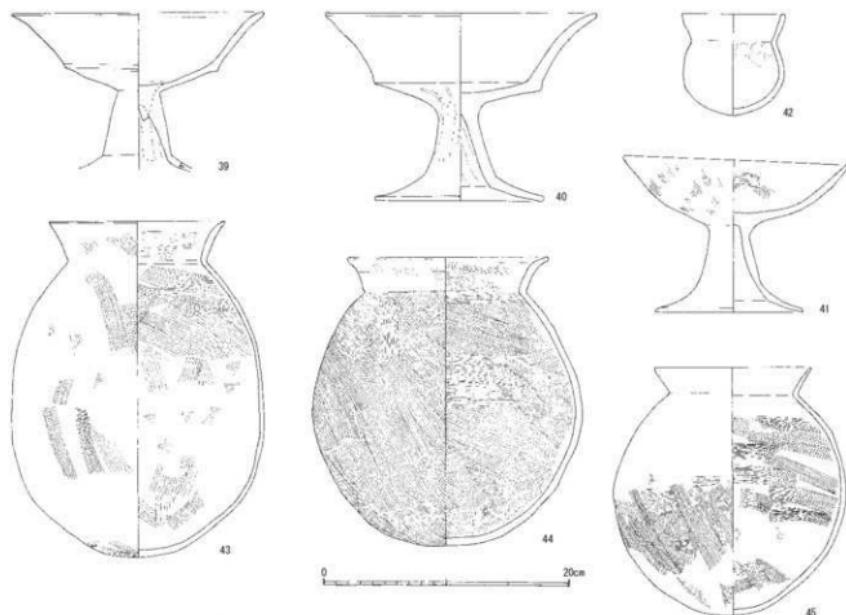


fig. 37 18トレンチSB1804出土遺物

31は磨滅により器面調整が不明瞭であるが、ハケ、ケズリを用いて器壁を薄く仕上げており、庄内系甕に相当する可能性が高い。

32はいわゆるV様式系タタキ甕で、磨滅により器面調整が不明瞭ながら、体部の外面はタタキ後ナデ、内面はナデによって仕上げられていることが確認できた。底部はわずかに尖底である。

33はSB1704、34・35はSB1705（いずれも17トレンチ第1遺構面）の出土資料である。33、34はいずれも高坏で、脚部が欠損している。35は砥石と考えられる石製品である。古墳時代前期に属するものと考えられる。

33は坏部の口径が24.2cm、坏部高が約11cmを測るやや大ぶりのタイプである。坏部の稜も明確で、0.5cm程度の突起となっている。器面はハケもしくはナデによって仕上げられている。

34は坏部の口径が15.2cmを測る。坏部の下位にわずかに稜が確認できることから、有稜高坏の類と考えられる。器面はナデにより調整されるが、やや粗雑な箇所もある。

35は灰緑色の頁岩と考えられる素材を用いた砥石で、両平面と1側面を擦面として使用した痕跡を有する。

36、37はSD1804、38はSD1803（いずれも18トレンチ第1遺構面）の出土資料である。古墳時代中期後半に属するものと考えられる。

36は甕で、やや直立した口縁部、平底に近い丸底のタイプのもので、口径13.5cm、器高17.3cmを測る。器面は磨滅のため調整が不明瞭であるが、外面体部はハケによって仕上げられていることが確認できた。

37は小形丸底土器の類と考えられるが、やや大ぶりで、口径11.8cm、器高5.0cmを測る。塊形を呈し、口縁

部の外面に、凹線状のくぼみを有する。器面はナデによって仕上げられている。

38は須恵器坏蓋で、口径13.2cm、器高4.8cmを測る。回転ナデによって成形されており、外面上位は回転ヘラケズリによって調整されている。

39~45はSB1804（18トレンチ第1遺構面）の出土資料である。古墳時代前期に属するものと考えられる。39~41は高坏、42は小形丸底土器、43~45は甕である。

39は脚部の端部が欠損しており、全体形状は不明確である。脚部は端部に向けて屈曲しており、坏部の中位に稜を有し、端部に向けてやや外反する。坏部は口径20.7cmを測る。器面はナデにより調整されている。

40は口径22.3cm、器高15.4cmを測る。磨滅のため器面調整が不明瞭で、外面坏部下位から脚部中位にかけて、ミガキの一部が確認できた程度である。

41は口径18.5cm、器高12.5cmを測る。坏部の稜もほとんどみられず、脚部の屈曲も緩いタイプである。磨滅のため器面調整が不明瞭で、坏部の内外面の一部においてハケが確認された程度である。

42は小形丸底土器の類で、口径9.5cm、器高8.3cmを測る。器面は口縁部がヨコナデ、体部がナデによって調整されている。

43はやや長胴のタイプで、口径14.4cm、器高27.5cmを測る。ハケもしくはナデによって、器面を仕上げている。

44は口径16.5cm、器高23.7cmを測る。体部はほぼ球形で、口縁端部がやや屈曲するかたちで外反する。ハケもしくはナデによって器面を調整しており、特に、体部は丁寧なハケが施される。

45は球形で器壁も薄く、庄内形甕に似たプロポーションを呈する。口径12.9cm、器高20.3cmを測る。器面調整は磨滅により不明瞭な箇所を有するが、口縁部がヨコナデ、体部がハケによって仕上げられている。

### 第3節 19トレンチ出土遺物

19トレンチは、第46次調査（平成23年度調査）における調査区である。トレンチの詳細については、第2章において概説している。

同トレンチにおいては、4面の遺構面が確認されたが、第2遺構面および第4遺構面における遺物の出土が多く、特に、第2遺構面のSD1912からの出土が数量的には多い。同遺構の資料は、弥生時代後期～古墳時代後期と時期幅が大きいが、数量的には古墳時代中期～後期に属するものが多い。

46~65は、SD1912からの出土資料である。

46は須恵器坏蓋で、口径10.9cm、器高3.9cmを測る。回転ナデによって成形されており、外面上位は回転ヘラケズリによって調整されている。

47、48は須恵器坏である。48は47に比べて立ち上がり部が短いタイプで、時期的に新しい。いずれも回転ナデによって成形されており、外面下位は回転ヘラケズリによって調整されている。47は口径12.2cm、器高5.5cm、48は口径11.5cm、器高4.1cmを測る。

49は須恵器有蓋高坏の蓋で、口径11.0cm、器高5.3cmを測る。回転ナデによって成形されており、外面上位は回転ヘラケズリによって調整されている。外面上部には擬宝珠様のツマミが付されている。

50は須恵器有蓋高坏で、脚部の中位以下が欠損している。坏部は口径9.6cmを測る。また、坏部は回転ナデによって成形されており、外面下位は回転ヘラケズリによって調整されている。脚部にはスカシが3ヶ所施されている。

51、52は須恵器無蓋高坏で、いずれも脚端部がやや内側に屈曲するタイプである。また、坏部中位には、や

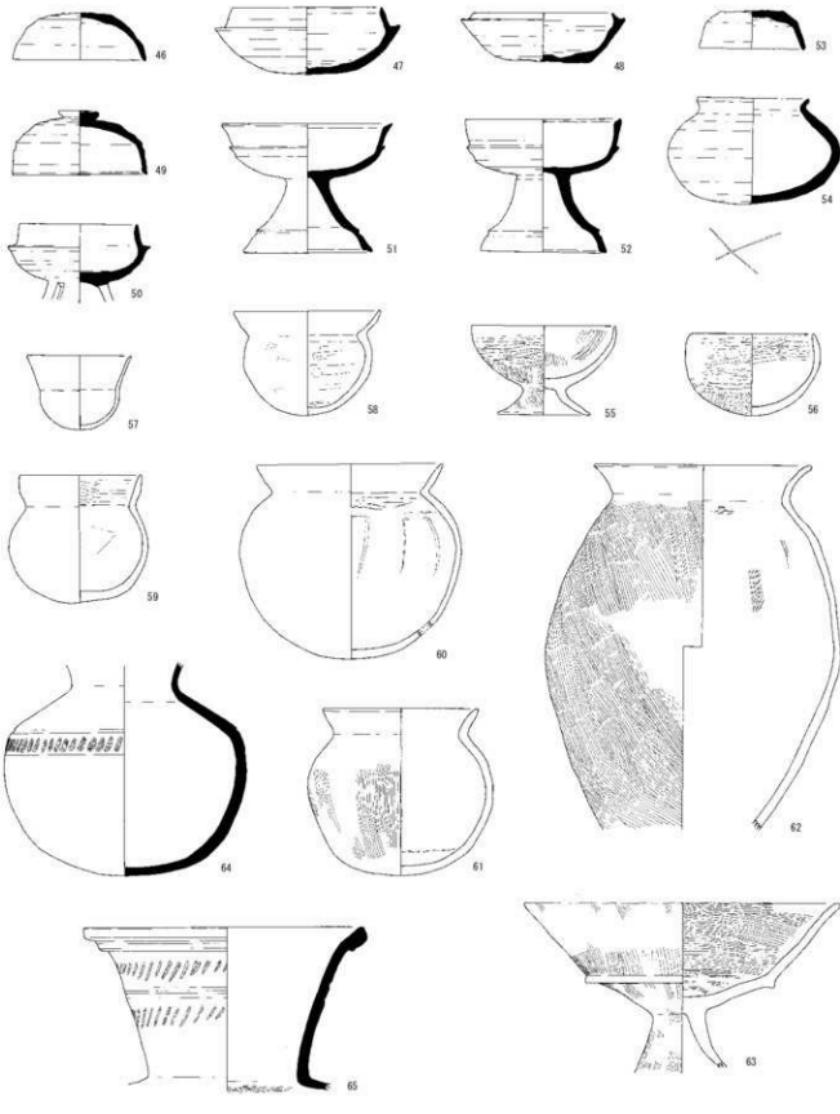


fig. 38 19トレンチSD1912出土遺物

や鋭い稜がみられる。基本的に回転ナデによって成形されており、坏部の外面下位は回転ヘラケズリによって調整されている。51は口径14.0cm、器高11.6cm、52は口径12.7cm、器高11.0cmを測る。

53は須恵器短頸壺の蓋と考えられる。回転ナデによって成形されており、外面天部は回転ヘラケズリによって調整されている。口径8.7cm、器高3.2cmを測る。

54は須恵器短頸壺で、回転ナデによって成形されている。底面には「×」のヘラ記号が描かれている。口径9.2cm、器高8.7cmを測る。

55～59は小形丸底土器の範疇のものと考えられる。55、56が塊形の類のもので、55は脚部がつくタイプである。57～59は小型壺の類である。

55は口径11.8cm、器高7.3cmを測る。器面は丁寧なミガキによって仕上げられている。

56は口径10.0cm、器高6.7cmを測る。ナデもしくはミガキによる調整が施されるが、特に、体部上位は丁寧なミガキによって仕上げられている。また、外面底部には接地時の打撃痕のような使用痕がみとめられる。

57は口縁部がやや発達したタイプのもので、口径8.5cm、器高6.2cmを測る。器面は丁寧なナデにより調整されている。

58は口径12.0cm、器高8.5cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ後ナデ、体部内面はナデもしくは板ナデによって、概ね調整されている。

59は口縁部がほぼ直立し、やや肥厚がみられるタイプで、口径10.0cm、器高10.5cmを測る。器面は外面がナデ、内面の口縁部がハケ、体部が板ナデもしくはユビナデで仕上げられている。

60～62は甕で、62は長胴タイプのものである。

60はほぼ球形の体部をもつタイプで、口径15.3cm、器高16.0cmを測る。器面は口縁部がヨコナデ、体部外面がナデ、内面がナデもしくはヘラナデで調整されているが、磨滅のため不明瞭である。

61は口径12.8cm、器高13.7cmを測る。器面は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケ、内面がナデによって仕上げられている。

62は体部下位以下が欠損している。口径17.8cm、残存高30.0cmを測る比較的大ぶりのものである。器面は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケ、内面がハケ後ナデによって仕上げられている。

63は高坏で、脚部の中位以下が欠損している。比較的大ぶりのタイプで、口径26.0cmを測る。ハケ、ハケ後ナデ、ナデによって器面調整が行われている。

64は須恵器長頸瓶の体部と考えられる。最大径19.9cmを測る。回転ナデにより成形されており、外面体部中位に2条の沈線に挟まれた刺突文帯を有する。

65はやや大ぶりの須恵器広口壺の口縁部と考えられる。回転ナデにより成形されており、外面に2条の沈線と2列の刺突文帯が施される。また、体部内面には同心円文が残存する。口径23.2cmを測る。

66～68は第3遺構面の出土資料である。検出遺構は弥生時代後期～古墳時代前期に属するものが大半であるが、遺物は弥生時代前期～中期のものも含まれる。66は広口長頸壺、67は甕、68はやや大ぶりの直口壺の範疇のもので、66が弥生時代前期末～中期初頭、67、68が古墳時代初頭～前期に概ね属するものと考えられる。

66はSD1961（下層）の出土資料である。口径13.5cm、器高20.2cmを測る。外面頭部にヘラ描き沈線（2条）を施し、外面をハケ、内面をナデによって仕上げられている。また、外面体部中位に円弧状ヘラ描きの記号が3カ所みられる。

67はSP1953の出土資料である。口径14.6cm、器高19.7cmを測る。体部は球形で、口縁部にわずかな肥厚がみられ、布留形甕に近い形状を呈する。器面はヨコナデ、板ナデ、ナデによって丁寧に仕上げられている。

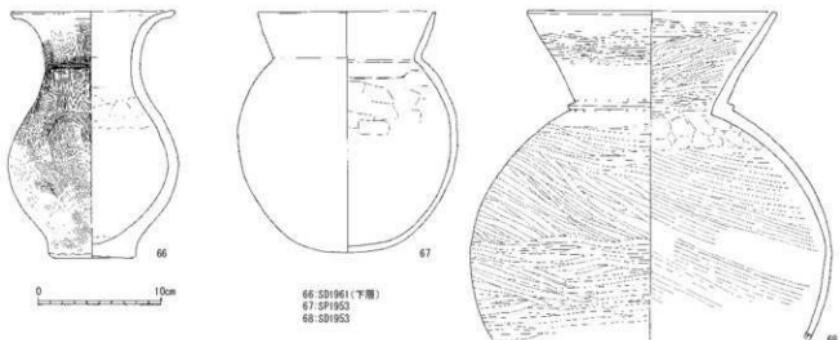


fig. 39 19トレンチ出土遺物（第3造構面）

68はSD1953の出土資料で、体部下位が欠損する。口径20.4cm、残存高27.0cmを測る。口縁部が体部から鋭く屈曲し、直線的にたちあがる。また、頸部にはわずかな突帯がみられ、その突帯を挟むように列点文が施される。器面は外面がミガキもしくはナデ、内面は口縁部がミガキもしくはナデ、体部がハケもしくはナデによって仕上げられている。

69~80は第4造構面において確認された出土資料である。概ね、弥生時代前中期～中期初頭に属すると考えられる。

69はやや小ぶりの鉢である。口径11.9cm、器高9.6cmを測る。器面は外面がハケもしくはナデ、内面がナデもしくはヨコナデによって仕上げられている。

70、71は蓋で、70が口径21.7cm、器高8.0cm、71が口径19.7cm、器高10.0cmを測る。磨減等により、器面の状態が不明瞭な箇所も有するが、概ね、ナデ、ヨコナデ、板ナデによって調整されている。

72~80は甕で、扁平で鉢に近い形状のもの（73・74）、外面体部上位にヘラ描き沈線を施すもの（72・73・75~77）、口縁端部にキザミ目を施すもの（75~78・80）、底部が穿孔されているもの（78）など、タイプはさまざまである。

72は体部下位以下が欠損する。口径18.1cmを測る。外面体部上位にヘラ描き沈線を6条施し、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、外面体部はハケもしくはナデによって調整されている。

73はやや扁平なタイプのもので、口径24.3cm、器高15.9cmを測る。外面体部上位にヘラ描き沈線を3条施し、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、外面体部はミガキもしくはナデによって仕上げられている。

74もやや扁平なタイプのもので、口径20.6cm、器高17.2cmを測る。器面については、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、外面体部はハケもしくはナデによって調整されている。

75は口径17.7cm、器高17.8cmを測る。外面体部上位にヘラ描き沈線を3条、口縁端部にはキザミ目が施される。器面は磨減等によって状態が不明瞭な箇所が多いが、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、板ナデ、外面体部はハケによって調整されている。

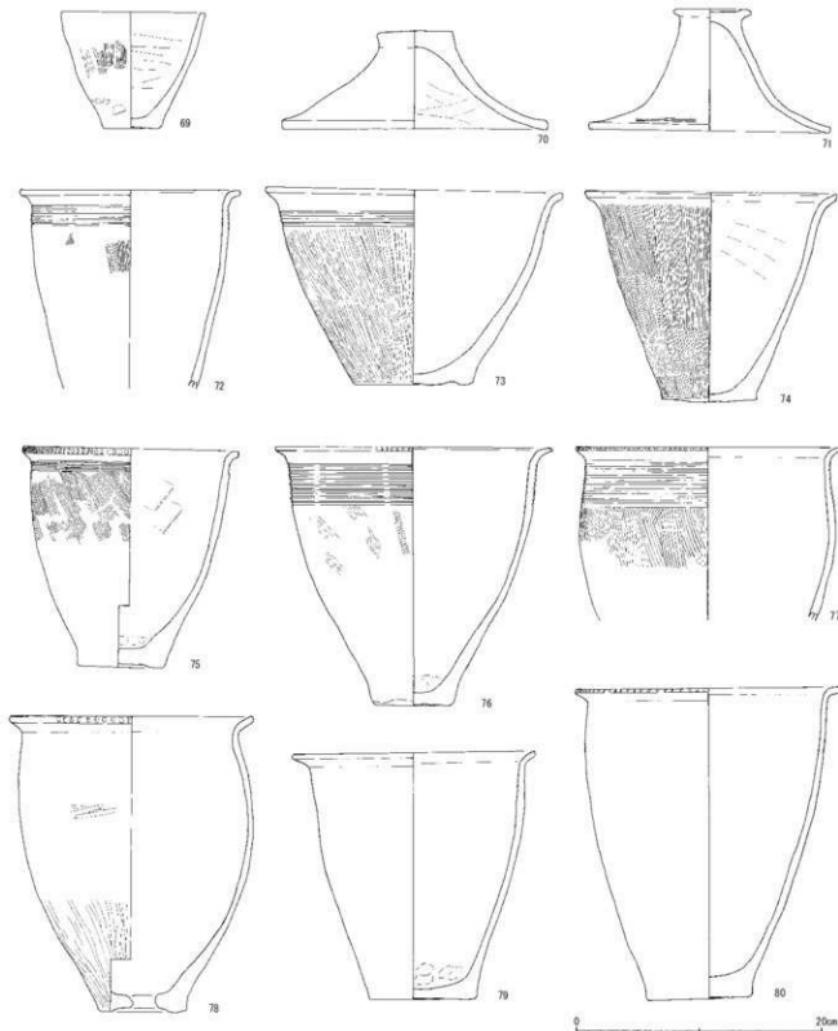


fig. 40 19トレンチ出土遺物（第4造構面）

74・79・80 SK1932  
 70・75・77 SK1934  
 78 SK1931  
 69・73 SK1939  
 76 SK1946

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20cm

76は口径22.6cm、器高21.2cmを測る。外面体部上位にヘラ描き沈線を10条施し、多条沈線を有するタイプに分類される。また、口縁端部には極めて細いキザミ目が施される。器面については、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、ユビナデ、外面体部はハケもしくはハケ後ナデによって調整されている。

77は体部中位以下が欠損する。口径21.7cmを測る。外面体部上位にヘラ描き沈線を11条施し、76と同様に多条沈線を有するタイプに分類される。また、口縁端部にはキザミ目が施される。器面は磨滅や剥離によって状態が不明瞭な箇所が多いが、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、外面体部はハケによって調整されている。

78は口径20.0cm、器高24.2cmを測る。口縁端部にキザミ目を施し、底部は穿孔している。器面調整は磨滅等により不明瞭であるが、内面および外面口縁部はナデもしくはヨコナデ、外面体部はミガキによって調整されている。

79は口径20.0cm、器高20.3cmを測る。器面調整は磨滅等により不明瞭であるが、ナデもしくはユビナデによって調整されている。

80は口径21.8cm、器高25.4cmを測る。口縁端部にキザミ目を施し、器面はナデもしくはヨコナデによって調整されている。

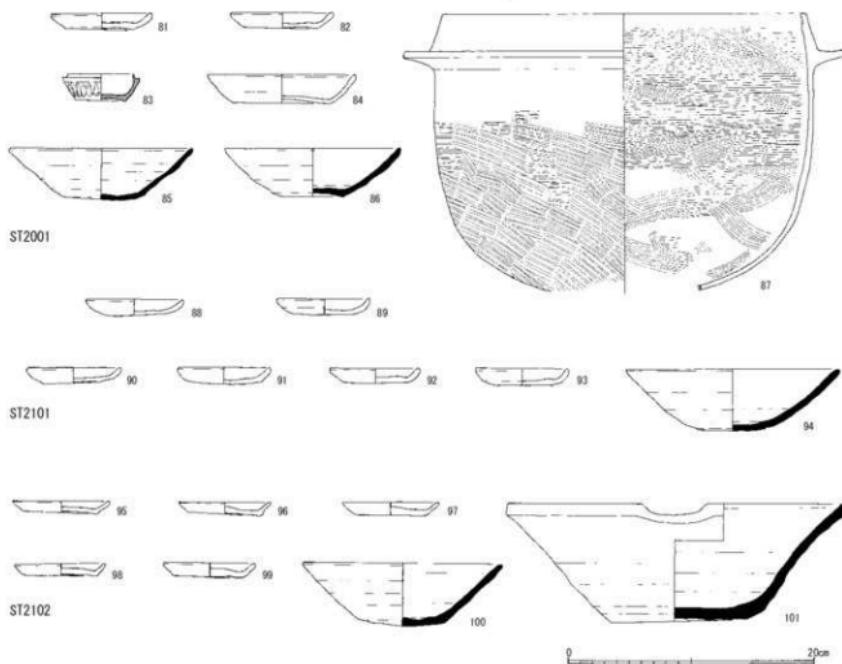


fig. 41 20・21トレンチST2001・2101・2102出土遺物

#### 第4節 20・21・22トレンチ出土遺物

20・21・22トレンチは、第46次調査（平成23年度調査）における調査区で、最も東側に位置する。尚、各トレンチの詳細については、第2章において概説している。

81～119は第1遺構面の出土資料である。同遺構面においては、古墳時代前期～鎌倉時代前期の遺構を検出したが、出土資料は弥生時代後期～中世に及ぶ。

81～101は土葬墓（木棺墓）の出土資料である。81～87がST2001（平安時代末～鎌倉時代初頭）、88～94がST2101（平安時代後期～末）、95～101がST2102（鎌倉時代初頭～前期）の資料である。

81、82、84は土師器皿である。84は中型で、口径12.1cm、器高2.3cmを測る。また、81、82は底面が糸切りのタイプで、口径8.2～8.5cm、器高1.3～1.7cmを測る。

83は青白磁合子で、受部径6.3cm、器高2.2cmを測る。型押しで成形されており、外面体部下位以外は青白色のガラス質の透明釉が施される。体部には花弁が表現されている。

85、86は須恵器塊で、回転ナデによって成形されており、底部は糸切りが施される。85が口径15.2cm、器高4.3cm、86が口径14.5cm、器高4.0cmを測る。

87は羽釜で、復元口径30.0cm、残存高22.7cmを測る。口縁部および萼部はヨコナデ、体部外面はタタキ、内面はハケによって調整されている。

88～93は土師器皿で、90、92、93の底部は糸切りが施されている。いずれも小ぶりで、口径7.4～8.0cm、器高1.2～1.4cmを測る。

94は須恵器塊で、回転ナデによって成形されており、底部は糸切りが施される。口径17.5cm、器高5.1cmを測る。

95～99は土師器皿で、いずれも糸切りが施されている可能性があるが、器面の磨滅が著しく、不明瞭である。口径7.5～8.0cm、器高1.0～1.2cmを測る。

100は須恵器塊で、回転ナデによって成形されており、底部は糸切りが施される。口径16.4cm、器高5.1cmを測る。

101は須恵器鉢である。回転ナデによって成形されており、底部は糸切りが施され、口縁端部は断面三角形状に仕上げられている。口径27.7cm、器高9.7cmを測る。

102～105は掘立柱建物の柱穴の出土資料である。102がSH2101、103～105がSH2201の資料である。また、106～112は掘立柱建物に付随すると考えられる土坑の出土資料で、106～108がSK2104、109、110がSK2103、111、112がSK2106の資料である。平安時代後期～鎌倉時代前期の範疇のものと推測される。

いずれも土師器皿で、108、112は中型のタイプで、口径13.8～14.0cm、器高2.7～3.3cmを測る。また、102～107、109～111は小ぶりのタイプで、口径7.6～8.8cm、器高1.0～1.5cmを測る。102、104～110は底面に糸切りが施されている。

113、114はSD2102の出土資料で、いずれも須恵器塊である。回転ナデによって成形されており、外面下位は回転ヘラケズリによって調整されている。113は口径12.7cm、器高4.9cm、114は口径11.4cm、器高4.9cmを測る。形状から113は古墳時代後期前半、114は古墳時代中期後半に属するものと考えられる。

115～119は古墳時代初頭～前期に属する出土資料で、115がP630、116～118がSD2003、119がSK2002の資料である。

115は小形丸底土器の範疇で、有段口縁鉢の類のものと考えられる。復元口径12.7cm、器高4.7cmを測る。器面は比較的丁寧なナデによって仕上げられている。

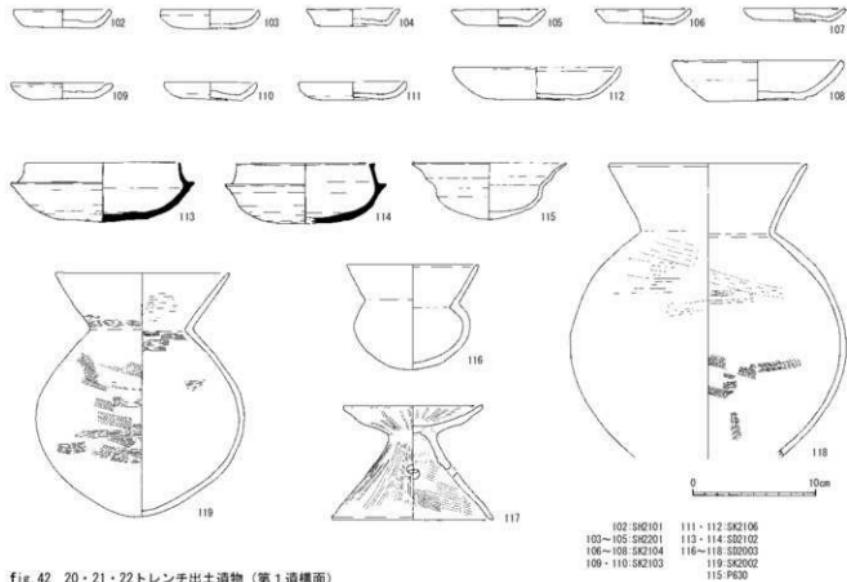


fig. 42 20・21・22トレンチ出土遺物（第1遣構面）

102: SH2101  
 103～105: SH2201  
 106～108: SH2104  
 109～110: SH2103  
 111～112: SH2106  
 113～114: SD2102  
 115～116: SD2003  
 119: SD2002  
 115: P630

116も小形丸底土器の範疇のものである。口径10.9cm、器高8.6cmを測る。磨滅により、器面調整が不明瞭な箇所が多いが、ナデもしくはヨコナデによって調整されている。

117は小型器台で、受部が浅く、脚部がほぼ正三角形状に開くタイプである。脚部の中位には穿孔が2カ所みられるが、欠損部分を含めると4カ所と推察される。器面については、脚部内面がハケもしくはナデ、それ以外はミガキもしくはナデによって丁寧に仕上げられている。

118、119は、直口壺の範疇のもので、118は底部を欠損するが、凡そ丸底と推察される。いずれも器面をハケもしくはナデ、または板ナデ、ヨコナデによって丁寧に調整されている。118は口径16.4cm、残存高24.1cm、119は口径14.4cm、器高20.0cmを測る。

120～136は第2遣構面の出土資料である。同遣構面においては、弥生時代後期～古墳時代前期の遣構が検出されたが、出土資料は弥生時代前期にまで及ぶ。

120はSB2121、121はSB2122の出土資料である。古墳時代前期に属するものと考えられる。

120はやや小ぶりの壺で、口径10.0cm、器高13.0cmを測る。体部は球形で、口縁部にわずかな肥厚がみられ、布留形甕に近いプロポーションを呈する。口縁部がヨコナデ、体部がハケもしくはナデによって調整されている。

121は小ぶりの台付鉢で、口径12.6cm、器高6.5cmを測る。脚部はヨコナデ、体部内面はミガキ、外面はヘラナデもしくはヨコナデによって丁寧に調整されている。

122～125がSD2023、126がSD2027、127、128がSD2022、129がSD2024の出土資料である。これらの遣構は、概ね弥生時代後期～古墳時代初頭のものと推測されるが、下層に弥生時代前期末～中期初頭の遣構面が存在する

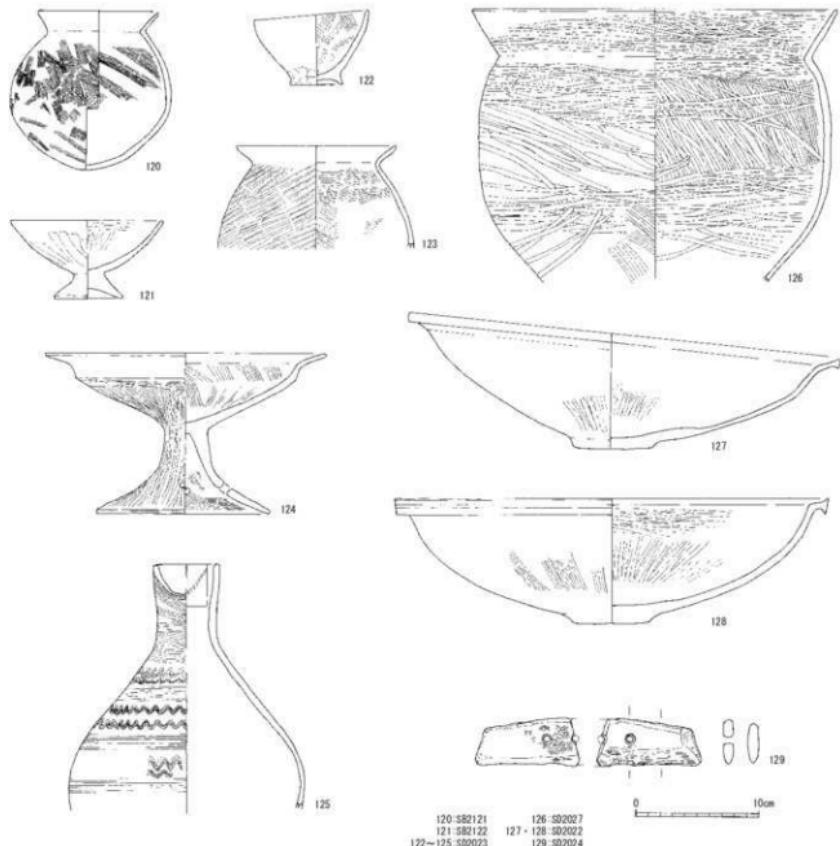


fig. 43 20・21・22トレンチ出土遺物（第2造横面）

影響から、埋土中に弥生時代後期以前の遺物が数多く混入している。

122は小ぶりの鉢で、口径9.4cm、器高6.3cmを測る。底部にやや崁がみられ、高台状を呈する。内面はハケ、外面はナデもしくはユビナデによって調整されている。

123はV様式系タタキ甕で、体部の中位以下が欠損している。口径13.3cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部外面がタタキ、内面がハケによって調整されている。

124は高壺で、口径23.1cm、器高13.1cmを測る。壺部は稜から大きく外反し、脚部はほぼ斜めに延び、端面にナデによる回線状の崁がみられる。また、中位に4カ所の穿孔を有する。口縁部はヨコナデ、壺部内面はナデ後ハケ、脚部内面はハケもしくはナデ、壺部から脚部にかけての外面は縦方向のミガキ、稜周辺は横方向のミガキによって丁寧に仕上げられている。

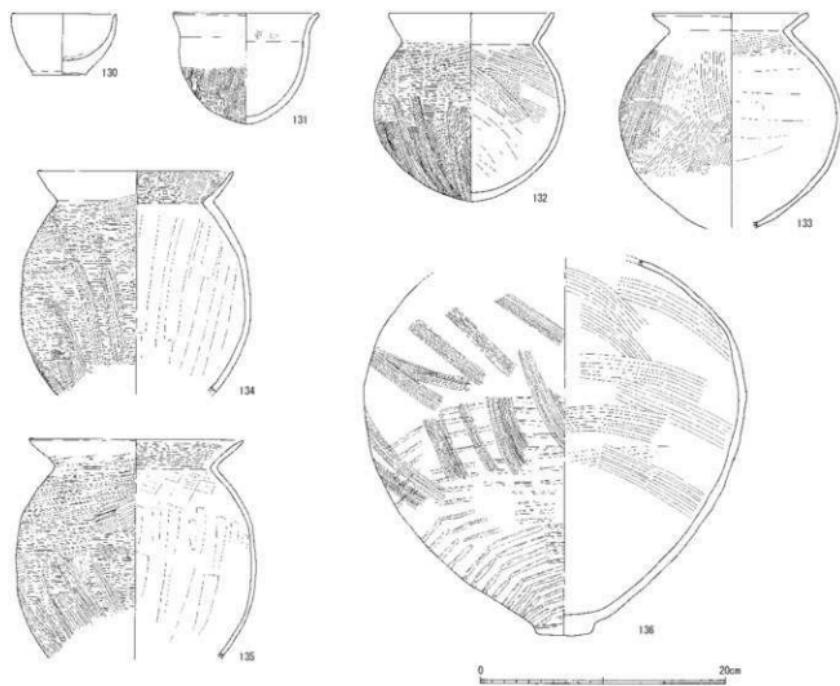


fig.44 20トレンチSD2025出土遺物

125は細頸壺で、体部の中位以下が欠損している。口径5.5cm、残存高20.1cmを測る。口縁部が体部からほぼ直線的に立ち上がり、端部の半分程度がU字状に作られており、片口のような形状を呈する。器面については、内面は概ねナデで調整されるが、外面は櫛描文と波状文が交互に施される。弥生時代中期中葉のものと考えられる。

126は大型の鉢で、体部の下位以下が欠損している。復元口径30.0cm、残存高22.4cmを測る。器面が丁寧なミガキで仕上げられており、外面の一部にハケもしくはナデが施される。

127、128は大型で浅いタイプの鉢で、口縁部が鋭く外反し、端部が肥厚する。特に、128は端面が大きく、凹線状の崁を有する。127は口径35.5cm、器高9.5cm、128は口径35.6cm、器高10.3cmを測る。器面は磨滅等により、調整が不明瞭な箇所も有するが、口縁部がヨコナデ、体部がミガキによって概ね仕上げられており、128の体部外面はハケを施す。

129は粘板岩製の石包丁で、幅4.0cm、厚さ0.8cm、孔径0.5cmを測る。全体の約半分程度が欠損している。研磨によって刃部をつくりだしており、2カ所の紐穴が穿けられている。

この石包丁が出土したSD2024は、概ね弥生時代後期の遺構と考えられるが、弥生時代前期末～中期初頭の遺物も多く出土することなどから、同時期に属する資料である可能性が高い。

130～136はSD2025の出土資料である。概ね古墳時代初頭～前期に属するものと考えられる。

130は小型の鉢で、口径8.7cm、器高5.1cmを測る。ナデもしくは板ナデで器面を調整している。

131は小形丸底土器の類のもので、口径12.0cm、器高9.1cmを測る。器面については、口縁部および外面体部上位がヨコナデ、内面体部がナデ、外面体部中位以下がハケによって仕上げられている。

132は体部が球形を呈す甕で、器壁も薄く仕上げられており、庄内式甕に近いタイプのものと考えられる。口縁部はヨコナデ、体部外面はタタキで、中位以下はタタキ後ハケ、内面はケズリで中位以上はケズリ後ハケによって仕上げられている。口径13.8cm、器高15.5cmを測る。

133も132と同様に体部が球形を呈す甕で、132に比べて口縁部が短く作られている。また、底部が欠損する。器面は磨滅や剥離によって状態が不明瞭な箇所も有するが、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ、内面は上位がハケ、中位がナデもしくはヘラナデ、下位がナデもしくはユビナデによって調整されている。口径12.9cm、残存高17.7cmを測る。

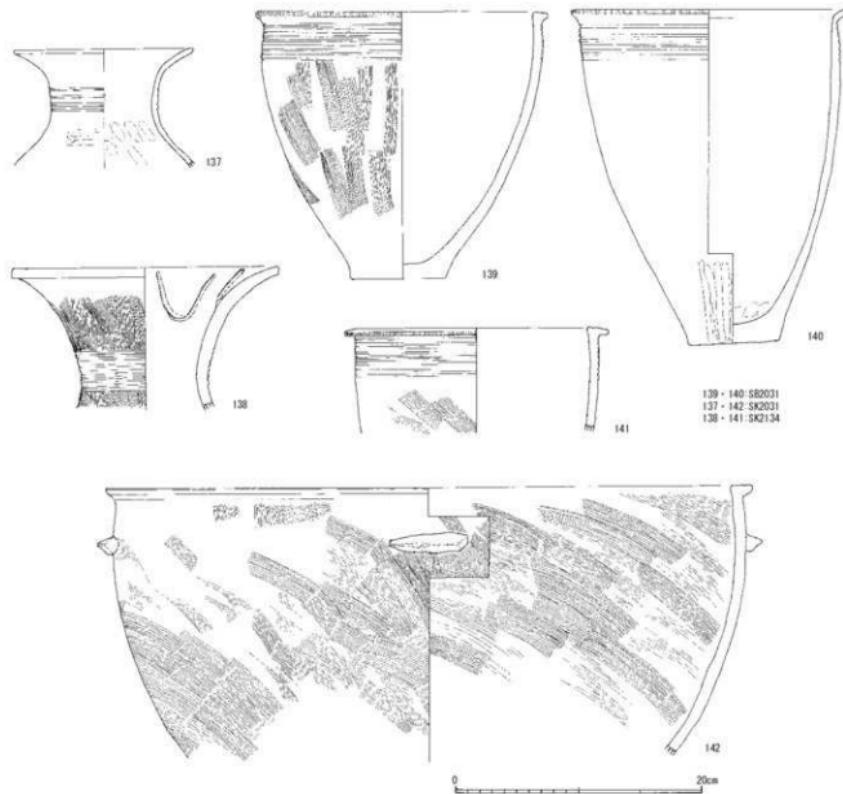


fig. 45 20・21トレンチ出土遺物（第3造様面）

134、135はV様式系タタキ甕の類のもので、いずれも体部の下位以下が欠損している。134は口径16.1cm、135は17.5cmを測る。器面調整は、いずれも外面口縁部がヨコナデ、体部がタタキで、中位以下がタタキ後ハケ、内面口縁部がハケ、体部が継もしくは斜方向のケズリによって仕上げられている。

136は体部上位以上が欠損しているため、全体形状は不明であるが、やや大型の広口壺と考えられる。体部最大径31.3cm、残存高30.8cmを測る。外面はやや大きめのタタキが施され、中位以上はタタキ後ハケによって仕上げられている。内面はハケもしくはナデによって仕上げられている。

137～150は第3遺構面の出土資料である。弥生時代前期末～中期初頭に属するものと考えられる。

137は中型の広口壺の範疇のものと考えられる。体部上位以下が欠損する。口径14.7cmを測る。外面頸部にヘラ描き沈線（4条）を施し、口縁部および頸部はヨコナデ、体部外面はミガキ、内面はナデもしくはユビナデによって仕上げられている。

138は広口壺で、頸部以下が欠損する。口径21.9cmを測る。外面頸部にヘラ描き沈線（7条）を施し、口縁部がヨコナデ、頸部外面はハケ、内面は丁寧なナデによって仕上げられている。また、口縁部内面に加飾と考えられるU字状の突帯が5ヵ所付加されている。

139～141は甕で、いずれも体部上位に7～9条のヘラ描き沈線が施され、多条沈線を有する甕の類に含まれる。また、いずれも口縁端部にキザミが施される。139は口径23.8cm、器高22.0cm、140は口径22.5cm、器高27.5cm、141は口径21.8cm、残存高8.6cmを測る。器面については、磨滅等で状態が不明瞭な箇所も有するが、ナデもしくはヨコナデを多用し、139、141の体部外面はハケ、140の体部外面下位はミガキが施される。141はその形状から、逆L字口縁甕と考えられ、139についても同様である。

142は大型の鉢と考えられ、復元口径53.0cm、残存高22.1cmを測る。体部上位には長さ6.5cm、幅1.5cm、高さ1.3cmの把手状の突帯が1ヵ所付されており、対面に2ヵ所存在するものと推察される。器面はナデもしくはヨコナデ、体部はハケによって調整されている。

143～150はSX2031の出土資料である。146が蓋、147が甕以外は、壺の類に含まれる。

143は口縁部が欠損するが、広口壺と考えられる。外面頸部にヘラ描き沈線（7条）を施し、外面頸部と内面体部中位はハケ、内面頸部はハケもしくはナデ、内面体部下位はナデもしくは板ナデ、外面体部はミガキで、一部ミガキ後ナデもしくは板ナデによって仕上げられている。

144は壺の体部と考えられる。外面中位にヘラ描き沈線を11条施し、それを挟むように両端部にわずかな突帯がみられる。また、上部の突帯にはキザミ目状の刺突が施される。器面は丁寧なナデによって調整されているが、内面中位の一部にハケも施される。同資料の胎土が茶褐色（やや明るいチョコレート色）を呈し、同地域のものと異なることから、他地域からの搬入品の可能性が高い。

145は中型の広口壺で、口径14.1cm、器高21.2cmを測る。器面調整は磨滅等により不明瞭な部分を有するが、口縁部および頸部はヨコナデ、体部内面はナデ、外面の中位以下はミガキで、中位はハケ後ナデが施されると考えられる。

146は口径24.3cm、器高12.2cmを測る。ナデもしくはユビナデによって調整されている。

147は体部上位に10条のヘラ描き沈線が施され、多条沈線を有する甕の類に含まれる。口縁端部にキザミが施され、底部は穿孔されている。口径21.4cm、器高23.2cmを測る。器面調整については、磨滅等で不明瞭な箇所を有するが、口縁部はヨコナデ、外面体部中位以下はミガキ、それ以外はナデもしくはヘラナデが施される。

148は口縁部が欠損するが、やや大ぶりの広口壺の類のものと考えられる。体部最大径31.7cm、残存高

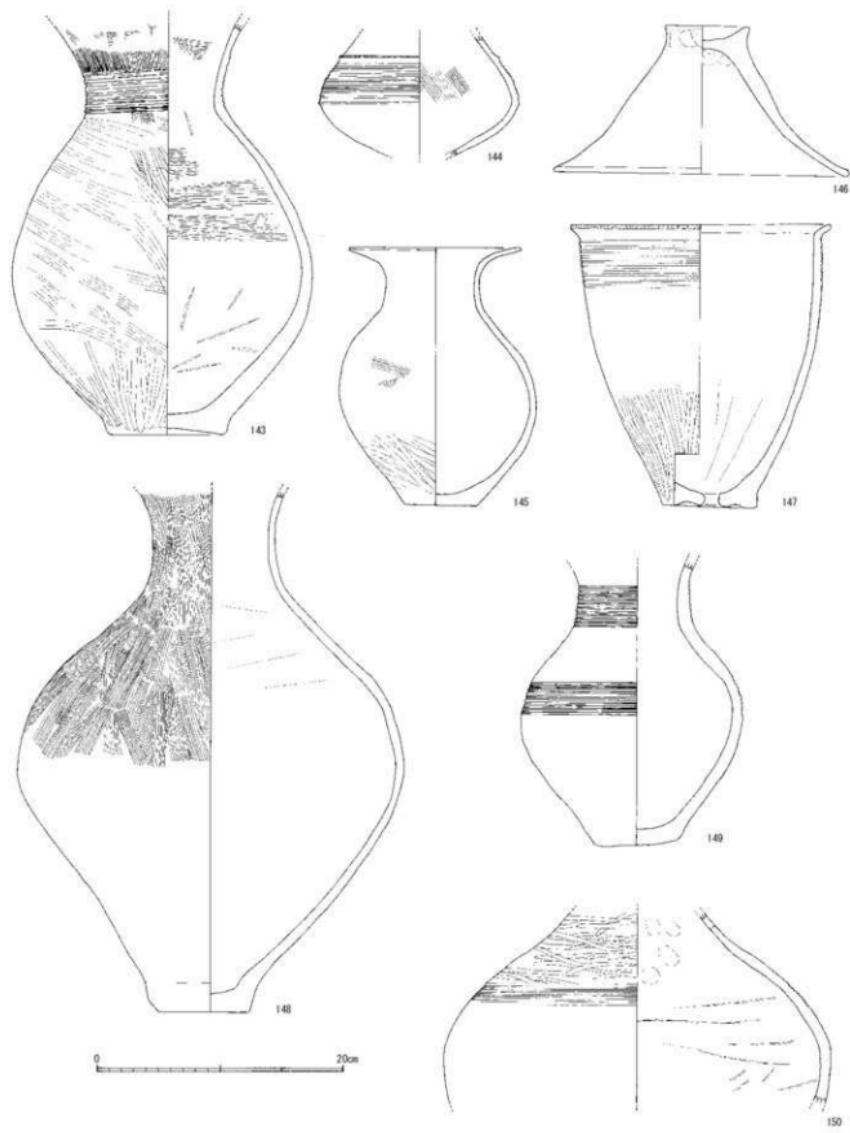


fig. 46 20トレンチSX2031出土遺物

42.7cmを測る。器面については、磨滅等により状態が不明瞭な箇所を有するが、内面がナデもしくは板ナデ、外表面がハケもしくはナデによって調整されている。

149は口縁部が欠損するが、中型の広口壺の範疇のものと考えられる。外表面頭部に10条、体部中位に9条のヘラ描き沈線が施される。器面はナデ等で調整されていると考えられるが、磨滅が著しく、不明瞭である。

150は体部の上位から中位にかけてのみの残存で、形状からやや大ぶりの広口壺と考えられる。外表面中位に9条のヘラ描き沈線が施される。器面については、磨滅等により状態が不明瞭な箇所を有するが、内面がナデもしくは板ナデ、外表面が確認できる部分ではミガキが施される。

## 第5節 遺構に伴わない出土遺物

151は滑石製と考えられる勾玉である。端部が欠損しており、全体の法量は不明であるが、残存長3.4cmを測る。表面は研磨により丁寧に仕上げられており、径0.1cm程度の穿孔が施される。遺物包含層からの出土であることから時期の特定は難しいが、概ね古墳時代前半までの所産である可能性が高い。

152、153は小形丸底土器である。152は153に比べて頭部の屈曲が小さく、152は口径13.4cm、器高6.3cm、153は口径12.0cm、器高7.3cmを測る。器面調整については、磨滅等により不明瞭な箇所も有するが、概ね口縁部がヨコナデ、体部がナデによって仕上げられており、152の体部内面の一部は、ハケ後ナデによって調整されている。古墳時代初頭～前期のものと推察される。

154は口縁部が欠損するものの、形状から二重口縁壺と考えられる。体部最大径16.5cm、残存高15.8cmを測る。体部はほぼ球形で、頭部が直線的にたちあがり、さらに鋭く屈折して口縁部に続く。器面は頭部がヨコナデ、体部上位がナデ、体部中位以下が、外表面はハケもしくは板ナデ、内面はケズリもしくは板ナデによって調整されている。概ね、古墳時代前期のものと考えられる。

155は直口壺で、口径16.0cm、器高28.1cmを測る。器面は体部内面をナデ、それ以外をハケによって丁寧に仕上げられている。古墳時代初頭～前期の範疇のものと推察される。

156は頭部以上が欠損するものの、形状からやや大ぶりの広口壺の範疇のものと考えられる。体部最大径27.5cm、残存高34.0cmを測り、外表面頭部には3ヶ所の突帯が施されるが、欠損部分にも存在する可能性もある。また、突帯にはヘラ等によるキザミが施される。器面については、さまざまな調整や加飾が施される。内面は頭部と体部下位がナデで、体部上位がやや粗いハケ、体部中位がやや細かいハケによって調整されている。外表面は体部上位に2ヶ所の波状文と3ヶ所の櫛描文、体部中位に刺突文が施され、体部中位以上は細かいハケ、体部中位は横方向のミガキ、体部中位は縦方向のミガキによって丁寧に仕上げられている。概ね、弥生時代中期中葉のものと考えられる。

157、158は甕で、157は口径21.9cm、器高21.5cm、158は口径21.3cm、器高24.1cmを測る。概ね、弥生時代前期末～中期初頭に属するものと考えられる。

157は体部上位に11条のヘラ描き沈線が施され、多条沈線を有する甕の類に含まれる。また、形状から逆L字口縁甕に分類される。器面調整は磨滅等により不明瞭な箇所も有するが、口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ、外表面はハケによって調整されている。

158は体部上位に3条のヘラ描き沈線が施され、器面は口縁部がヨコナデ、体部内面がナデ、外表面は下位がミガキ、中位以上がハケによって仕上げられている。

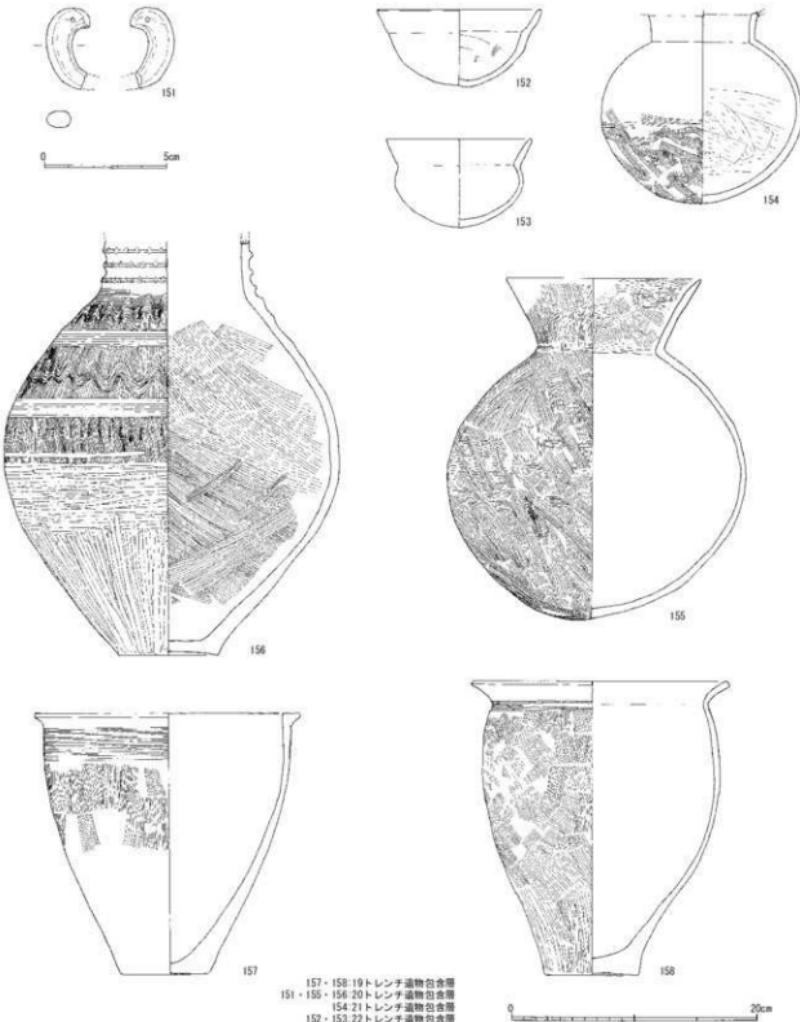


fig. 47 造様に伴わない出土遺物

## 第6節 金属製品

第46次調査において出土した金属製品は24点で、搅乱出土の銅錢2点（永樂通寶・□元口寶）以外は全て鉄製品である。鉄製品は弥生時代後期の遺構（SD1812・SB2021）からそれぞれ1点、古墳時代前期（4世紀前半）の遺構（SB1803）から1点、平安時代後期（12世紀後半）の木棺墓（ST2101）から16点が出土している。あとは旧耕土からの出土のため時期は未詳ではあるが、板状品2点と鉄釘1点がある。

### 弥生時代後期の出土鉄製品

SD1812からは鉄製の鉗が出土している（159）。幅約8.0mm、厚さ約2.5mmの断面長方形を呈する棒状で、先端を薄くやや反らせ気味にし、平面形を三角形に作り出す。先端と基部を欠損しており、残存長8.2cmを測る。

SB2021からは鉄鎌が1点出土している（160）。有茎の三角鎌で、残存長3.6cmを測る。刃部は長さ2.4cm、残存幅1.8cm、厚さ4.0mmを測る。やや細身の二等辺三角形で、底角はやや丸みを帯び、茎へはなだらかに外反しつつ接続している。茎は幅4.8mm、厚さ4.2mmの方形で、先端を欠損しており残存長は1.2cmを測る。また刃部の両面には軸方向に平行して木質の残存が認められた。付着状態から、根拠もしくは矢柄である可能性が高い。材は内部が空洞で、幅が約8.0mm、厚さは最大で2.5mm程度残存している。実体顕微鏡により道管配列を観察したため、広葉樹材であることが判明している。矢柄の樹種選定には様々な例があり、広葉樹のみならず針葉樹材も多く使用されるが、根拠については類例が少なく、兵庫県下では古墳時代初頭の神戸市灘区西求女塚古墳出土の鉄鎌根拠みが、ウツギ属と同定されている。

### 古墳時代前期の出土鉄製品

SB1803からは板状の鉄製品（161）が出土している。厚さは1.5mm前後で、幅2.3cm、長さは2.5cm以上を測る。刀子や鉄斧などの利器にしては厚みが薄いため、鉄素材の可能性もある。

### 平安時代後期の出土鉄製品

ST2101は12世紀後半の木棺墓であり、鉄製品では副葬品と考えられる刀子1点（162）と、木棺板の結合に用いたと思われる鉄釘が14点（163～173ほか2点）、用途不明の板状品が1点出土している。

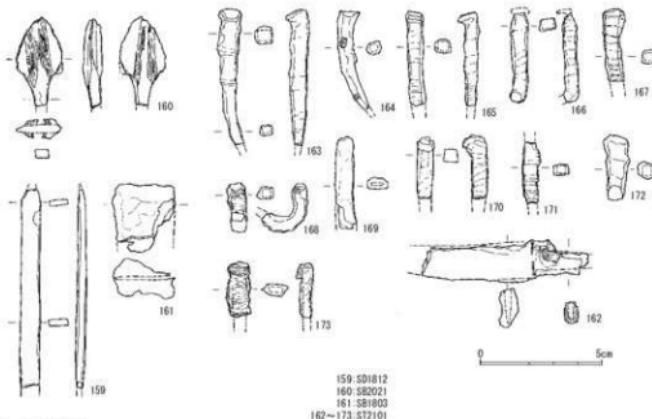


fig. 48 出土鉄製品

162は片刃の刀子である。先端と茎尻を欠損する。残存長は6.8cm、身部幅1.4cm、背厚さ3.6mmを測る。関は両側で、腹側は4.3mm、背側は3.0mmの段差を持つ。茎は関付近の幅が6.9mmで、茎尻に向って直線的に幅を減ずる。目釘孔は認められない。また茎の表面には木質が付着しており、おそらく把に使用された材が残存しているものと考えられる。実体顕微鏡での観察では、大道管が認められず、針葉樹材であることが判明している。木取りは切先・茎尻に纖維方向、背・腹に接線方向を向けた板目板を使用している。茎の把への装着方法は不明であるが、目釘孔が無いため叩き込みによるものと推定される。

鉄釘は全て角釘で、出土状況から木板材同士の結合に用いられたと考えられる。各点の法量等は表2に掲載する。またこれら全点の身部には、木質の付着残存が認められた。材は表面についてのみ顕微鏡観察を行ない、道管の不在からいざれも針葉樹であることが判明している。

釘に残存した木質は木取りの方向によっていくつかのパターンに分けられるが、これは打ち込まれた材の状態を反映している。今回観察されたパターンは以下の3パターンであった。

(パターン①：167・171) 身部側面に木口面、身部前後面に柾目面が観察できるため、柾目板の長側面(板目側)から打ち込まれたことがわかる。しかし、本来は複数の板同士を接合したであろうが、パターン②を含め、もう一方の板の状態は明らかでない。

(パターン②：170) 身部側面に板目面、身部前後面に木口面が観察できるため、板目板の長側面(柾目側)から打ち込まれたことがわかる。

(パターン③：173) 身部前後面に柾目～板目面、身部側面に木口面が観察できるため、打ち込まれた板が材の直径から離れた辺材付近から採られた板か、あるいは径の細い原木から製材された板であること、そして釘の打ち込まれた箇所が板の長側辺で、板目から柾目に移行する部分に当たることがわかる。また釘の頭部上半部において、身部とは木取りの異なる材の付着が認められた。尚、この部分の側面には材の木口面が観察されたが、身部とは年輪の円弧の角度等に差異が認められた。また頭部上面は板目面が観察され、上記の板材の長側辺に対し、板目板の平坦面を直交させて打ち込んだものと考えられる。

報告番号	取り上げ番号	遺物名	長さ	頭幅	身幅
163	R-484	頭巻釘	5.5cm～	9.5mm	7.6mm
164	R-485	頭巻釘	4.1cm～	8.2mm	5.5mm
165	R-489	頭巻釘	3.9cm～	6.8mm	4.6mm
166	R-486	頭巻釘	3.7cm～	—	5.2mm
167	R-488	鉄釘	2.9cm～	8.3mm	5.0mm
168	R-494	鉄釘	2.0cm～	—	4.6mm
169	R-491	鉄釘	3.7cm～	—	4.7mm
170	R-487	鉄釘	2.5cm～	—	4.9mm
171	R-490	鉄釘	2.5cm～	—	4.2mm
172	R-493	鉄釘	2.8cm～	—	5.3mm
173	R-492	頭巻釘	2.3cm～	7.1mm	4.3mm

表2 ST2101出土鉄釘一覧

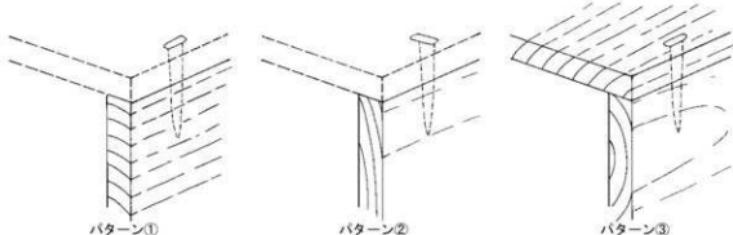


fig. 49 鉄釘使用状況模式図

## 第7節 木製品

第45・46次調査における出土木製品、木質遺物は多岐におよび、さまざまな器種等がみられる。また、属する時期も、弥生時代前期～中世におよぶ。

時期別にみると、15・16・18トレンチの第3遺構面の流路もしくは流路状堆積層より、弥生時代前期末～中期初頭に属すると考えられる矢板状の部材や先端加工材、削材などが出土している。今回の調査においては、最も古い木質遺物となる。

その他、弥生時代に属するものとしては、17トレンチ第1遺構面のSB1703、20トレンチ第2遺構面のSB2021において確認された建築部材と考えられる炭化材があげられる。いずれも焼失建物の部材と考えられ、概ね、弥生時代後期に属するものと考えられる。

古墳時代に属すると考えられる資料が、数量的には最も多い。

18トレンチの第1遺構面のSB1804においては、炭化材が数点確認されたが、遺存が悪く、形状の把握も困難な状態であることから、建築部材の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

19トレンチの第2遺構面のSD1912の出土資料が、今回の調査においては最も多い。共伴資料から、概ね、古墳時代後期に属するものと考えられるが、古墳時代中期のものも含まれる可能性がある。同遺構の資料は多種多様で、農具、容器、各種部材などが確認されている。

中世に属するものとしては、21トレンチの第1遺構面のST2102（鎌倉時代初頭～前期）において検出された木棺材、15トレンチの第1遺構面のSD1501において出土した曲物底板、板材（室町時代中期）などがあげられる。

上記資料あるいは上記以外の資料を合わせるとかなりの数量となるが、これらの資料の中で、比較的主要なものについては、樹種同定分析を行っており、別章において報告がある。

ここでは、図示し得た資料（174～189）について記しておく。これらは、19トレンチ（第46次調査）の第2遺構面において検出されたSD1912の出土資料である。概ね、古墳時代後期に属するものと考えられる。

174は槽（四脚槽）で、コウヤマキの板目材が用いられている。割り貫きで成形されており、底面に脚となる突起を4ヶ所造り出している。全長35.2cm、幅18.0cm、高さ5.6cmを測る。

175は曲柄又歛で、多くの部分が欠損する。クヌギ節の板目材が用いられている。

176は直柄横歛と考えられる。アカガシ亜属の柾目材が用いられている。長さ23.3cm、厚さ1.3cm（最大厚）を測る。

177は用途不明の木製品で、コウヤマキが用いられている。部材の両端部に突起が造り出されている。全長19.8cm、幅2.3cm、厚さ1.6cmを測る。

178は角材で、モミ属の板目材が用いられている。

179は角材で、コウヤマキの柾目材が用いられている。

180は角材で、スギの板目材が用いられており、丁寧に面取りが行われている。全長34.9cm、幅4.0cm、厚さ3.1cmを測る。

181は割板材で、コウヤマキの板目材が用いられている。厚さ0.3cmと薄く加工されている。

182はモミ属の丸太材が用いられた部材である。残存長116.0cm、径4.7cmを測る。

183は杭で、マツ属複維管束亜属の丸太材が用いられている。2～5回の打刃によって先を尖らせている。全长133.7cm、径4.0cmを測る。

184はクヌギ節の丸太材が用いられた部材である。先端部に加工痕がみられるが、尖先のためのものかは不

明である。

185は杭（丸杭）で、コナラ節の丸太材が用いられている。残存長88.4cm、径4.4cmを測る。

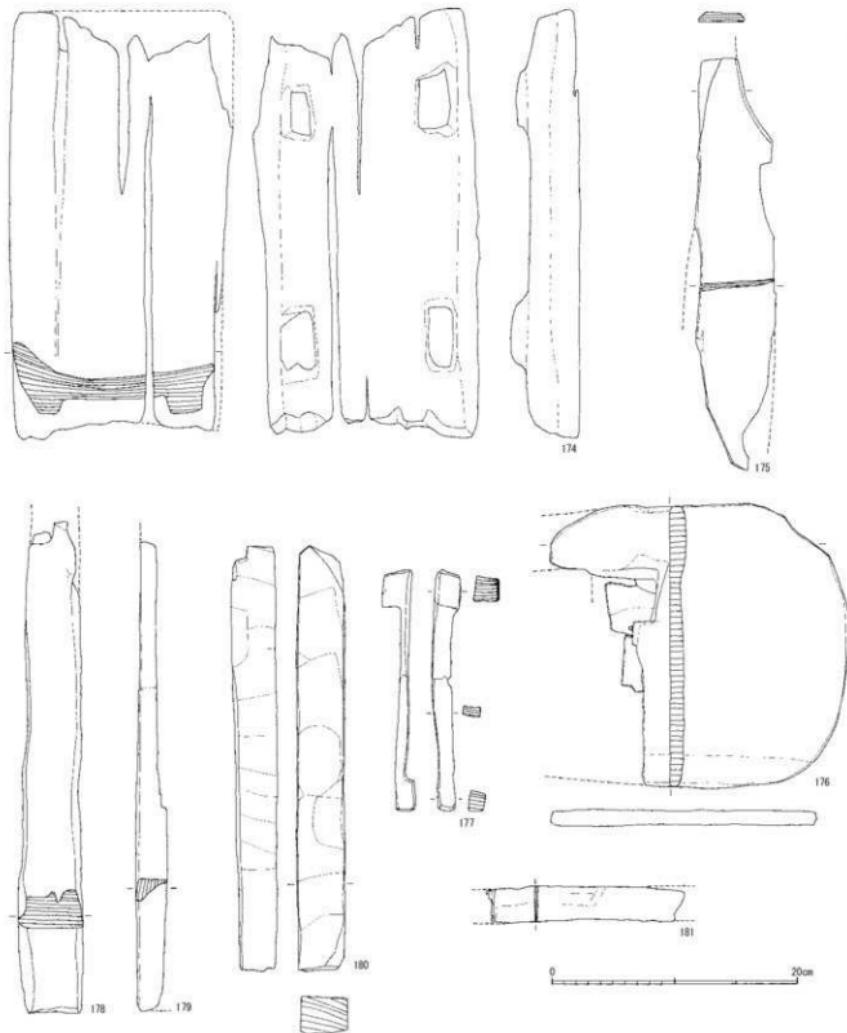


fig. 50 木製品 (SD1912) ①

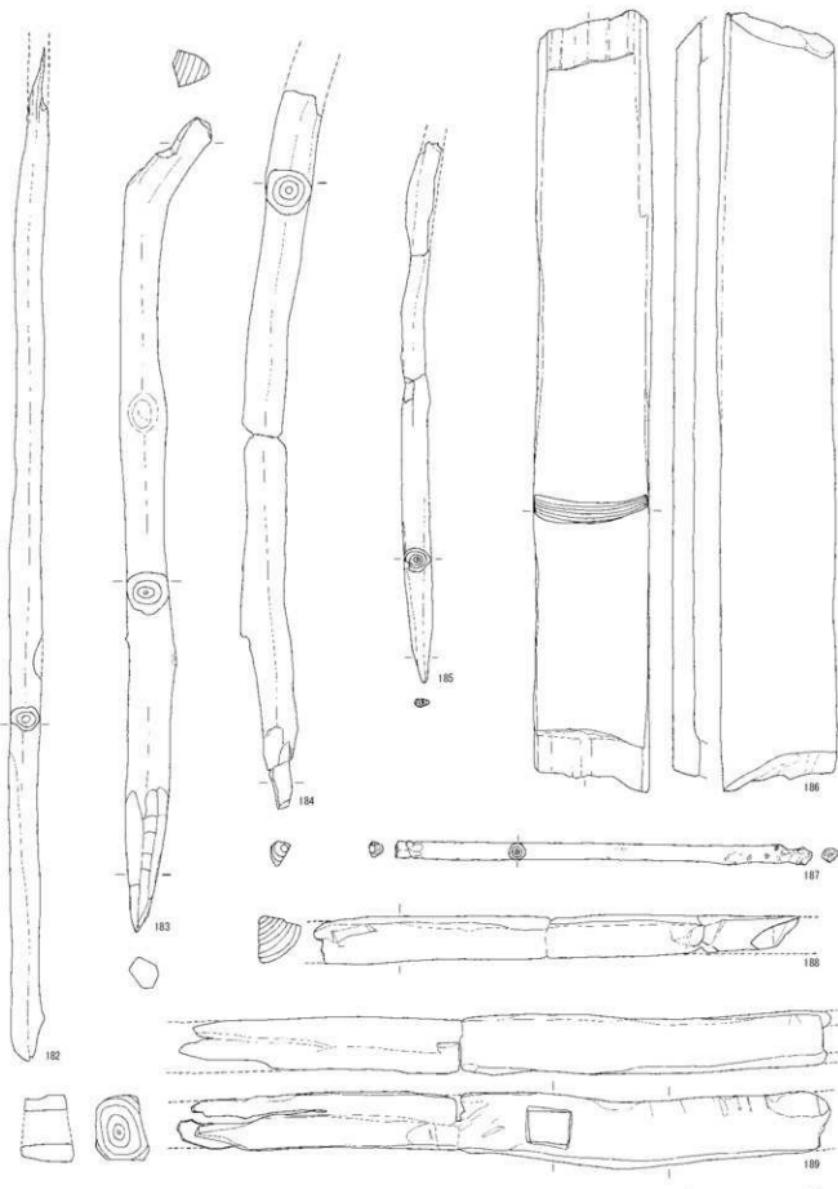


fig. 51 木製品 (SD1912) ②

186は槽と考えられる資料である。細長いタイプのもので、スギの板目材を用いて、削り貫きによって成形されている。全長128.0cm、幅19.7cm、厚さ4.4cmを測る。長辺部の側縁は、緩やかなカーブで造り出されており、両端の側縁部は欠損のため形状が不明である。

187は織機の一部と考えられる部材で、ウツギ属の丸太材が用いられている。(ほぼ加工なしの直線的な棒状の材の両端に、紐掛けのための彫り込みを有し、端面は滑らかに仕上げられている。全長68.1cm、径2.7cmを測る。

188はクヌギ節が用いられたミカン割材で、片方の端部に加工痕がみられるが、目的は不明である。

189はコナラ節の丸太材が用いられた部材である。残存長107.2cm、幅11.0cm、厚さ9.8cmを測る。2ヶ所の方向の異なる枘穴が施されており、その1つは約7.0×5.0cmを測る。枘穴は他の部材と組み合わせるためのものと推察されるが、同部材の用途は不明である。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 出合遺跡第45次出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

出合遺跡は、明石川下流右岸の台地上から沖積低地にかけて位置する。これまでの発掘調査により、古墳時代の竪穴住居址、古墳、須恵器窯跡、古代の建物跡や井戸、鎌倉時代の掘立柱建物跡などの遺構が検出されている。

本報告では、弥生時代前末期～中期初頭、古墳時代後期～飛鳥時代（6世紀後半～7世紀前半）、鎌倉時代（13世紀前半）、室町時代（15世紀）の木製品について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

#### 1. 試料

試料は、木製品6点（サンプルNo.1～6）である。いずれも樹種同定用に採取された木片を受領した。

#### 2. 分析方法

削刀を用いて木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

#### 3. 結果

樹種同定結果を表3に示す。木製品は、針葉樹4分類群（モミ属・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹1分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節）に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

##### ・モミ属（*Abies*） マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

##### ・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.） コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1～5細胞高。

##### ・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher） ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

##### ・ヒノキ科（Cupressaceae）

表3 出合遺跡第45次の樹種同定結果

サンプルNo.	出土地区	遺物名	出土遺構	時期	取上No.	種類	備考
1	Tr. 06	不明木製品	SR601	古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀後半～7世紀前半)	R-028	ヒノキ	東側最下層
2	Tr. 09	柱根	SP902	鎌倉時代前半(13世紀前半)	R-127	モミ属	
3	Tr. 15	板材	SD1501	室町時代(15世紀)	R-216	ヒノキ科	南半
4	Tr. 15	曲物底板	SD1501	室町時代(15世紀)	R-332-1	ヒノキ	南半最下粘土層
5	Tr. 15	先端加工材	洪水砂	弥生時代前期末～中期初頭	R-443	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
6	Tr. 16	矢板	SR1601	弥生時代前期末～中期初頭	R-751	コウヤマキ	写あり

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔團部は1～3列、孔團外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

#### 4. 考察

樹種同定を実施した木製品の時期は、弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀後半～7世紀前半)、鎌倉時代(13世紀前半)、室町時代(15世紀)に分けられる。これらの木製品には、合計5種類が認められた。各種類の材質をみると、針葉樹のモミ属は木理が直通で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低い。ヒノキ、ヒノキ科、コウヤマキは、木理が直通で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。広葉樹のクヌギ節は、重硬で強度が高い。

弥生時代前期末～中期初頭の資料は、先端加工材と矢板の2点がある。先端加工材はクヌギ節であり、強度を要する用途に利用された可能性がある。矢板はコウヤマキであり、加工性や耐水性によって利用されたことが推定される。

古墳時代後期～飛鳥時代の資料は、不明木製品の1点である。木製品は、長さ38.5cm、幅3cm、厚み1.5cmの板状を呈する。本資料は、ヒノキに同定され、分割等の加工性が高い木材を利用したことが推定される。

鎌倉時代前半(13世紀前半)の資料は、柱根の1点であり、モミ属に同定された。モミ属は、強度や保存性が低いが、大径木になる種類で比較的真っ直ぐに育ち、加工性も高いため、太く長い柱を製作可能である。本遺跡に比較的近い玉津田中遺跡では、鎌倉時代の柱にヒノキ、コウヤマキ、クリが確認されているが、モミ属は認められない。鎌倉時代の柱にモミ属が確認された例は、川除・藤ノ木遺跡の平安時代末～鎌倉時代初頭の資料中にヒノキやマキ属と共にモミ属が確認された例や、上沢遺跡第16次の12世紀とされる資料中にコウヤマキ、クリ、ツガ属と共に確認された例がある(伊東・山田, 2012)。これらの事例をみると、鎌倉時代の柱としてはクリ、ヒノキ、コウヤマキ、マキ属などの耐水性の高い木材の利用が多く、モミ属は利用されることが少なかったと考えられる。建物の構造、用途や柱材の位置なども樹種選択に関係する可能性があり、今後こうした点も含めて検討する必要がある。

室町時代(15世紀)の資料は、板材と曲物底板の2点であり、板材がヒノキ科、曲物底板がヒノキに同定された。いずれも板状を呈してすることから、分割加工が容易なヒノキやヒノキ科が利用されたと考えられる。

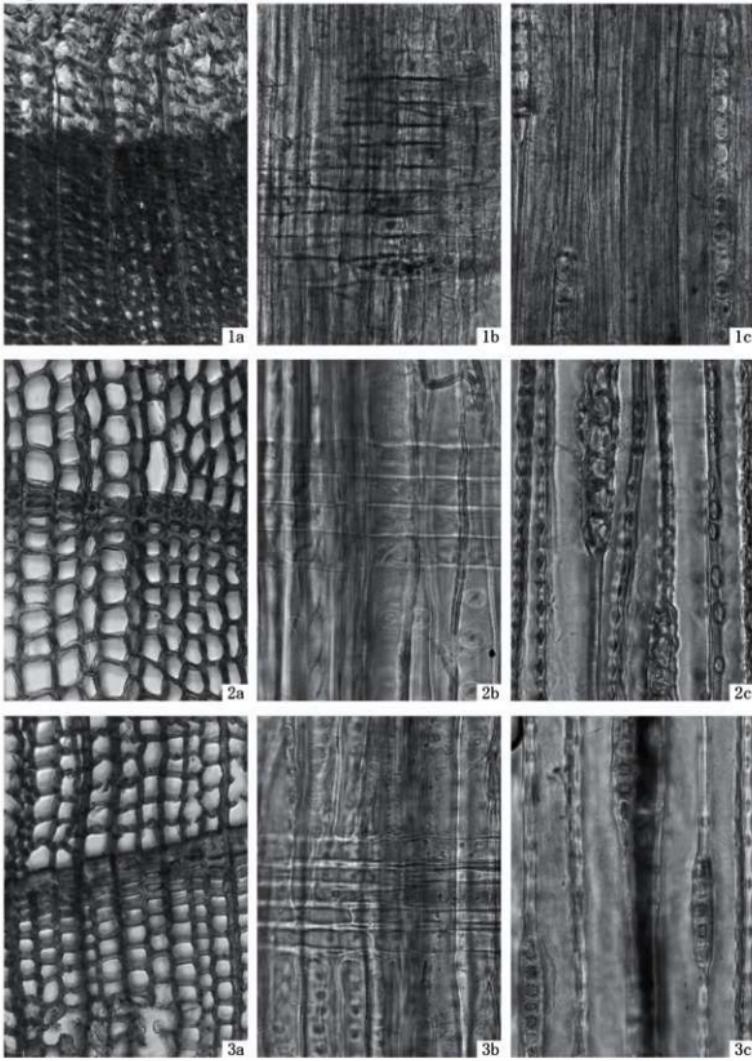
また、曲物については、耐水性等も考慮された可能性がある。

木材利用に関するデータベース(伊東・山田,2012)をみると、本地域では、15世紀頃の曲物の木材利用に関する資料は少ない。室町時代全体の資料をみると、ヒノキの利用が多く、他にスギやマツ属複維管束亜属(二葉マツ)が混じる組成が見られる。ヒノキが多い結果は、今回の結果とも調和的であり、15世紀頃もヒノキを主体とした利用であったことが推定される。

#### 引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification* ].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification* ].

fig. 52 出合遺跡第45次の木材(1)

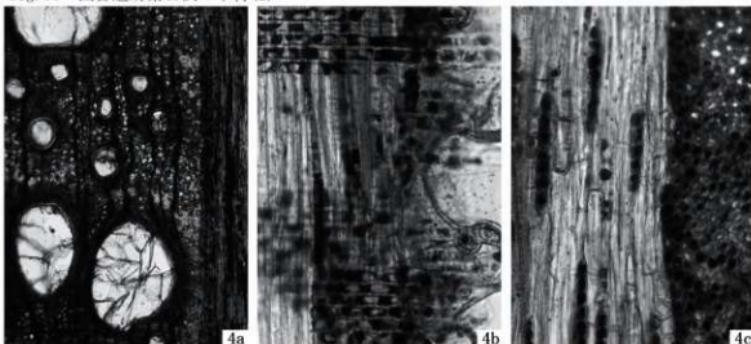


1. モミ属(サンプルNo2)
2. コウヤマキ(サンプルNo6)
3. ヒノキ(サンプルNo1)

a:木口, b:粧目, c:板目

100 μm:a  
100 μm:b,c

fig. 53 出合遺跡第45次の木材(2)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(サンプルNo.5)

a:木口, b:柾目, c:板目

200  $\mu\text{m}$ : a

100  $\mu\text{m}$ : b, c

## 第2節 出合遺跡第46次出土木製品・炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

出合遺跡は、明石川下流右岸の台地上から沖積低地にかけて位置する。これまでの発掘調査により、古墳時代の竪穴住居址、古墳、須恵器窯跡、古代の建物跡や井戸、鎌倉時代の掘立柱建物跡などの遺構が検出されている。

本報告では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居址から出土した炭化材、弥生時代前期、弥生時代～古墳時代、古墳時代後期の遺構から出土した木製品、鎌倉時代の木棺墓から出土した木棺を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、弥生時代後期および後期末、古墳時代前期の竪穴住居址から出土した炭化材27点(サンプルNo. 1～27)、弥生時代前期、弥生時代～古墳時代、古墳時代後期の木製品26点(サンプルNo. 28～53)、鎌倉時代の木棺材5点(サンプルNo. 54～58)の合計58点である。木製品と木簡は、いずれも樹種同定用に採取された木片を受領した。

### 2. 分析方法

木製品は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

### 3. 結果

樹種同定結果を表4に示す。木製品と木棺は、針葉樹5分類群(マツ属複維管束亞属・モミ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ科)と広葉樹4分類群(コナラ属コナラ亞属クヌギ節・コナラ属コナラ亞属コナラ節・コナラ属アカガシ亞属・ウツギ属)、炭化材は針葉樹1分類群(マツ属複維管束亞属)と広葉樹4分類群(コナラ属コナラ亞属クヌギ節・コナラ属コナラ亞属コナラ節・モモ)に同定された。なお、炭化材試料のサンプルNo. 18と19は、微細な炭化植物片と土壤が塊状に固結した状態である。植物片は炭化材由来の可能性があるが、植物組織がほとんど観察できず、種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急へやや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晚材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組



分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1~5細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。

・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~4細胞幅、40~100細胞高以上のものである。放射組織には鞘細胞が認められる。

・モモ (*Prunus persica* Lindley) パラ科サクラ属

環孔性散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4~5列配列し、やや急激に径を減じた後、単独または2~5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~60細胞高。

#### 4. 考察

##### (1) 壓穴住居址の建築部材

炭化した建築部材について樹種同定を実施した住居址は、弥生時代後期のSB2021、弥生時代後期末のSB1703、古墳時代前期のSB1804の3棟である。これらの炭化材は、不明2点を除く25点が4種類に同定された。確認された各種類の材質をみると、針葉樹の複維管束亞属は、軽軟であるが、強度と保存性は比較的高い。広葉樹のクヌギ節とコナラ節は、比較的重硬で強度が高い部類に入る。モモは、重硬・緻密で強度が高い。

各時期別(住居別)の種類構成を表5に示す。弥生時代後期のSB2021から出土した炭化材は、全てクヌギ節に同定され、住居の建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。弥生時代後期末のSB1703の炭化材は、14点中12点がクヌギ節、2点がコナラ節であった。コナラ節は、材質的にはクヌギ節と同様であり、弥生時代後期のSB2021と同様の木材利用と考えられる。古墳時代前期SB1804から出土した炭化材は、種類不明の2点を除く3点が複維管束亜属、クヌギ節、モモに同定された。クヌギ節が利用されている点や比較的強度の高い木材を利用している点は弥生時代後期および後期末の住居址と同様であるが、種類構成が複雑になる傾向があり、弥生時代後期および後期末の住居址とは木材利用が異なる。

木材利用の背景には、周辺植生の変化、出土部位の違いなどが考えられる。なお、モモは、渡来した栽培種であり、今回の結果から本遺跡での栽培が推定される。モモについては、枝払いや収量が落ちた老木の伐採等により得られた木材を利用した可能性がある。

#### (2) 弥生時代前期～古墳時代後期の木製品

弥生時代前期～古墳時代後期の木製品は、弥生前期の割材、弥生～古墳の柱根、割杭、古墳後期の柄、織機、鍬、曲柄叉鍬、柵、杭、丸杭、割材、部材、角材、割材、丸材、用途不明がある。これらの木製品は、伊東・山田(2012)を参考にすると、工具、紡織具、農耕土木具、容器、建築部材、施設材・器具材、土木材、その他に分類される。

時期別・器種別の種類構成を表6に示す。これらの木製品には、合計8種類が認められた。炭化材に認められた種類を除く各種類の材質をみると、針葉樹のモミ属は、木理が直通で割裂性が高く、加工は容易であるが、保存性は低い。コウヤマキは木理が直通で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。スギは、木理が直通で割裂性が高く、加工は容易であるが、早材部と晚材部の材質差が大きい。広葉樹のアカガシ亜属は、重硬で強度が高い。ウツギ属は、比較的強度が高いが、小径木であり、あまり利用されない。

表5 炭化材の時期別種類構成

種類＼時期	弥生		古墳		合計
	後期	後期末	前期	建築材	
針葉樹					
複維管束亜属				1	1
広葉樹					
クヌギ節	8		12	1	21
コナラ節			2		2
モモ			1		1
その他					
不明				2	2
合計	8		14	5	27

表6 木製品の時期別・器種別種類構成

種類＼時期・器種	古墳後期										合計											
	弥生～古墳																					
	前	後	他	建	基	土	木	工	具	紡	織	農	具	容	器	土	木	施	設	その	他	
針葉樹																						
複維管束亜属																1			1	1		3
モミ属																		1	1			2
コウヤマキ																1		1			1	5
スギ																1			1			2
広葉樹																						
クヌギ節	2							1									1		2	2		9
コナラ節		1																1				3
アカガシ亜属																1						1
ウツギ属																1						1
合計	2	1	1	1	1	1	2	2	2	1	2	3	4	3	1	26						

1)器種分類は、「木の考古学」(伊東・山田, 2012)を参考にした。

工具:工具、紡織:紡織具、農具:農耕土木具、容器:容器、建築:建築部材、施設:施設材・器具材、土木:土木材、他:その他

2)錆には、錆と曲柄叉鍬が含まれる、杭には、杭と丸杭が含まれる。

弥生時代前期の試料は、割材2点であり、いずれもクヌギ節に同定された。この結果から、強度を要する用途に利用された可能性がある。

弥生時代～古墳時代の試料は、柱根1点と割杭1点の2点である。柱根はコナラ節であり、堅穴住居址の建築材と同様、強度の高い木材の選択と利用が推定される。割杭は、針葉樹のコウヤマキに同定され、分割加工が容易で耐水性の高い木材が利用されたと考えられる。

古墳時代後期の試料は、工具、紡織具、農耕土木具、容器、土木材、施設材・器具材、その他に分類できる。工具では、柄の1点があり、コウヤマキに同定された。コウヤマキは、アカガシ亜属等に比べれば強度が低いことから、低い強度でも利用可能な用途が推定される。紡織具の織機はウツギ属であった。ウツギ属は、小径木であることから、小径の木材でも利用可能な部位が推定される。また、ウツギ属は、隨が抜けて中空になりやすい特徴を持つことから、筒状の木材を利用した可能性もある。農耕土木具は、鍬と曲柄叉鍬の2点がある。鍬はアカガシ亜属、曲柄叉鍬はクヌギ節であり、共に強度の高い木材が利用されたと考えられる。古墳時代後期の本地域の分析事例をみると、鍬類は基本的にアカガシ亜属が利用されている(伊東・山田, 2012)。今回の結果から、クヌギ節もアカガシ亜属に混じて利用されたことがうかがえる。容器は、槽2点がスギとコウヤマキに同定され、加工性の高い木材が利用されたと考えられる。本地域では、玉津田中遺跡の古墳時代とされる槽にヒノキとモミ属が確認されている(伊東・山田, 2012)。スギやコウヤマキの利用は確認できないが、今回の結果から利用されていたことが推定される。土木材は、杭にマツ属複維管束亜属、丸杭にコナラ節が確認された。いずれも二次林の構成種であり、周間に生育していた樹木を杭に利用した可能性がある。施設材・器具材では、割板1点と部材2点の3点がある。割板はコウヤマキであり、分割加工が容易な樹種が利用されている。部材は、モミ属とクヌギ節であった。木材の強度等の材質が大きく異なることから、異なる用途に利用された可能性がある。その他では、角材3点、割材4点、丸材3点、用途不明1点がある。角材はモミ属、コウヤマキ、スギが確認された。樹種は異なるが、いずれも針葉樹で分割加工が容易な木材が利用されている。割材は、複維管束亜属、クヌギ節、コナラ節であった。比較的強度の高い木材が利用される傾向があり、木材の用途を反映している可能性がある。丸材は、複維管束亜属とクヌギ節であり、割材と樹種構成が似ている。用途不明は、コウヤマキであった。

### (3)鎌倉時代の木棺

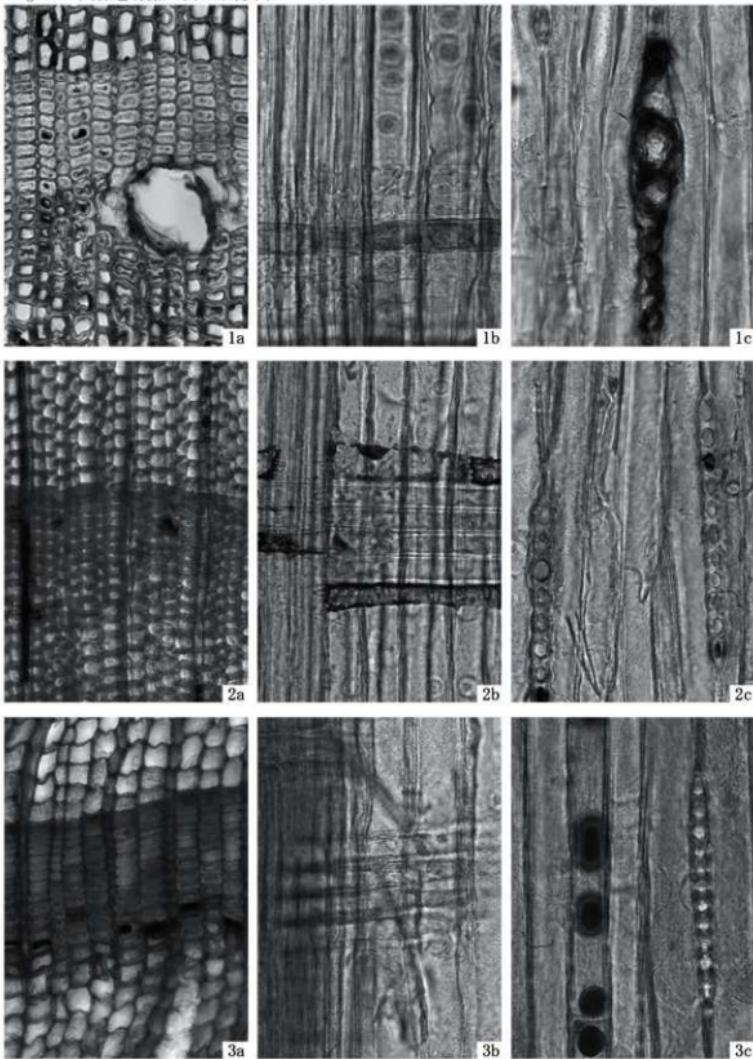
鎌倉時代(13世紀)の木棺墓であるST2102から出土した木棺は、天板、底板、側板、小口板で構成されている。樹種同定の結果、天板と底板はモミ属、小口板は東西ともヒノキ科、南側板はコウヤマキが利用されており、部位によって樹種が異なる。ヒノキ科とコウヤマキについては、耐水性・耐朽性が比較的高いが、モミ属は保存性が低く、材質的な統一性は認められない。部位によって意図的に樹種を変えたのか、単に利用可能な木材を組み合わせた結果なのかは、今回の結果のみでは判断できない。同時期の木棺について、さらに資料を蓄積する必要がある。

## 引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 頸微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.  
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.  
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.  
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

fig. 54 出合遺跡第46次の木材(1)



1. マツ属複維管東亜属(サンプルNo.42)

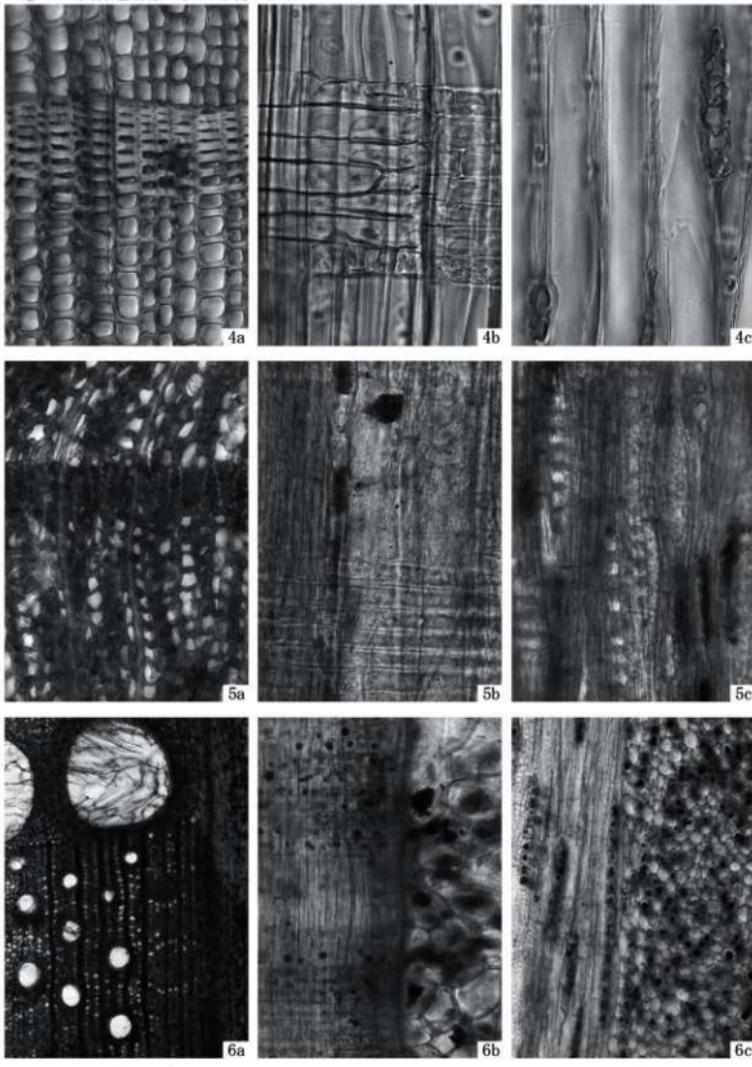
2. モミ属(サンプルNo.43)

3. スギ(サンプルNo.32)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 100  $\mu$ m : a  
— 100  $\mu$ m : b, c

fig. 55 出合遺跡第46次の木材(2)



4. コウヤマキ(サンプルNo.50)

5. ヒノキ科(サンプルNo.55)

6. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(サンプルNo.28)

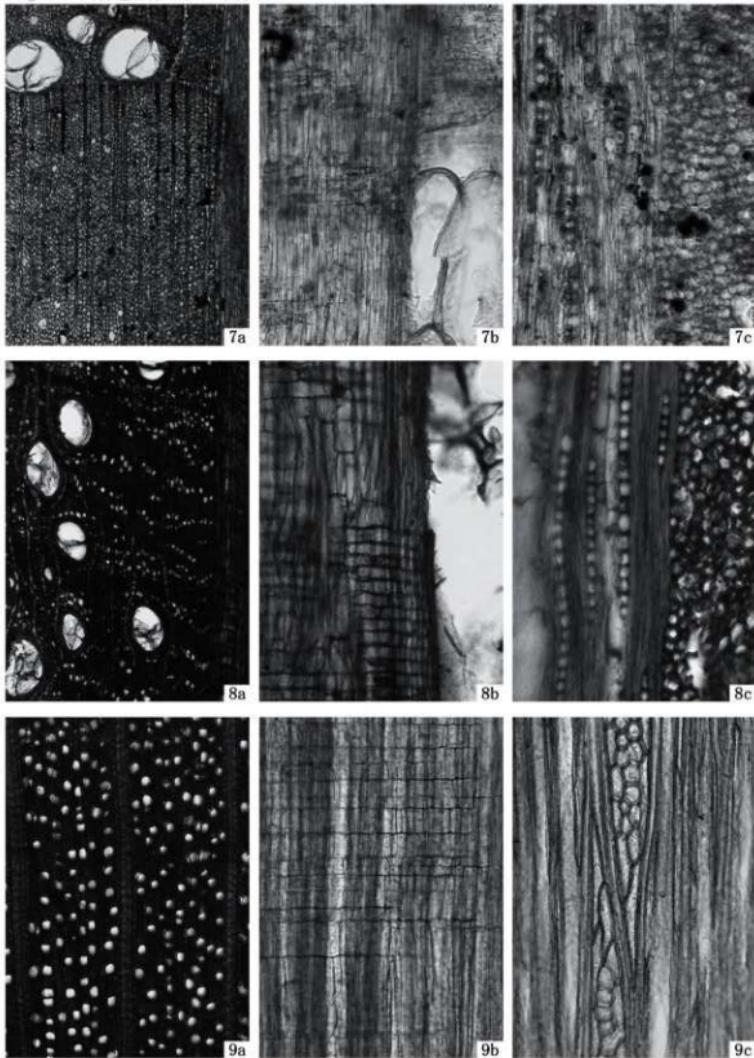
a:木口, b:柾目, c:板目

200  $\mu$  m: 6a

100  $\mu$  m: 4-5a, 6b, c

100  $\mu$  m: 4-5b, c

fig. 56 出合遺跡第46次の木材(3)



7. コナラ属コナラ亜属コナラ節(サンプルNo.35)

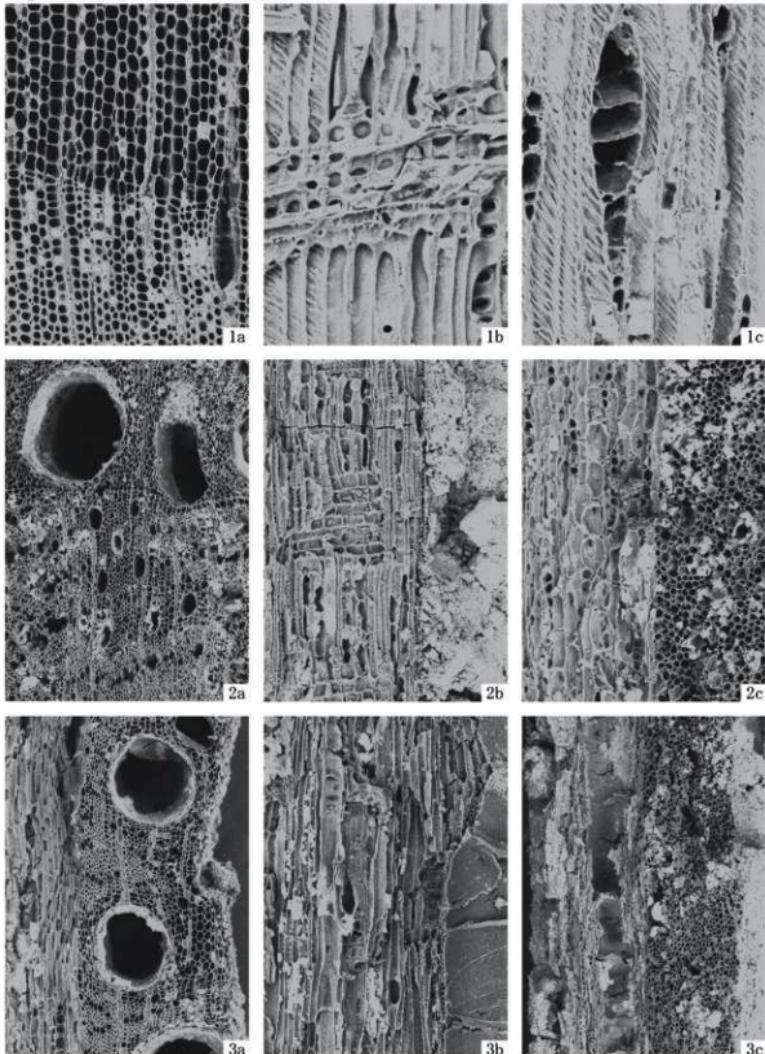
8. コナラ属アカガシ亜属(サンプルNo.39)

9. ウツギ属(サンプルNo.37)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200  $\mu$ m : a  
— 100  $\mu$ m : b, c

fig. 57 出合遺跡第46次の炭化材(1)

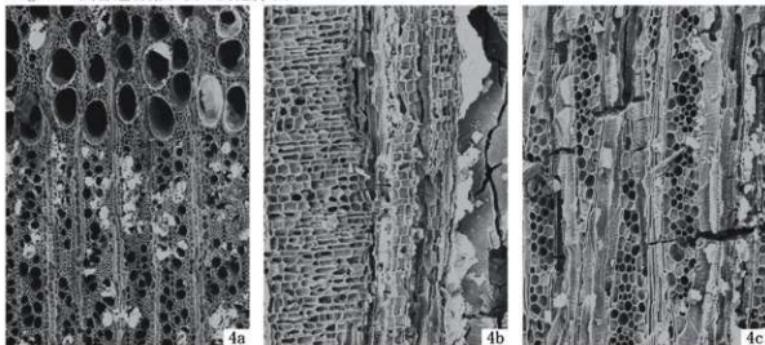


1. マツ属複維管東亜属(サンプルNo.15)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(サンプルNo.20)
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(サンプルNo.12)

a:木口, b:柾目, c:板目

200  $\mu$  m: 2-3a  
200  $\mu$  m: 1a, 2-3b, c  
100  $\mu$  m: 1b, c

fig. 58 出合遺跡第46次の炭化材(2)



4. モモ(サンプルNo.16)  
a:木口, b:柾目, c:板目

## 第5章　まとめ

### 第1節　遺構について

今回の調査（第45・46次調査）において検出された遺構は多岐におよび、弥生時代前期～中世の時期のものが確認されている。

同時期において断続的に集落が営まれた形跡と理解できるが、時期別にみると、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、平安時代後期～鎌倉時代前期に属する遺構が比較的多く、盛行期にあたる時期と推察される。

以下、上記の4時期を基軸とした考察を行う。

#### （1）弥生時代前期末～中期初頭

自然流路や流路状の堆積層などが数箇所もみられ、それらに挟まれた微高地において遺構が確認された。調査地全域の中央部と東半部において確認されたおり、19トレンチの中央部～西半部、16トレンチ北半部から20トレンチのほぼ全城、16トレンチの南端部がそのエリアにあたる。

堅穴建物は16トレンチ北半部から20トレンチのエリアにおいて、3棟（SB1603・1604・2031）検出しており、また、多くの遺物がまとまって出土した土坑なども数基確認していることから、集落の中核かその周辺の一部が確認できたものと推測できる。

過去の合出遺跡の調査においては、同時期に属する資料は少なく、様相が窺い知ることができる事例として、近年の第34次調査があげられる。しかしながら、同調査においては、溝あるいは土坑が確認され、遺物も土器類を中心に数多く出土した程度で、遺構、遺物ともに数多く確認された点において、大きな成果と言えよう。

#### （2）弥生時代後期～古墳時代前期

合出遺跡における同時期に属する遺構は、沖積地のエリアにおいては、多くの箇所において確認されており、ある程度の規模を有する集落の存在が肯定できるが、堅穴建物を伴った事例がほとんどなく、今回の調査成果は実相を検証する上では重要と考えられる。

同時期の遺構は、調査地のほぼ全城において確認されているが、特に14トレンチ～18トレンチ西半部、19トレンチ東半部以東において密度が高い。

堅穴建物については、遺物が少量のものや遺存が悪いものも存在することから、不明確な要素も多いが、16トレンチで1棟（SB1602）、17トレンチで7棟〔14トレンチに連続するものも含まれる〕（SB1701・1702・1703・1704・1705・1706・1707）、18トレンチで3棟（SB1801・1803・1804）、20トレンチで1棟（SB2021）、21トレンチで2棟（SB2121・2122）検出されている。また、遺物がまとまって出土する溝（SD1619・1811・1812・2025）なども存在する点などから、調査地が集落内の中心かあるいはその周辺部に該当する可能性が高いと推察される。また、合出遺跡はその範囲が広範であることから、遺跡全体がひとつの集落であるか否かは不明であるが、今回の調査区域が遺跡の北縁部の中核エリアであることは、ほぼ間違いないものと考えられる。

#### （3）古墳時代中期～後期

合出遺跡においては、古墳時代前末における合出窯の操業開始を皮切りに、亀塚古墳（出土1号墳）をはじめとする合出古墳群の築造等々、ひとつのピークと考えられるような時期に入り、同時期に属する資料が多い。

同時期の遺構は、主として、18トレンチ中央部、19トレンチ中央部～21トレンチにおいて確認されている。検出遺構においては、特に溝が多く、SD1404・1803・1804・1912・2003・2101・2102などがあげられる。

SD1912（19トレンチ中央部）は大規模な流路に近い溝で、土器類の他に、農具等を含む木製品類も数多く確認されており、また、他の溝もしくは溝状遺構についても、比較的出土遺物が多くみられる点などから、調査地が集落の一端部にあたることはほぼ明確である。

また、建物については不明確な点が多く、同時期に該当するピットも数ヶ所確認できるものの、建物としてのまとまりは不明である。さらに、18トレンチ中央部において検出されたSB1802は、同時期の堅穴建物である可能性があるものの、遺存が悪く、出土遺物も少量であることから、詳細を確認するに至らなかった。

#### （4）平安時代後期～鎌倉時代前期

同時期に属する遺構は、過去の出土遺跡の調査において数多く確認されており、調査地のほぼ全域において確認ができるものの、数量的に多いのが、調査地の東端部にあたる20トレンチ東半部～22トレンチ東半部で、掘立柱建物5棟（SH2001・2101・2201・2202・2203）をはじめ、木棺墓3基（ST2001・2101・2102）や建物に付随する施設と考えられる土坑（SK2103・2104・2106など）などを検出した。

同時期の遺構の密集範囲はさらに北東もしくは南にひろがるものと推測され、集落内のひとつの中核エリアと考えられる。

### 第2節 出土遺物について

前節（遺構の項）において4時期の盛行期（弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、平安時代後期～鎌倉時代前期）を示したが、出土遺物についても数量的には同時期のものが多い。遺物の大半は土器類であるが、石器類の他、金属製品（fig.49・図版27・写真5）や木製品（fig.50、51・図版28）なども含まれる。

以下、上記の時期について、出土遺物の概要について記す。

#### （1）弥生時代前期末～中期初頭

同時期に属する資料は、土器類が大半となるが、石包丁（129）なども存在する。

土器類は弥生土器の一般的な様式で捉えると、I様式からII様式への過渡期にあたると推察され、近年の研究による東播磨地域の弥生土器編年（篠宮分類）によれば、I-3もしくは次段階のII-1型式に該当するものと考えられる。

出土した土器類の器種において数量的に多いのが壺と甕で、これらの事例に基づいて、若干記しておく。

壺の頸部や体部、甕の体部上位に施されるヘラ描沈線の多条化が、I期からII期への過渡期の指標と捉えられていることから、今回の調査地における資料の多くは、II-1型式に属するものと考えられる。一方で、SD1934の出土資料のように、同型式に属する資料（77）と若干古い要素がみられる資料（75）が共伴する事例もみられることなどから、一括資料が多い今回の調査における事例資料は、前期から中期に向けての土器資料を検証する上で、有効となり得るものと考えられる。

また、播磨地域においては、同時期の資料が少ない点、広口壺の事例が特に少ない点などを考慮した場合、今後における土器研究の大きな一助となるものと期待したい。

#### （2）弥生時代後期～古墳時代前期

同時期に属する資料も大半が土器類であるが、堅穴建物の建築部材と考えられる炭化材や金属製品（SD1812出土の鉄製鉗、SB2021出土の鉄鏃）も確認されている。

時期を確認できる資料は、弥生時代後期後半以降のもので、同時期に続く庄内式併行期、次の布留式併行期に属するものが確認されている。

ここでは、土器類の器種も多種多様であることから、個別の検討は割愛して、一括性の高い資料について、大まかな時期比定に基づき、若干記しておく。

出合遺跡の所在する明石川流域においては、弥生時代後期後半～庄内式併行期に属する資料は多く、土器研究の主要な対象とされている。今回の調査においても、SB1703（弥生時代後期後半～末）、SB1706（庄内式併行期古～中段階）にほぼ該当する資料がみられる。

一方で、周辺遺跡（玉津田中遺跡、吉田南遺跡など）において出土数が多い庄内式併行期中～新段階の資料については、ほとんどみられず、逆に新段階以降の資料が多くみられることが特色である。

今回の調査においては、SD2025（庄内式併行期新段階～布留式併行期古段階）、SD1811（布留式併行期古段階）、SD1619（布留式併行期古段階）、SB1804（布留式併行期中段階）などがあげられ、（ほぼこれら順で型式的変遷が確認できる。

同地域において、布留式併行期に該当する資料が比較的まとまってみられる遺跡は、これまで、吉田南遺跡以外は確認されておらず、また、ひとつの調査において、ある程度の時系列的変遷がうかがえるケースも稀少と考えられ、古墳出現期の集落様相を検討する上で重要な資料と言えよう。

#### （3）古墳時代中期～後期

同時期に属する資料は、土師器および須恵器などの土器類の他に、木製品類も数多くみられる。須恵器の型式でTR23～TK47型式（概ね5世紀後半～末）に該当するものが多く、概ね中期末～後期初頭の時期にあたると考えられる。TK23～TK47型式に該当する時期は、出合古墳群が盛行する時期にもあたり、その関連がうかがえる。

多くの資料が確認されたSD1912（19トレンチ第2遺構面）についても、中期末～後期初頭に属するものが多く含まれるもの、後期末頃のものまで確認されている。また、土器類とともに多くの木製品類もみられ、農具（鋤類）や容器（槽）なども確認されている。また、器面をミガキ等で丁寧に仕上げられた塊形土器（55・56）や大型の高杯（63）など、日常雜器以外の用途が想定できるものも確認されており、その特異性もうかがえる。

#### （4）平安時代後期～鎌倉時代前期

同時期に属する資料は、遺構内や遺構面を覆う遺物包含層などから確認されており、特に、3基の木棺墓（ST2001・2101・2102）のものは、一括資料として有効な資料である。

土器類は土師器、須恵器が大半であるが、ST2001より青白磁合子（83）が出土みられ、遺物包含層中より白磁などの陶磁器類や瓦器の細片も確認されている。

これらの資料の多くは、東播系須恵器の編年（森田分類）の第II期に該当する時期のものと考えられ、先述の木棺墓の資料については、ST2101が第II期第1段階、ST2001が同第1～2段階、ST2102が同第2段階に、概ね属するものと推測される。

具体的な時期で示すならば、12世紀中葉～13世紀初頭に該当し、明石川流域における事例も増加する時期にあたり、諸相解明への有力な資料となり得る。

### 第3節 弥生時代の出合遺跡について

今回の調査においてはほとんど確認できなかったが、弥生時代中期の遺構、遺物も、過去の調査において数多く検出しておらず、衰退期を有するものの、弥生時代のはば全般にわたって集落が営まれている。それゆえ、弥生時代の遺跡が多く所在する明石川流域においても、断続的にではあるが、長期間にわたってと存続し、集落等の研究においてもさまざまな指標とされてきた遺跡である。

弥生時代の集落遺跡を考える上で、「拠点集落」という言葉がよく用いられる。同地域においては、前期

が新方遺跡、中期が新方遺跡、玉津田中遺跡、後期が玉津田中遺跡、吉田南遺跡といったところであろうか。一方、出合遺跡については、調査成果（今回の調査成果も合わせて）から検証した場合、いずれの時期においても比較的大規模な集落が想定できるが、飛躍的な発展がみられないまま、弥生時代を経過する感が否めない。つまり、集落論でよく使われる「母村」に対しての「子村」あるいは「分村」に該当する遺跡とも考えられ、出合遺跡の集落としての立場を垣間見ることができる。概して、拠点集落に付随する「分村的集落」としての位置づけをここでは提起しておきたい。

### 主要参考文献

- 吉田・片山遺跡調査班1977『吉田南遺跡第7次現地説明会資料』  
神戸市教育委員会編1989～1996・1999・2000～2003・2006・2008～2012『昭和61～63、平成元～5・8・12・15・17～21年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
鎌木義昌・龜田修一1992「出合遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県  
丸山 葉1992「弥生時代の集落の動態—播磨国境地域—」『究究』15周年記念論文集編集委員会  
富山直人編1994『出合遺跡 第27次発掘調査報告書』神戸市教育委員会  
兵庫県教育委員会編1994～1996『神戸市西区・玉津田中遺跡』第1～6分冊 兵庫県教育委員会  
森田 稔1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会  
中居さやか編2006『吉田南遺跡 第17・18次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会  
森岡秀人・西村 歩2006『古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター  
篠宮 正2007「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年』・播磨編・大手前大学史学研究所  
龜田修一2008「播磨出土銅鏡の検討」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会  
補宜田佳男2010『明石川流域の弥生時代集落』『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋蔵行政のはざまで—』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会  
阿部功編2011『出合遺跡 第34・35・37・40・43・44次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

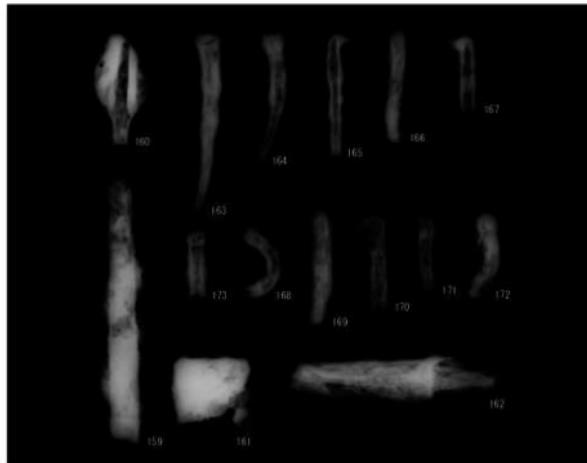


写真5 出土鉄製品X線透過像